

Title	慶應義塾所在近世文人書簡筆跡類総覧(四):三田メディアセンター貴重書室(その三)
Sub Title	Transcripts of autographic letters and calligraphy works of pre-modern Japanese scholars and poets housed in Keio University (4) : the rare book room in Mita media center (part3)
Author	堀川, 貴司(Horikawa, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2020
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.55 (2020. ) ,p.243- 396
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20200000-0243">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20200000-0243</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 慶應義塾所在近世文人書簡筆跡類総覧(四)

### 三田メデアセンター貴重書室(その三)

堀川 貴 司

はじめに

第五十一輯(二〇一七年二月刊)に掲載した「(その二)」に続いて、図書館貴重書室所蔵の古賀家関係資料を紹介する。別に購入されたとおぼしい57X/46/2を除いて、今回は早くに整理されていたものである。おそらくはマクリの状態で入ってきたものを、裏打の後、大まかに分類し、一旦は直接紙縫綴(綴穴の跡がある)したのを解体、タテ四五糎前後、ヨコ一二〇糎前後の洋紙厚紙を二つ折りしたものに添付して綴じ合わせ、アルバム状にして保存していたのだろう。しかし、資料を圧迫す

る等の理由からか、現状は、綴じを外し、薄い和紙を間紙として挿入、中性紙保存箱二箱に入れて保管している。

全体は次の通り(図書館整理書名および頁数を記す)。

26X/6/1 古賀侗庵(小太郎)・古賀茶溪(謹一郎)宛幕府文書 五二枚

老中等から古賀侗庵・謹堂宛に出された登城催促状・褒状等のまとまり。これのみもとの姿のまま袋に収めてある。

26X/7/1 古賀家伝来名所古絵図類 一一枚

1瓦版 文政三年(一八二〇)三月、鯨が豆州河津沖に現れたことを報じる。山型十叶、○の中に文、の二つの版元印がある。

2「片鎌之槍(大サ如図)」と題する模写図。

3 「短刀〈大サ如図〉」「韓鎌〈大サ如図〉」と題する模写図。

短刀は「銘」明應七年八月日備州長船祐定」とある。

4 嘉永五年（一八五二）江戸暦「鱗形屋小兵衛」もと包紙と

おぼしき紙も貼り込まれ、「封／嘉永四〈辛〉亥年十一月晦  
日致之／嘉永五〈壬〉子年／暦／能勢」と上書がある。

5 一枚刷「武藏國多摩郡百草邑松連寺十八景」。各景の名称と

解説を記し、欄外に「四方の諸君子詩歌連俳を投し給ふ事を  
希ふ」と呼びかける。

6 一枚刷「信州筑摩郡木曾庄浦島舊跡 寢覺山臨川寺圖」。

7 一枚刷（藍色）「周防岩國錦帶橋真景」（〔右國〕…三鹽屋仲兵衛）

8 一枚刷（藍色）「周南佐壁嶺」和文の長い前書を伴う大田南  
畝の七言律詩を載せる。

9 一枚刷「畧録記」下野足利郡行道山（淨因寺）の縁起を記す。

文中、文化元年（一八〇四）迄幾年との記述あり。

10 一枚刷（多色）「安藝巖嶋鳴御神社圖」（宮島…船津屋源吉）

嘉永二年（一八四九）刊。

11 一枚刷 摺針峠を近景に、比良山・今津等を遠景にした琵琶

湖図。「雪舟十世長等潤寫」「望湖堂板」とある。

26X/8/1 古賀家伝来古絵図類 一〇枚

1 彩色図（写）「井ノ口村暗溝開鑿図」但馬生野に発する市川

中流の播磨井ノ口村から暗渠を通し八幡新村へ農業用水を供  
給した工事の図。「日本歴史地名大系」兵庫県・八幡新村に

は「寛政元年（一七八九）辻川村（現福岡町）の三木甚右衛  
門が田原井に新たな水口を造り、山をくりぬいて当村に水を

送る工事を完成させた（三木甚右衛門顕彰碑銘）」とあるの  
に該当するか。

2 彩色図（写）「新潟圖〈杉浦生／所贈〉」資料名は端裏書（伺  
庵筆か）による。

3 彩色図（写）「不明風景図」中央に川、その周辺は田畑。上

下端は山並み。上半分には城山・城下・寺社を左に、薬師を  
右に描き、下半分は中央やや左に別荘を逆向きに（川を挟ん

で向かい合わせに）描く。

4 墨・薄墨二色図（写）「富士山洞穴図」上が東の横長の図で、

南に富士山、北に「当六月朔日見付候穴口」として、「岩戸  
入口」および洞穴内の様子が描かれる。

5 彩色図（写）「大塩平八郎の乱関係図」東西町奉行所近辺の

絵図に、朱で「賊」および「東御奉行所」の移動経路が書き  
入れられている。

6 彩色図(写)〔せふげ山図〕 桜であろうか、花盛りの山と水  
面が描かれ、山頂脇に貼り紙で「せふげ山」と記されている。

7 一枚刷〔松平定信和歌懷紙〕「山家のこゝろをよめる／楽  
翁／世にかよふ夢そあやしき／やまさとに入しこゝろは／う  
つ、なれとも／椎柴のおりくみれは／もとすみし里はふも  
との／雲のひとつら」(料紙薄墨染)

8 一枚刷〔松平定信和歌懷紙〕「春雨をよめる／楽翁／うち  
しめるかねの／ひ、きに春のよの／霞に／こめて／春雨／  
そ／ふる／夕月の／ありかは／それと／みえなから／音せぬ  
／雨の／おとを／きく／かな」(散らし書き)

9 墨・薄墨二色図(写)〔茶道具図自賛〕「やかましき／浮世  
の／塵を／払ひけり／月雪華の／三つは／帚木に／県居翁自  
賛」羽箒・蓋置と三つ重なり合う円相が描かれる。右下に  
朱陽円印「涵(?)月ノ軒」あり。賀茂真淵の自賛画の写しか。  
10 彩色図(写)〔海辺図〕 中央の小島に貼り紙で「沖ノかるも」  
とある。左下に落款「探甫筆(朱陽円印「守孝」)」とあり、  
狩野派の画家であろうか。

以上三点は翻刻の対象外とし、今回は以下一四点を翻刻する。

なお、通し番号は翻刻者が内容を勘案して付けたため、図書館  
の枚数と一致していない場合がある。

- 26X/9/1 古賀家古文書 一枚(通し番号一〇三)  
26X/17/1 古賀侗菴書簡 一枚(一四〇二四)  
26X/23/1 古賀侗菴宛文書 五枚(二五〇二九)  
26X/24/1 古賀精里奉寿六十初度詩文 三枚(三〇〇三三)  
26X/25/1 古賀氏宛岡田啓詩文 七枚(三三〇三九)  
26X/26/1 古賀侗菴詩文集 五八枚(四〇〇九二)  
26X/27/1 古賀精里宛詩文集 一四枚(九三〇一〇六)  
26X/28/1 古賀家文書断片 六枚(一〇七〇一一)  
26X/29/5 古賀家宛書簡 八二枚(一一二〇三八、一三九〇四  
二、一四三〇四九、一五〇〇七五、一七六〇一九二)  
26X/30/2 古賀氏関係詩文集 七六枚(一九三〇三九、二三  
〇〇二六一)  
26X/31/1 古賀侗菴古賀茶溪宛釋元寔詩文 六枚(二六二〇二  
六七)  
26X/32/1 古賀茶溪(謹堂)宛詩文 一枚(二六八〇二七六)  
26X/33/1 奉送古賀精里接迎朝鮮使對馬行詩文 一枚(二七  
七〇二八八)

57X/46/2 「古賀侗庵尺牘」二軸（二八九・二九〇）

凡例

\* 取り上げた作品は順に通し番号を付す。物理的に分かれている場合でも内容が連続していると認められるものは一つの番号を与える。ただし、離れて貼られている場合はそれぞれに番号を与え、翻字は合わせて行う。

\* 作品名は、書簡の場合「某書簡（某宛、某年某月某日付）」、「漢詩文等の場合」「某詩箋」などと私に命名し、自筆でないと思えられる場合は「（写）」を添える。

\* 書誌は本紙の料紙（楮素紙の場合は記述しない）・寸法、箱書・附属文書を主とする。

\* 解題は、成立年代、筆者の詩文集等所収作品の場合はそれと本文異同等を主とするが、今回はほぼ省略に従った。ただし、古賀侗庵の作品については、西尾市岩瀬文庫蔵『侗庵詩鈔』（二七冊本）および『侗庵文集』所収が確認されたものは、それにより制作年代等を記した。なお本文中の印記は解題に記す。  
\* 翻刻は、原則として現在通行の字体を用い、句読点・ナカゲ口・カギ括弧を補う。小字は（ ）で囲い、虫損・破損等によ

り欠けている文字は「□」「┐」、難読の文字は「■」とし、推読可能な場合は右傍に（ ）にて示す。明らかな誤字脱字の場合も同様に（ ）にて示す。特に必要な場合は原本の改行や字配りのとおりとし、その他は原則としてオイコミにするが、台頭・平出は注記、闕字は原文通り、ミセケチ等も注記する。

26X/9/1

一 古賀侗庵詩箋（題画梅）

三一・八×五八・一 種。薄茶色染画仙紙風料紙。上部に部分的な欠損がある。『詩鈔』によれば天保六年（一八三五）作「題画梅」で、第一句「保」を「守」に作る。欠損部分も残画および同書により推測した。引首印「古心堂」、落款印「劉氏／季曄」  
「蠖／屈居」。

（印）

僊標長自保幽貞、開傍青山遠市声、臨水數枝斜有致、隔煙孤□<sub>明</sub>  
迥含情、水心豈為□<sub>候カ</sub>霜變、瑤質軫迎寒月清、底事靈均猶未愛、  
群芳無一可齊名

侗菴燠（印）（印）

二 古賀侗庵詩箋草稿

三四・五×四八・〇糲。杉原か。文政一〇年（一八二七）二月將軍家齊が太政大臣に、三月、世子家慶が従一位に叙任された時の賀詩。七言律詩であるが、平出・台頭がおびただしいので、原本の字配りどおりに翻字した。

大君殿下

儲君殿下

八柄極シテ崇ヲ、

三槐挺レ秀ヲ。〈臣煜〉不レ勝〔踏舞之至リニ、（従右傍「ヌキン」

ミセケチ）

謹<sup>テ</sup>奉<sup>シ</sup>折楊一闕<sup>ヲ</sup>、上<sup>二</sup>ツル

千秋万歳之寿<sup>ヲ</sup>。

〈臣〉古賀〈煜〉頓首再拜

申<sup>ネ</sup>錫<sup>フ</sup>鳳<sup>輪</sup>〔從<sup>ス</sup>九霄〕、祥雲翥<sup>トシテ</sup>繞<sup>テ</sup>（従右下「リ」

ミセケチ）

レ城ヲ饒シ、

黄扉春敵<sup>ニシテ</sup> 鷺行正<sup>シク</sup>、（敞右傍「ホカラカ」ミセケチ）

紫殿風柔<sup>ニシテ</sup> 儼樂調<sup>フ</sup>、

補袞ノ峻階恢<sup>ニシ</sup>（恢右傍「ヲホヒ」ミセケチ）

祖業<sup>ヲ</sup>、

和羹ノ不績冠<sup>ニ</sup>（一作補袞鴻敷和羹峻段）

天朝<sup>ニ</sup>、

末臣長<sup>ク</sup>沐<sup>ス</sup>雍熙ノ化、漫<sup>ニ</sup>效<sup>フ</sup>堯民（效右傍「ナラ」ミセケチ）

日出ノ詠

三 古賀侗庵奉称賀箋包紙

五五・七×四三・七糲。奉書。包紙のみ存。タテ五つ折、ウ

ハ書のある左端のみ汚れ。本紙不明（虫損の具合からみて、四・

五以外のものか）。

奉称賀箋 〈古賀小太郎〉

四 古賀侗庵奉称賀箋草稿

四三・九×五五・一糲。奉書。タテ七つ折。天保一四年（一

八四三）四月、徳川家慶が日光に社参、御神忌（徳川家康忌日）

の儀式を終えて江戸に戻ったことを賀する文章。慶應義塾図書

館藏『侗庵文集』(224/467/9) 第五冊に「大駕日光山謁 廟還都賀表裏」が二篇収められ、本草稿の前段階、前々段階を示す。これも原本の字配りとおりに翻字する。ミセケチ傍書は朱書。

〔臣〕古賀〔煜〕誠欽誠抃頓首頓首言

仙杖森嚴、格

廟之儀式舉、

闕宮赫奕、上

陵之典爰成。承

祖德之無疆、仰

神明如在上、民情焯厚、天貺降休、至誠貫乎幽明、達孝彰於遙邇。

〔臣煜〕誠欽誠抃頓首頓首恭惟、

列祖文綬武緯、建極執中、睿智通神、英猷邁古。殫鱗鯢乎東海、戮麋

竄於中州。定乎千歲之擾攘、乾清坤謐。拯衆兆民之焚溺、春養

海涵。既騎箕尾於高穹、猶被憲章乎永世。於焉

列朝續緒、積德累仁、

奕葉守文(肯堂をミセケチ)、重規晷矩。今怡鼎新之会、最

深善述(繩武をミセケチ)之心。臺臺励精、優

優敷政、慕

遺型於弓劍、思

鴻則於羹牆。將致追孝於明禋、寧辭迢遙之脩路。時則化日如

年、薰風清道、毛野原田綠秀、鬢峰并木翠深。七萃馳驅、万乘電

發、彤弓画戟高輝映於日刃、龍旒蜺旌遙翻翻乎霞外。幾隊熊

罷警衛、野蕤万竈之煙、九州牧伯陪隨、山簇千廬之帳。既而鬱

鬯芬辭、明粢鑄潔。九奠之章云備、六成之樂全陳。当斯際也、

靈威肅饗、

神德汪洋。飄若以臨、倏然有見。駿奔執豆、咸懷尚敬之情、顯相奉

璋、尽沐靡爭之化。夫孝莫重乎奉先、礼孰加于承祭。崇神祇敬、

故風教遍於遐荒、尊祖篤誠、斯惠施覃於黎庶。維茲、祀事実、表

德輝、多方堅(固をミセケチ)就日之忱、率土慰望竟之願。豈不

足以恢丕基而

更廓、紹前烈而益宏也哉。〔臣煜〕颺鼠技疎、鸞鳩志陋、才難希於

小相、名久伍(夙籛をミセケチ)乎鯁生。值熙暉之盛時、固(素

をミセケチ)為欣幸、

觀肅雍之殷祭、

尤切瞻依。雖知蕩々之難名、竊裁詹々之短述。不任激切屏營

之至、奉牋称賀以聞。〔臣煜〕誠欽誠抃頓首頓首謹言。

天保十四年

〔臣煜〕上

五 古賀侗庵奉稱賀箋草稿

三四・四×四九・〇糶。杉原か。四のミセケチ訂正を本文に反映させたもの。字配り原本通り。

仙杖森蔽、格

廟之儀式萃、

闕宮赫奕、上

陵之典爰成。承

祖德之無疆、仰

神明如在上、民情焯厚、天貺降休、至誠貫乎幽明、達孝彰於遠邇。

〔臣煜〕誠欲誠抃頓首頓首恭惟

列祖文粹武緯、建極執中、睿智通神、英猷邁古。殫鱣鮒乎東海、戮鏡

竊於中州。定半千歲之擾攘、乾清坤謐、拯衆兆民之焚溺、春養

海涵。既騎箕尾於高穹、猶被憲章乎永世。於焉

列朝繼緒、積德累仁、

奕葉守文、重規疊矩。今怡鼎新之會、最深善述之心。臺臺励精、優

優敷政、慕

遺型於弓劍、思

鴻則於羹臠。將致追孝於明禋、寧辭迢遙之脩路。時則化日如

年、薰風清道、毛野原田綠秀、鬢峰并木翠深。七萃馳馳、万乘電

發、彤弓画戟高輝映於日辺、龍旄蜺旌遙翻翻乎霞外。幾隊熊

罷警衛、野凝万竈之煙、九州牧伯陪隨、山簇千廬之帳。既而鬱

鬯芬馥、明燦鑄潔。九奠之章云備、六成之樂全陳。当斯際也、

靈威胥饗、

神德汪洋。顯若以臨、儼然有見。駿奔執豆、咸懷尚敬之情、顯相奉

璋、尺沐靡争之化。夫孝莫重乎奉先、礼孰加于承祭。崇神祇敬、

故風教遍於遐荒、尊祖篤誠、斯惠施覃於黎庶。維茲 祀事矣、表

德輝、多方堅就日之忱、率土慰望竟之願。豈不足以恢丕基而

更廓、紹先烈而益宏也哉。〔臣煜〕颺鼠技疎、鸞鳩志陋、才難希於

小相、名久伍乎鯁生。值熙暉之盛時、固為欣幸、觀肅雍之殷祭、

尤切瞻依。雖知蕩々之難名、竊裁詹々之短述。不任激切屏營

之至、奉牋稱賀以聞。〔臣煜〕誠欲誠抃頓首頓首謹言。

天保十四年

〔臣煜〕上

六 古賀侗庵詩箋草稿

四四・二×五七・六糶。奉書。文政五年（一八三二）二月、



家齊が従一位左大臣に、三月、家慶が正二位内大臣に叙任された時の賀詩。字配り原本通り。

大君殿下

儲君殿下

備物増栄、

和羹聯任。〈臣煜〉不勝欣抃之至、

謹奉皇壽一曲、上

千秋万歳之寿。

〈臣〉古賀〈煜〉頓首再拜

勲格皇天聖化昌、果然華袞

錫無疆、

泰階呈瑞膺多福、

少海流芬遍万方、

花暎繡裳春不老、

柳連黃閣日偏長、

丕承奕葉倚蘭茂、何數三槐

王氏堂

七 包紙

四二・〇×一七・〇糎。杉原か。タテ二つ折。本紙不明。

正

八 古賀謹堂詩箋草稿

四三・〇×五五・〇糎。奉書。安政三年（一八五六）一月、

徳川家定と篤姫の成婚を賀する詩か。字配り原本通り。

今茲

儲闈、名門選択、盛礼敷陳。亀卜鴻占、爰協咸

亨之吉、玄纁束帛、亦丁霜降之辰。聯異姓

以交歡、叙彝倫而正始。承

宗輔内、依中饋之淑儀、媿美連休、布好迷之

雅化。伉儷斯重、福祺無量。預徵熊夢於他

宵、且算鶴齡于億載。〈微臣〉不任舞蹈之至、

恭進謠言以申賀敬。（この一行貼紙訂正、訂正前の字句見えず）

玉燭能調化雨勻、

聖明嘉礼仰維新、

功參七鬯非容易、

徳配

元良実陸婁、喜氣正浮三醕爵、和風軽払七

香輪、歓声豈独騰遐邇、草木欣々同向春

〈臣〉古賀〈増〉頓首拝上

九 古賀謹堂詩箋草稿

三四・五×四九・一種。杉原か。八の訂正後の本文に訓点を付したものの。字配り原本通り。

今茲

儲闈、名門選択シ、盛礼敷陳ス。亀卜鴻占、爰協ニ咸

亨之吉ニ、玄纒束帛、亦丁ニ霜降之辰。聯ニ異姓ヲ

以交ヘ歡ヲ、叙シ彝倫ヲ而正レ始ヲ。承ケ

レ宗ヲ輔レ内ヲ、依リ中饋之淑儀ニ、媿レ美ヲ連ネ休ヲ、布ク好迷之

雅化ニ。伉儷スレ重ク、福祺無レ量。預メ徴シ熊夢於他

宵ニ、且算ニ鶴齡于億載。〈微臣〉不レ任ニ舞踏之至リニ、

恭ク進メ話言ヲ一以申ニ賀敬ヲ。

玉燭能調シテ化雨勻シ、

聖明ノ嘉礼仰ク維新ヲ、

功參ニスル七鬯一非ニ容易ニ、

徳配シテ

元良ニ実ニ陸婁ヲリ、喜氣正ニ浮フ三醕ノ爵、和風軽ク払フ七

香ノ輪、歓声豈独騰ニルナラン遐邇ニ、草木欣々トシテ同ク向レ春ニ

〈臣〉古賀〈増〉頓首拝上

一〇 古賀謹堂奉稱賀箋草稿

四四・〇×五七・〇種。奉書。この安政二年（一八五五）といわゆる元和偃武の元和元年（一六一五）が同じ干支の乙卯年であるところから、家康の偉業を称える文章の作成を命じられたものか。一日には將軍が城中に諸侯・幕臣を招いて祝いの能を催している。

〈臣〉古賀〈増〉誠歛誠抃頓首頓首言

積徳累仁、受万斯年之永命、

櫛風沐雨、開大一統之洪基。艸造之隆、既罕聞乎近古、干支

之遇、孰不慕於今時。〈臣増〉誠歛誠抃頓首頓首恭惟、我

烈祖（前行「慕」貼紙訂正）

勇智過人、

聰明絕世。始

龍飛東土、終

電掃中原。摧枯拉朽揚威、簞食壺漿載路。天方厭乱、授

真人以弔伐之權、民是倒懸、仰

神武作雲霓之望。

仁難為衆、

德足配天。漢高帝之入関、三章約法、周世宗之平北、一挙奏

功。我武維張、八方率服。誠可謂、合車書為一、灌烽燧無煙者

也。夫当年赫々之（前行「八方率服」貼紙訂正）

經營若茲、況

列聖蒸々之

化理繼起。升平多歲、野無伏莽之虞、和樂黎民、衢有擊壤而

戲。維其休矣、猗歟盛哉。伏祈、稽

祖業之艱難、則守文実不易、繼

英謨于基緒、唯垂拱而無為。飲水思源、

孝治莫急於揚

先烈、一斑全豹、嘉典尤宜于觀国光乎。（臣増）章句鄙儒、愚迷

菽麦之辨、么麼末職、分屬覆幬之中。欣逢希有令時、竊綴至

庸拙語。不任激切屏營之至、奉

賤称

賀以

聞。

安政二年乙卯五月

賤

〔臣〕古賀〔増〕謹奉

一一 朝鮮李〔舜臣〕書（古賀伺庵）写）

四二・八×四九・八種。杉原か。タテ六つ折。右端一折分欠

損か。字配り原本通り。万曆三二年は文祿三年（一五九四）、

いわゆる文祿の役と慶長の役の間の休戦交渉期間にあたるが、

釜山に残留した日本軍と朝鮮水軍との小規模な衝突があり、そ

の間に日本側の武將に宛てたものであろうか。

撃

書得知

雅侯康勝、喜慰々々。微禽姑致〔鄙〕意而反加

謝意、不勝汗愧。若同金防禦、会

面一処則可展一々、而因病不果、茹恨奈何只此。不宣

皇明万曆二十二年十一月初一日 朝鮮国大将軍李(花押写)

一一 古賀侗庵文稿(反爾録序)

三五・五×三一・九種。黄色刷一行一七字マス目入(天地三〇・六種、マス一・八種四方)料紙(杉原か)。朱句点あり。天保四年(一八三三)序刊和刻本のためのもので、執筆もその頃であろう。文中「竺黄泉」は二五三・二五四参照。ただし、実際に刊本に用いられたのは全く別の文章で、『文集』所収もそちらの形であり、本作品は没になったか。

反爾録序

曾子曰、出乎爾者、反乎爾者也。夫嫗児而臥、其氣還以自煖、仰天而唾、其汁反以自澆。是禍福必然之理也。清人彭希涑二十史中、采報応明著者、得二弓。其書流伝於我、長崎海雲山住竺黄泉、獲而喜之、既復刪補之、釐為三弓、遙求余序。蓋洙泗之教、雖与葱嶺異撰、而其間非無同者。至如茲編、使人之能視前古以為鑑戒、因以勸善懲惡、何異之有。抑謂天地之道、感応而已。大而国家、治乱盛衰、小而一身、榮辱得喪、乃至一事一

物之微且細、悉不外於此理矣。則一部二十二史、拳皆反爾録也。覽者或謂反爾厘止於茲録、則魯矣。姑書此以諗之。

一二 神代名臣誄詞

三五・八×六八・四種。奉書。明治一七年(一八八四)一月三一日に死去した古賀謹堂の葬儀のための誄詞。書写者不明、あるいは作者自筆か。眞壁仁『徳川後期の学問と政治』名古屋大学出版会、二〇〇七)一九頁に仮名交じり表記で一部引用されている。

是乃齋庭乃祭場余暫安米座奉留、古賀茶溪命乃枢乃前余、礼代乃物置里供敵捧奉弓、畏毛宣申左、其神靈波神乃道乃式乃隨余、遠長久齋比奉里行刀乃為留、現身波奥城棄戸余臥米奉里、此乃奥都城余隱里座志奉留、永支別果乃御式乃是乃前余、現世余座志建給比功績乎、且々毛称閉誄言拳白汝命波、文化十三年十一月十一日湯島昌平饗官余生礼給比、祖父乃君父乃君乃遺業乎承承氣、徳川乃將軍家余仕給比、天保七年十二月大御番刀云余成給比、同十二年十二月両御番余、弘化三年十二月儒官見習余、同四年三月儒官余、嘉永六年十月八日布衣乃列余成弓、長崎余至里魯西亞人刀応接乃事乎勤給比、安政二年八月二

九御留主居亦洋字所頭取云平兼、万延元年十二月御留主居番次席余、文久二年五月御留主居番学問所御用余、同四年八月大坂町奉行余、慶応二年十二月製鉄所奉行並余、同三年三月一日目付余成与、朝鮮乃行乎蒙里、同四月從五位下余叙衣筑後守余任衣、明治元年正月官平免左、十月駿河余遷里、同六年東京余還里、同十二年文部省創立学士会院首乃選津膺里給比可料、就給波邪。如此累遷余官毛位毛昇進美、殊余明治乃新代乃前年与、外国乃学毛究米給比、弟子等波遐邇支国々与会集比、御教育乎受計、今毛官位高久、皇朝余皇国余大功績、建任奉留人等乃多奈留留、頓且汝命乃恪美勤米座須須理余之、甚毛愛支附氣、汝命乃御德尊久仰々故、今波真名子等乃御榮乎歛里樂志座志、余有留老乃世乃春秋乎、月余花余御心長久宇羅安久久樂志座毛在乃方之、現世乃慣刀病余波得堪給波、六十九刀計留今年乃秋乎、汝命乃一世乃限刀為与、其現身波隱座氣。阿波礼、現世乃慣刀術无支物毛可。故人々諸現世乃永別乎悲惜美泰里、是乃祭場余馬車所狹支伝支方支会集比、明妙照妙乃旗捧氣持、今乎盛刀種々乃花毛繁余供余奉里、御祭仕奉留事乃状乎、平氣久聞食且、是乃奥都城乃底津石垣動无久、静氣久安氣鎮里座世、齋主少教正神代名臣長美拜毛白須。

(一九+) 一四 古賀侗庵書簡 (古賀謹堂宛、〔天保九年(一八三八)〕閏四月二四日付)

一七・五×(二八・六九一・七) 糶。薄手楮紙二枚。内容から見て尾欠書簡の一九がこれに前接するので、ここに合体させ、替わり目を」で示す。一七への返信を得て記された書簡で、大番役として二条城に滞在中の謹堂に宛てたもの。江戸麹町の火事、謹堂の「秘書監」希望、大塩平八郎の乱関係資料集の編纂、江戸武家屋敷での釣り(「おまつ」は侗庵の妻)、羽倉簡堂伊豆七島巡検など、話題豊富である。

後四月十一日之手書、入手致覽閱候。近況愈御佳勝奉職之段、致欣慰候。此地園家無恙送二光候間、御懸慮無之様致至懇候。然者、麴坊之回禄も只今比者詳説相知れ候儀と察候。大火に者候へとも、四日夜之四半時比より翌朝五ツ過迄之延焼二いたし候而者、焼跡狭く被存候。其後も祝融之訛言紛紜として甚惑人聴、不勝嘆息候。漸一近日之好雨にて太静謐を覚申候。秘書監之缺へ榮晋之儀、容易之事二者有之間敷、拙者も周旋可致候へとも、時節到来不致候而者、難冀被存候。近來者右之場所も可也之鳳池之様人も存し、慾求之もの多く候。新御方向へ転じ候

者、少々易キ方にも可有之歟。何も吾家之風者、靜以俟時より外無策と存候。御城中同寮之陵轢、随分容忍至要ニ御坐候。

古歌之堪忍ならぬ所を堪忍するより別ニ秘訣無之候。高尾君之謙從塩匪之編輯、及拾巻候由、目撃之実説多く、定て新聞之事共若干可有之と、遐方想像仕候。拙者右賊之編纂も自余著作之妨ニ相成候ゆへ、不待詳悉大抵ニいたして闇筆、数日前装釘申付候。韋陋之失者自分も甘し候程之儀に御座候。松沢生、少進歩之評可欣賀候。菌狩之遊者京師之一勝事にて不堪健羨、只今より被相樂候も、さも可有之候。木公園之釣遊（つりあそび）々々怠り申候。

去十一日、真田信州之下屋敷へ罷出、釣竿之獲もの絶て無之候所、主人氣之毒ニ被存、網を下し御手にて三尺程之ほらと三尺弱之鱸を得申候。鱸ハ別客貰ひ、ほら者拙者もらい持帰候。尤是者おまつより申進候由。同十三日唐津侯森下町之屋敷ニ釣り、五寸位之大鮒二頭を獲、総て極小なるもの無之、從者共相応之功有之。此二遊、先近来之一興ニ御座候。羽倉県令、七島之巡遊誠ニ奇快ニ可申候処、不図大難風に逢ひ、大ニ困苦仕候由、然し性命之患者無之候。此条別人（行間小書「別人之内魚腹ニ葬り候もの有之、其者家祿継統之評議にて当分極秘也」）之儀ニ而、不得已秘密いたし候。後便之比、宣泄不苦候趣相成候節、

尽申進候様可致候。いつも申候儀にて候へとも、我船之舟楫粗悪にて、毎々危患ニ墜り候事不勝浩嘆候。右復書迄略々如斯御座候。即辰薄炎自愛之一事所冀ニ御座候。不啓

後四月念四日

古賀小太郎

古賀謹一郎殿

再白別紙 御城中之隊規、録示ニ預り一閱、欣慰之至候。家人兩人江之手帖早速相渡し申候。已上

一五 古賀侗庵書簡（稻深縫右衛門宛、某年四月一〇日付）

一六・三×三二・〇糰。茶色料紙。ウハ書は浅葱色地刷垣根文様の枠内に記される。侗庵の書簡がなぜここにあるのか不審、あるいは送られなかつたものか。

（ウハ書）稻深縫右衛門様拝答 古賀小太郎

縫右衛門様 焔白

貴翰致拝読候。如論日々鬱陶敷天色ニ御座候処、愈御清寧被成御起居奉欣賀候。然者、昨十九日再勤御願書御頭江御差出之所、御受取被成候由、不日に御吉左右可承、先日出度奉存候。将又、不存寄御看言籠之内御患被下忝拝受、御厚情之至感荷仕候。右

御礼答迄略々如是御座候。已上

四月廿日

一六 古賀侗庵廻状 (野村篁園・杉原心齋・佐藤一齋宛、〔天保一三年(一八四二) または一四年〕正月二九日付)

一六・六×三〇・三種。篁園・心齋・一齋の三人が揃って学問所儒者だったのは一二年一月(一齋就任)から一四年八月(篁園死去)まで。

(端裏)〔兵藏様／平助様／捨藏様〕 小太郎 (三名とも宛名右肩に合点あり)

別紙之通梧南被申越候二付、御廻シ申候。御一閱可被下候。書面之趣にてハ、右試業之事体頗重大に相成候得共、祭酒梧南学問振興之美意ニ御座候へ者、御同様異論も被申間敷、依之承知之段申遣候。寄宿南楼へ者手廻シ之為メ今日申達置候。左様思召可被下候。右迄略々。已上

正月廿九日

一七 古賀侗庵書簡 (古賀謹堂宛、〔天保九年(一八三八)〕

四月三〇日付)

一七・三×八八・七種、二枚綴。「徳児」は一八に出てくる二男徳次郎であろう。

四月十九日之手書致覧閱候。近況愈軽健、長道無障碍入城迄相濟候段、委曲報示を得、欣慰不過之候。此地闔家安穩送鳥兔候間、懸慮無之候様致至懇候。上田氏被差越候半歩金、徳児へ附与、劔師へ可差遣云々之来示、具に致承諾候。緩急報国之言承及、致欣喜候。守備之事二付所見有之候而も不得王職黙之段、さも可有之儀と存候。吾儕之微賤、迎も世之大用を至し候事望を絶し可申、只酬国之丹忱を存し候而已ニ御座候。其許発軛之翌日比にも候や、贖儀と御座候て高崎侯より桐製之菊子箆筒被贈候。中ニ所有之茶菓者、家人共尽し申候。箆筒者預り置申候。坂生より之一書至進申候。入手可有之候。去ル十七日、都下又々大火有之。日本橋側本舟町辺より発し、東ハ小柳丁、西者護持院原亀山侯之邸、北者參河丁土岐白須二侍臣之宅を限り、昼少し過より夜半比まで延焼いたし候。或諸侯之説に、方拾七丁程ニ相成候よし申もの有之、其位者可有御座候と被存候。吾宅全く風下と申に者無之候へとも、神田橋外ニ来りし比、焰焼少し

ちから如慮<sup>②</sup>、過慮之心より書籍器什大半倉庫中に蔵し申候。大坂にも大火有之候由、街談いたし候。実事二候ハ、次便之節略説を承度御座候。復書迄忽卒如斯御座候。即景薄暑、保護之一条深く所祈二御座候。不聲

四月尽 古賀小太郎

古賀謹一郎殿

一八 古賀侗庵願書案（小山平五左衛門宛、〔天保六年（一八三五）〕四月付）

一五・四×一〇三・五種、三枚継。徳次郎は生年不明だが、長男謹堂と三男麟三郎と間であるから、文政三年（一八二〇）前後数年となり、「年比」を元服頃とすれば、「未」は天保六年（一八三五）の可能性が高い。

（端裏朱書）○徳弟蟻蛉に遣はず故別段助力御願之書

私二男徳次郎儀年比ニも相成候二付、何方へも養子差遣度御座候処、就右ハ、武器馬具其外之調度ハ勿論、持參金をも致用意候ハて不相成、尤近年於爰許、養子縁組ニ付持參金之儀、向方禄之高ニ応し、百石ニ付五拾金程之当にして差遣候様一統相成

居、右ハ世上並之事にて、何分作略難相成、彼是二而ハ不少金高ニ候処、年来勝手向不如意之上、去辰年嫡女を他江嫁せ、色々物入多有之候末ニ而、猶又内証差支、今度二男養子ニ差遣候入用出来兼、当惑之半、兩三所より相談之口有之、其中至極好敷向も有之候へ共、前断之通勝手向逼迫故、何分応答成兼、無抛猶予罷在候。依之難申上儀二者候得共、可相成事二御座候ハ、格別之 思召を以百金程御助力被成下候様仕度奉願候。

乍然御家<sup>（平也）</sup>ニ而も近年御勝手方御差支ニ而諸事御取締御年限中之儀も承知罷在候ながら、右様之御難題申上候ハ、実以奉恐入候事ニ而、斟酌ニも奉存候得共、外二者いつれとも手段無之、惣而養子縁辺ハ大体年齢之程も有之事ニ而、余り年闌過候而ハ、自相談之向も失ひ候様可相成ニ、別而心配仕候故、不得止奉願候。右之趣ハ、今度御側向江も申上置候間、可然被仰談、何卒御聞濟被成下候様宜御執成之程、深重頼入存候。以上

〔未〕四月 古賀小太郎

小山平五左衛門様

一九（一四に合体）



二〇 古賀侗庵書籍買請願案 (某丑年九月付)

一五・五×二八・七種。五点とも大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』所載の資料に見える書名であるが、多くは侗庵死後入港の船によるもので、船名が一致するものがない。

(端裏) 御扣添

唐船持渡書籍買請願 古賀小太郎

子五 (四をミセケチ) 番船之内

湖海詩伝 壹部二套

薛氏鐘鼎款識 壹部一套

子六番船之内

唐四家詩 壹部一套

子八番船之内

羅昭諫集 壹部一套

子四番船別段売之内 (「別段売」に傍線)

警寤鐘 壹部四本

右買請仕度奉願候。以上

丑九 (戌) 三をミセケチ) 月 古賀小太郎

二一 古賀侗庵夏足袋願案 (某子年三月付)

一五・三×二五・八種。

(端裏) 夏足袋願 古賀小太郎

私儀下冷仕候ニ付、不出来之節者、夏中茂足袋相用申度奉願候。以上

(子) 三月 (儒者) 古賀小太郎

二二 古賀侗庵廻状 (同僚宛、某年一〇月二二日付)

一七・六×二六・二種。出版検閲に関わるものであろう。

(端裏切継) 御同寮中様 古賀小太郎

別紙之通大学頭より申来候間、順達仕候。御入手可被下候。右書籍、(小生) 何も存寄無御座候。皆様御同様御異存無御座候ハ、改印附札等之儀、直に出役江御命シ可被下候。以上

十月廿一日

尚々、万葉集者肝煎江預ケ置申候。已上

二三 古賀侗庵書簡草稿 (玉潤元寔宛、天保六年 (一八三五)

三月一三日付)

一八・七×五七・九種。非常に難読、『文集』五集卷二所収本文に頼つて翻字した。奥余白にはいくつかの文字について繰り返し習字していて、いかにも清書の準備のための草稿という雰囲気が出ている。玉澗については二二七参照。

答玉澗和尚

(抑<sup>②</sup>ミセケチ) 客歳夏孟琅翰翩然至(この三字補入)。茲晰法候佳暢、四大叢穀(安裕ミセケチ)、慰(欣ミセケチ) 愜詎際(この二字補入、之極ミセケチ)。承論(この一字補入) 貴刹早挙行(有ミセケチ) 国祖忌祭之典、加之、(この間、以ミセケチ) 君夫人下世、法務繁劇、以致来示遅延(有ミセケチ) 之由。(この間、何其ミセケチ) 謙抑(卑ミセケチ) 之甚、使人恐懼(有ミセケチ)。曩日蒙嘱使綴(序盛有ミセケチ) 大集有之弁言、且加(付ミセケチ) 之評権(批評ミセケチ)。拙(この間、責ミセケチ) 序(この間、文ミセケチ)、嚮已淨書以往、(汚覽ミセケチ) 定已汚囑(尺有ミセケチ)。至於下(有ミセケチ) 評、則固嘗敬諾。既而熟閱盛藻而洛誦之。材力充富、光輝赫灼(陸離ミセケチ)、使人愕眙(有目眩ミセケチ)、不能下筆。自知力不能酬其願。不獲已囑那波生、使謝

以(この一字補入) 不能(この間、応命之故ミセケチ)。今来(この間、書・高論ミセケチ) 果来譙讓之論(辞ミセケチ)。(この間、尤其ミセケチ) 焜(言の下より移動) 不(この間、能ミセケチ) 踐言、固為響失(有之為小ミセケチ)。然其心則非有他腸(この一字補入) 也。其始未及繕閱麗(盛ミセケチ) 藻而聽允(諾批評之囑ミセケチ)、実失於(固不免ミセケチ) 輕諾(この間、之誚ミセケチ)。今而潛翫盛藻、譬諸河伯処河、自負(若ミセケチ) 天下鉅麗之(この間、壯ミセケチ) 觀、及其眺(觀ミセケチ) 海也、風濤之洶湧澎湃、吐吞天日、魚龍龜鼈、神怪變幻。(この間候ミセケチ) 閃爍(この一字補入、使人目有ミセケチ) 至此、目焚膽慄、莫之克(不能有ミセケチ) 形容。彼其始念寧及此、抑(この一字補入) 亦前修(この二字補入) 所謂及之而後知(この五字補入)、履之而後難者耳。周任不云乎(曰ミセケチ)、陳力就列、不能者止。古賢於(この一字補入) 己才不能弁者、必拳以讓諸能者。力(己才ミセケチ) 不能堪、而靦顏応副。為不能闡発作者(珍什ミセケチ) 之長、或且(有之反点汚之。庶乎所謂仏頭着糞者。是不可不懼。煩絮之言、雖流於分疏、亦有ミセケチ) 曩日辭避之苦衷也。幸見炳亮(この間、之ミセケチ)、顧今反

覆督過(教諭ミセケチ)、悚惕甚深。且使就(中ミセケチ)全

集摘(存ミセケチ)録、而後下(加之ミセケチ)批評、覺責(宜

小ミセケチ)任較輕。焜之疲爾、亦可以毘勉応命、但目今塵務

紛沓(籍為■ミセケチ)、不克丞(この一字補入)從事。請寬

借俟異日焉。上足稽山疾痾(疾疾に上書)為崇、尊師憂悶(使

人憂■ミセケチ)可想。天(この間、之ミセケチ)佑吉人、比

日定霍然。病中(この二字補入)致声、懇倒為荷、投惠(与・

■ミセケチ)方今一地、攸之深。所有小箋一篋附呈(■ミセ

ケチ)、薄表微忱(この四字補入)。豈云(■ミセケチ)得答

厚貺(■賜ミセケチ)。病冗相仍、馴致回音大稽緩。多罪多罪。

(■■放光流■ミセケチ)都下春來大雪数次、有積過二尺者。

嗣後冷燠無常、極不適体。不知海南(貴郷ミセケチ)何若。順

時將撰、千万是冀。不宣備

玉潤上人發座下

三月十三日 古賀焜頓首拜

二四 古賀侗庵書簡(古賀謹堂宛、(天保九年(一八三八))

一 一月一四日付)

一六・七×一三五・〇糰、三枚継。一七(+一九)・一四と

同様のもの。

本月上浣二日之手帖致閱了候。近況愈御清勝慰愜之極候。此地

渾家安穩送二光候間、不勞過意候。

一 冬御切米之儀、委曲被申越候趣、具致承諾欣慰之至候。來

茲二月之方者入用之由、固より之儀と存候。御合力米二而活計

二相立、賈人輩へ半文錢之逋負無之由、何寄之好消息と存候。

当冬者玉落甚遅く、漸去ル六七日受落申候。米価等者別紙二

余し致伝示候。

一 先日之儀、大抵如願ニ可相成候趣、欣喜之事に候。同寮中

七八人も可有之候由、左候へ者從來定数も無之、且甚寛大なる

成法と被察候。後鴻之次濟否被可申聞之旨致領掌候。

一 購収書目被致伝示一覽了候。書価も嵩山に而者無之と被存候。

一 宿孤檢緩之儀、縷々之諭致首肯候。既往不可如何、此後之

所三令五申可致候。

一 都下時々雨湿も有之候へとも、回祿之威燄不止、去ル九日

曉正六ツ時比、八丁堀越中殿邸之近地より遣火、九ツ時過消沈

いたし候。大火之模様二なし候へとも、延燒之跡狭き由、尤佃

島者飛火にて灰燼之趣也。十日曉七ツ前、市谷田町失火、一二

余も延焼之由、將又近火之節殘役見舞二不越候内、無別条段可申遣、武・正二僕へも右之趣命し置可申之諭致承諾候。

一 大岡氏之濫已可憐之至候。死生有命、何地二而も可免様無之候へとも、退方之長逝者一段之心惻を添申候。然し本番二絶て病客無之者先慰心之事ニ御座候。

一 去月廿九日比、岡田伊勢守・建部六右衛門兩人共願之通御役 御免相成申候。六右衛門何之仔細無之、只々貧病と申事二候。伊勢守從來無檢束人ゆへ如斯ニ申もの有之、未得定説候。

何れにも居宅自火にて恢復と相成、營造略出来候所御側衆へ被取、今又右之次第、從來栄助之宗家にて別而氣之毒被存候。

一 武一捕鯨之一策不中候後、近來者又々新田開墾之志願有之、日夜奔走在宅之日甚少く、浮躁淺露、信ニ可憫笑事と存候。尤右者御家人加納氏の所有二而、荒廢いたし候を此度興起之策ニ候へとも、渠ハ今も短才且空囊にて如何可有之也、無覺束候。

一 一昨十二日、林式部二丸御留守居、學問所御用兼勤被仰付、大略以前筒井佐次右衛門（今之町奉行）之振合ニ御座候。式部様者五百石ニ候へとも、御書物奉行より一転して至此者、格別之起擢と被察候。林祭酒之威儀不輕儀と存候。尤祭酒も高年ニ被成候故、追々重任を少年へ被讓意味も有之候。且昨日大学頭

大内記と改名、左近將監大学頭と改名有之候。大内記二者、御城月次之講書・學問考試・素説御試等之儀、皆御免被 仰付候由ニ御座候。右二而式部之明跡御書物奉行願望之もの紛々ニ候へとも、終ニ誰手ニ落可申哉、責て学校中より差出度存候へとも、中々難期之極ニ候。

右回音迄略々如是御座候。躰発之時節、自重所冀ニ御座候。卒復不聲

復月幾望

古賀小太郎

古賀謹一郎殿

26X231

二五 杉原心齋書簡（古賀侗庵宛、〔天保一一年（一八四〇）四月二七日付〕

三一・七×四〇・九糎、堅紙（杉原か）。杉原心齋（？）一八六八）は幕府儒官。『升堂記』（『升堂記』（東京大学史料編纂所蔵）翻刻ならびに索引』一九九七、関山邦宏）によると文政一一年（一八二八）に安積良齋の紹介で林家に入門、「大御番片桐石見守組与頭平左衛門実子惣領」とあり、もともと幕臣だったことがわかる。天保一一年三月儒者となっているので、

それに関わるものであろう。

(端裏) 古賀小太郎様参人々御中 杉原平助/直反

一 翰拝呈仕候。先般御役被仰付候<sup>平出</sup>二付、御歛被仰下、見事之御肴御老籠蒙厚賜、忝仕合奉存候。随而此鯉脯壹台子母餅壹盒、

菲薄之至御座候得共、右御礼申上候半悃真三奉献呈候。御叱存被成下候者不堪至願奉存候。右申上度如此御坐候。恐惶謹言

四月廿七日 直(花押)

再白 清和之候罷成候処、益御清暢被成御座奉恭賀候。每々御懇幅御垂教被下、奉感佩候。不濟事之質、万事参り届不申、悚然奉存候。此上何分宜御鞭策奉希候。已上

二六 深町滄浪書簡 (古賀侗庵宛、某年正月二日付)

三一・六×四二・一 糰、折紙(杉原か)。深町滄浪(一八一四―一八四)は古賀精里門、甲府由学館(石和代官創立の郷学)

学頭・徽典館(幕府創立の学問所)訓導を務めた。成瀬哲生「田

辺太一「三坂(御坂)に遊ぶ記―徽典館の文学―(下)」「山梨大学教育人間科学部紀要」一一、二〇一一・三。参照。『升

堂記』(東京大学史料編纂所蔵)によると、元治元年(一八六

四)、中村敬宇の紹介で林家に入門、その肩書きは「甲州石和教諭所学長」となっている。なお、料紙奥に「藩臣手書/癸卯四月十七日識」と識語がある。侗庵による天保一四年(一八四三)のメモで、二七・二九も一連のものと思われる。

新春之御慶賀、不可有尽期御座候。先以御尊家<sup>平出</sup>様倍御機嫌能御揃被為遊御追歳、珍重之御儀奉存候。次二(私)無異加年仕候。乍恐御安慮可被成下候。右年始之御祝詞為可申上捧愚札候。恐惶謹言

正月二日 深町小七郎実庸(花押)

古賀小太郎様参人々御中

尚々旧冬之為御礼金五拾正奉差上候。御笑納可被成下候。以上又々奉御伺候。積奠之節之御式御供物并二(以上七字補入)音楽之名ハ何々と申音楽二御座候哉。御次二御端書江成共急々御書取被成下、篠本彦次郎方迄御出し被下度御願申上候。以上

二七 影田蘭山書簡 (古賀侗庵宛、某年一〇月二五日付)

二九・八×三九・一 糰、折紙(杉原か)。影田蘭山(一七九一―一八五二)は仙台藩儒、藩校養賢堂(仙台)・順造堂(江戸)

で教える。「升堂記」(東京大学史料編纂所蔵)によると、蘭山は嘉永元年(一八四八)二月に大槻磐溪の紹介で林家に入門しているが、この時既に侗庵は没しており不審。文中にある「勤学」は若い頃のものであろう。

一筆啓上仕候。時下寒冷相催候処、先生(平也)奉始皆様御揃益御機嫌克御動靜被遊座候、恐悦之至奉拝賀候。然者、私事過ル十日本藩儒役被申付、本懐之至奉存、此義御吹聴申上度奉得貴意候。

已前(平也)聖堂御学問処勤学中ハ、万事御教諭被成下、難有仕合奉捧謝候。尚更勤番ニ而時々出府茂可仕、此末幾久鋪御教諭奉伏希候。恐惶謹言

十月十五日 影田良作隆憲(花押)

小太郎様

二八 野村篁園書簡 (古賀侗庵宛、(天保一二年(一八四一)二月一八日付)

三一・五×四一・九糎、豎紙(画仙紙風)。野村篁園(一七五十一・一八四三)は幕臣、古賀精里に学び、昌平黌教官となる。天保一二年二月一六日、侗庵が布衣となつたのに対するお祝

いの書簡であらう。

(端裏) 古 小太郎様参人々御中 野村兵蔵(温)

一筆奉啓上候。先以今般結講被為蒙仰恐悦之御儀奉存候。随而輕微之至如何敷奉存候得共、御肴一折代金式百疋献呈之仕候。寔以便御欲奉申上候印迄ニ御座候。若御晒留も被成下候ハ、栄幸之仕合奉存候。恐惶謹言

十二月十八日 温(花押)

二九 北原光輔書簡 (古賀侗庵宛、(一)二月八日付)

三六・一×四九・四糎、折紙。会津藩筆頭家老六代目の北原采女光裕の子か、未確認。裏奥に「○北原出雲」とあり(別筆)。

正月五日之貴翰相達忝捧読、先以新春益御壮健被成御迎陽、珍重奉存候。次ニ(小子)無異儀加年仕候間、乍憚御費念被成下間敷候。右ハ遅成候へとも、年頭之御祝詞迄如此御坐候。此方よりこそ、旧冬之貴報旁呈書候筈之処、病後不相勝遅延仕居候内、御返事ニ相成、失敬之至背本意申候。余ハ期永陽之時候。恐惶謹言

二月八日 北原出雲光輔（輔字花押風に記す）

古賀小太郎様

26X/24/1

三〇 本莊温斎詩箋

二八・六×六四・九糶。文化六年（二八〇九）一〇月、古賀精里の六〇歳を祝う会での作。本莊温斎は伝不明。印記「本莊／叟善／之印」「温／斎」。

奉寿精里先生六十初度

文化己巳十月佳辰、吾精里先生介六十之初度、令嗣東里君率学校之諸生献寿而開筵於穢舟斎。先竟皆作詩賦文章、以頌德為祝。至矣悉矣。〈善〉也後生亦幸得侍高筵之下。欲

測其德之蘊輿、則浩乎如滄溟之無際、欲述其寿之無疆、則渺焉不知洗髓之數。固無所措辭、則聊賦小詩一曲以據鄙衷。

泮宮上律峯、疑是盤九天、茗水下深邃、水源尋無縁、奎壁何光

耀、湖雀銜三鱸、春風懸絳帳、霽月坐青氈、庭草含翠色、菽粟

普四辺、洙泗道更古、洛閩復清蓮、家声弥六合、箕裘百代伝、

憲々保佑篤、黄耆幾千年、南山浮佳氣、綵衣舞綺筵、偉材滿庭

院、頌德有人焉、晏侍聊燕賀、偏唱暇樂篇

門下生本莊〈善〉再拝／（印）（印）

三一 中清泉詩箋

二九・二×三一・〇糶、薄茶色画仙紙風。三〇と同様の作。中清泉（二七八三―一八四七）は本姓勝村氏、尾藤二洲・古賀精里に学び昌平饗舎長、丸龜藩儒となる。印記「豹／印」「文／蔚」。

奉寿精里劉先生六十初度

朱顏緑髮入添壽、教育英才德業優、眉寿康寧何得比、蒼松冒雪度千秋

門生勝邨〈豹〉拝撰／（印）（印）

三二 藤原吉言和歌懐紙

三〇・〇×四八・〇糶、打曇間似合紙。三〇と同様の作。藤原吉言は伝不明。万葉仮名・三行三字の定式を守る。字配り原本通り。

古賀翁六十御賀爾読豆

奉理計留

無位藤原吉言

常磐那留可氣遠多

能美天山松能志多

者布久左母千代遠経

幣幣志

(古賀翁六十御賀に讀て奉りける／無位藤原吉言／常磐なるかけをたのみて山松のしたはふくさも千代を経ぬへし)

26X/25/1

三三 岡田敬書簡 (古賀侗庵宛、某年二月二三日付)

一一三・六×八二・九種、画仙紙風。「黙釣道人」は侗庵の別号。

差出人は伝不明、内容からすると篆刻家か。

比日烈寒、伏惟尊侯<sup>(台題)</sup>万福、道履多暇、恭賀欽瞻之至。仄聞先生<sup>(台題)</sup>有休退之高志、不知其能遂高志否。近世貪婪為俗、唯進是謀、禍敗在前、不知避之、之死不已、不知退讓廉恥之為何事也。未嘗有一人怪而呵之者。君子奚得為之不惕然乎。独先生<sup>(台題)</sup>竄然出乎塵表、於身未衰之日能為肥遯。豈常人之腹所能測度乎。嘗命<sup>(台題)</sup>《敬》高印以黙釣道人<sup>(平出)</sup>、則識所伝聞信而不虚也。実興儒作頑之

盛事、令人仰慕欽羨不能、豈不為吾道之光乎哉。抑亦思之、明時渴求賢、只如恐失之、則一請再請、有<sup>(台題)</sup>未易得遂高志也必矣。賢者雖爵祿榮利之不可拘、而賢主恣之礼之必欲置之、周行盖並行而不相悖者也。然則先生<sup>(台題)</sup>之此举、奮起人心維持世道、所関翅細事哉。至祝々々。曾所請四万凍石、及琢磨甚麤惡、知不足充玉。按上欲得佳者、奉上而終不可得。今奉一顆棄置之可也。足衣三事並奉上致遲延、無狀疎謾之罪知無所道、不堪恐懼汗惡之至。但貧者不能備人事、洪仁<sup>(台題)</sup>之或所可垂憐、伏乞<sup>(台題)</sup>矜恕。不任至願、臨書惴々不成文。誠恐誠惶頓首頓首

嘉平十三日 岡田《敬》再拜頓首

大学士先生古賀公尊前

三四 岡田敬書簡 (古賀侗庵宛、某年四月二三日付)

一八・二×八三・五種、二枚継、画仙紙風。内容からすると、この書簡が最初のものか。

岡田《敬》請稽首再拜言、《敬》每竊冀執掃門之役久矣。今春因事一到于都下、得致愚懇於下執事<sup>(平出)</sup>。草莽之賤陋昧於事体、不敬頑率、將以得罪于門下必矣。何凶却不罪之、而降損德威、患



下誠懇、令得遂宿昔之素願。乃復不顧大不敬、敢請質正無狀之拙文、揮染陋屋之小扁。皆已蒙惠許、極仰盛德。待物之洪模、信非鄙夫之腹所能揣量。二十九日以掃期已迫、四月朔將發舍、故趨拜謝于門下。不幸而高騎不在、但獲墨妙与高批於執事處、則拜受披覽、始知拙文變見全備、陋茅反有美觀。〈敬〉之榮幸也、何啻兼金与双璧哉。然不得祇謁而拜賜、不勝愧悚憾恨之至。〈敬〉歸鄉之後、雖与一二之同志時相集會講論、只悠悠茫茫、卒不知所挾依也。因深恨不得倍從周旋於高堂之末、聆警咳睹儀、有所受而学之、有所則而效之。夫羈居樊籠之中、古人之所歎真知不虛也。伏惟、明公閣下平生所以教学者、学者所以軌範者、想可極隆盛也。伏乞、若不棄外〈敬〉之愚、而幸以垂憐教、〈敬〉之願也。無任區々之願、余以時福斯文。恐々惶々稽首不宣

三五 岡田敬書簡 (古賀侗庵宛、某年三月八日付)

一六・九×五八・〇糰、画仙紙風。

二月念九拜領客歲嘉平望鈞翰、謹再拜誦讀教四、審尊履万福教育多暇之状、欣抃瞻賀之至。伏蒙鄙藻之慈斧、觀小材短木各適

用而無遺棄、則知大匠神算經營之妙、至幸々々。別幅所論印材、謹命俟拙刻可送奉。但恐在陋刻拙汚淨几上耳。足衣、知和煦之時、於貴用既失時、今命工雖非旨、蓄不知亦以可禦冬耶。当并奉。都下櫻花応爛漫、想先生時或一遊、有浴沂之樂。恨無由(由)補入)充僕隸之數、得(得)補入)從容陪從、聞朗吟新詩、向晚風而歸耳。遺憾々々。余祝為時愛蓄以慰遠懇。恐惶々々頓首々々

三月初八 岡田〈敬〉頓首再拜

大学先生古賀公閣下

三六 岡田敬詩箋

二〇・二×三二・五糰、竹紙風。

僕今歲既三十一、而一事不若人、無如日月之不留何、懼空

朽腐、賦一絕以自責

何事空過三十年、一春又長学無前(進也)、追文摘句徒然耳、

男子所期惟聖賢

岡田〈敬〉草

三七 岡田敬書簡（古賀侗庵宛、某年二月二十六日付）

二一・一×五三・六種、竹紙風。

東向再拝言。雪後冽寒隆盛、伏惟尊候起居万福、不任欣賀々々之至。鄙況如昨、亦不足言。伏乞母煩念。（平也）今年東北凶荒聞特甚。

《敬》之鄉雖不至甚、小民亦為狼狽騷擾、今日得小安、至春後不知如何。也是可慮焉。聞球荒之大政甚子委也。想都下可自穩靜也。恐賀々々。恭奉原禽一雙敢供膳。夫亦非敢展、歲晚之常事也。余祝為斯文、千万愛齋。（平也）恐々惶々頓首不宜

大学士先生閣下 岡田《敬》再拝言

十二月念六

三八 岡田敬書簡（古賀侗庵宛、某年八月一五日付）

二四・三×一〇九・一種、三枚繼、画仙紙風。

副啓

書違式、字有誤謬。伏乞恕察。（平也）不宜

《敬》再拝白

《敬》再拝言、伏蒙六月望之尊教、拜読数四、仍獲審先生動履（平也）

和適、神相万福、不任歡抃喜躍之至。謹審尊教并拙文之高評、褒称似過美、知欲使不肖者勉此有所勸、而企及之盛意。（平也）然古称、

一言之賞榮於華袞、一言之貶蔽於斧鉞。今所褒許、不但二言。

《敬》鄙陋、恐懼悚汗而敢非所当也。講学之要、官守之道、謹承垂教、《敬》雖不肖、敢不佩服終身哉。但《敬》昔有疾療之病殆死。幸得快復、五年於茲矣。然猶因寒暑之代序、温涼之錯

揉、或感冒、乃依旧病根復発作。此雖不足介意、而神倦氣耗、息喘胸悸、不能從事於讀書筆硯之間。強為之則懵然昏迷、不得

不廢。因竊慨然自以為、從古詎有無疾病之聖賢耶。其志有氣之帥、道義以有養心、威儀行義以有養身体。是以奮然扼腕起身、

終無益於事。嗚呼平素無養、亦可見。恐竟無副尊教。（平也）今夏亦傷暑、欲作報書、時々雖臨紙構思、思理而不能成。或務出一兩語、

病懷昏乏、亦不可見、以致此稽留。怠慢之罪、知不可逃。伏惟

閣下、江海之量、宜憐而無罪、伏乞垂慈惟祈。窓下秋風拍、雲外候雁唳、徒增企想爾。伏乞為斯文深保愛。恐々惶々再拝謹言

八月十五日 岡田《敬》頓首再拝

古賀先生閣下

三九 岡田敬書簡（古賀侗庵宛、某年二月一八日付）

二九・六×一三・五種、竹紙風。冒頭行上部を含む部分が破損している。

大学士先生閣下

26X/26/1

「<sup>(平也)</sup>」不奉書番起居已周年焉。怠慢之罪不知所道。不堪惶愧懸恋之至。伏惟尊侯<sup>(台題)</sup>万福、盛徳日増、深厚恐喜々々。謹悉春間所辱賜誨書、似如蒙称許有過実者。〈敬〉不肖不敢所当也。特増汗恚拜読数四、乃見欲提携誘掖、勸之奨之、令〈敬〉其或一步有進一毫有得之盛意。先生之教、〈敬〉可謂至矣、可謂勤矣。然未能有報也。〈敬〉之苟且怠惰如此、以可見其無志不足有為。何以答洪徳哉。死罪々々。〈敬〉不幸蚤嬰病痾、諸証更互攻撃、

ここに含まれる侗庵の詩文稿の多くは、わずかに加筆訂正の跡を留めるものの、清書に近い態度で書かれているが、なかには相当な推敲が行われているものもある。『詩鈔』と比較すると、訂正後の形がほぼ採用されているが、なかには更に推敲されている場合もある。また門人等による書写部分では『詩鈔』に誤脱がある場合もあり、正しい本文を知ることが出来る。

雖或如退、猶有伏莽之患。繼之以「以」補入。職事掌軼、而不能專心於文辭之間。強思索之、神羸氣餒、憤悶否塞、作不成、執筆復廢、臨紙復舍。如此者亦多矣。遂致此罪辜焉。噫亦不可有為也。伏惟載物之洪、<sup>(台題)</sup>包荒之量、勿深罪之、幸甚々々。又有

四〇 古賀侗庵詩稿（不忍池晚歩・贈愛竹人）

一二欲下筆者、未成稿。俟稍整理、謹当「当」補入。封納。請賜筆削、亦勿以貶外、<sup>(平也)</sup>区々之至願也。欲納野鷄一双、以供鼎

二四・五×五四・五種、薄茶色画仙紙風。冒頭に朱書「一」とある。弘化二年（一八四五）作。前半七絶三首は一字アキで追い込んで書かれているが、ここでは一首ごとく改行した。

鼎之実、而不得佳者、知不足充芳饌、<sup>(平也)</sup>聊暢下情於膳夫、汗悚々々。時惟歲晚寒威為虐。伏惟为国家為斯文、<sup>(台題)</sup>千万自齋。不宣

不忍池晚歩探韻

十二月十八日

岡田〈敬〉頓首再拜

澹々水煙紅日收、荷花欲語競嬌柔、長堤一路香風裏、襟抱清涼夏作秋  
士女逍遙（空ミセケチ）池水頭、裳衣鮮麗似春遊、騷人独自  
嗟方苦、一樣看花心不侔

晚涼喜少採蓮舟、境接祇林万象幽、誰意去城纔咫尺、軟紅塵底有丹邱  
贈愛竹人

靜玩窓前竹、灌培添翠深、豈徒全峻節、長不改清陰、餐菊靈均  
志、愛蓮周子心、憐君追往哲、高操最堪欽

四一 古賀侗庵詩稿（冬暁・冬日旅遊）

二四・五×五四・二種、薄茶色画仙紙風。訂正朱書。冒頭に  
朱書「二」とある。弘化二年（一八四五）作、「詩鈔」では最  
終冊末尾に収める。

冬暁拈韻

孟冬寒已至（至早の早ミセケチ、己を補入）、凜々暁侵躬、苔  
砌驚霜白、茅（蕉ミセケチ）軒愛日紅、纏痾慵早起、垂老任途  
窮、猶抱憂時志、饑荒願歲豊

冬日旅遊

輕笠翻翻乘暁風、小春氣（妍ミセケチ）煖似春融、長江舟過瑠  
璃上、層嶺人行凶画中、山駅卸装傾緑酒、野橋立馬看丹楓、此  
遊快適將安比、鳥出小樊翔碧空

四二 古賀侗庵詩稿（大風暁）

二四・五×五四・〇種、薄茶色画仙紙風。訂正朱書。天保七  
年（一八三六）作。八月一日の大風雨を詠む。

大風暁拈韻

相月晦之夕、玄雲鎖太清、半夜群動息、九陌絕人行、盲廳東南  
至、極威捲金城、始訝怒濤激、漸疑万馬声、喬木尺摧折、寥々  
衆竅鳴、更挾悍雨勢、山岳看欲（將ミセケチ）傾、簸掀動天地、  
鉤鎔響達明、屋瓦續紛落、階庭墜葉盈、寒門環堵室、欹（顛ミ  
セケチ）倒始難（この二字、難可ミセケチ）撐、春來十旬雨、  
未曾見牢晴、朱明如素節、凍氣害秋成、況乃半月裏（纔半月の  
纔ミセケチ、内補入後ミセケチ、裏補入）、狂飈再震驚、士民  
多菜色、賈商最無贏、旻天仁覆下、流毒何縱橫、迂儒世所棄、  
何啻螻蟻輕、報国寸心赤、漫思濟蒼生

四三 古賀侗庵詩稿（己亥臘月……）

二四・五×五四・九種、薄茶色画仙紙風。己亥は天保一〇年  
（一八三九）。『詩鈔』はさらに推敲あり。

己亥臘月朔四谷失火、上田雅契罹延燒之災、賦此以贈拈韻

嘉平月（月平を転倒）初吉、遣火城西闈、蔓延彈指頃、渺不識  
涯垠、詰且踐焦土、郭南訪可（玉ミセケチ）人、望門卉木鬱、

入門奮恢塵、果罹參元禍、凝佇為愴神、之子凌雲氣、不遏風焚  
輪、又有懸河弁、難使鬱攸泯、矧門多猛士、情猶子於親（報師

不顧身ミセケチ）、了無一策展、余饒延西隣、捧頭空鼠竄、經  
籍纔伴身、先主窘於火、猊亭師不振、阿瞞亦爾々、奔北赤（蜀

ミセケチ）凜浜、火攻雖下策、英雄屢遭屯、子詩巧泣鬼、子論  
奇離倫、不独流俗駭、造物妬且曠、故祖吳兒（人ミセケチ）計、

使子受艱辛、抑子無此罪、造物威虐頗、既挫才人氣、又傷上帝  
仁、会心悔且恥、叩首謝高旻、料知自今後、繩々百福臻／煜稿

四四 古賀侗庵詩稿（詠史・映山紅ほか）

二九・五×七〇・四糰、竹紙か。天保一〇年（一八三九）作。  
落款左に「・」を転倒させたような形の記号あり。奥余白小字

書人も同年作。

詠史探韻

崎嶇血戰海南陲、手挽朱家正朔留、鉄騎陵（横ミセケチ）江蹂

韃地、戈船破（蹕ミセケチ）浪逐蘭酋、才如老蚌生珠日、忠似

孤芳傲雪秋、不怪英名冠明代、曾鍾神秀自蜻洲  
映山紅

映山紅筭对簾稠、万緑陰中春猶留、錦爛霞明堪慰眼、何須人代  
杜鵑愁／古心堂主人

（以下、奥余白に小字書入）  
（四月十五日）初夏山居探韻（島原世子座上）

邈興塵凡絶、無人攪（時ミセケチ）我閑、洗（清ミセケチ）心  
深碧水、慰眼淡青山、幽鹿為朋侶、老樵時往還、不愁紅紫尽、

新緑遶柴関  
聽子規

午天哀叫到黄昏、似向春風訴<sup>（2）</sup>旧冤、幽閣驚醒思婦夢、長亭啼斷  
旅人魂、斜風織雨滄江路、淡月微雲緑樹村、正是恢占好時節、

独將恨血染花繁

四五 古賀侗庵詩稿（残菊）

二四・一×五四・五糰、画仙紙風。天保一三年（一八四二）作。

残菊探韻

病逢搖落氣（意ミセケチ）難舒、最惜東籬凋褪初、風打黃英金  
滿地、眼消素蕊雪無余、人心一夜遽然別、蝶意三秋終未疎、似  
向吾儕情不淺、殘香深辺読書廬／蕉林書屋主人

四六 古賀侗庵詩稿（賀友人病愈）

三〇・七×四九・八糰、画仙紙風。天保一二年（一八四二）作。

賀友人病愈探韻

衰羸伏枕幾絳旬、幸得良医術遍神、氣似枯苗迎好雨、心如寒谷  
遇陽春、揮毫復見龍蛇走、摘藻仍驚錦繡新、吉士從來天所祐、  
遠驅二豎海之浜／蕉林書屋主人

四七 古賀侗庵詩稿（暮春）

三〇・二×四一・一糰、画仙紙風。天保一三年（一八四二）作。

暮春探韻

野煙蒼茫草敷茵、敗紫鶯紅惱殺人、難借長繩留白日、空將逝水  
送青春（二字転倒）、仕甘儒史違時調、跡学詩囚老此身、鶯燕  
任他忙迫甚、幽窓玩易養天真／蕉林書屋主人

四八 古賀侗庵詩稿（擬謁匡山大忠祠）

三〇・三×四〇・三糰、画仙紙風。天保一三年（一八四二）作。

擬謁匡山大忠祠探韻

祠屋長隣鮫鱈居、三賢遺烈足欷歔、精忠貫日輝前史、浩氣成虹  
掃太虛、恨永不平波怒吼、神常（猶ミセケチ）如在樹森疎、千  
秋香火強人意、猶勝胡元祀忽諸

四九 古賀侗庵詩稿（重五）

三〇・八×四三・三糰、画仙紙風。冒頭に朱書「七」とある。  
下部インク染みあり。弘化元年（一八四四）作。

重五探韻

密雲潑（撥ミセケチ）墨雨濛々、佳節坐過岑寂中、不見琅玕三  
尺翠、猶留躑躅万株紅、水漿未覚清宜口、細葛爭堪涼遍躬、新  
政粲然如許美、漫愆玉燭耄天翁

五〇 古賀侗庵詩稿（古戰場）

二四・七×五四・八種、画仙紙風。天保二年（一八四〇）作。

曾未半、已被曉鴉驚、起向郷天望、一倍軫帰情

古戰場拈韻

惨淡煙郊夕照雨、誰憐龍戰旧山河、秦関昔曝三軍骨、楚墨曾驚  
四面歌、斷碣苔纏人不訪、荒墟草遍鹿空過、英雄成敗須臾（甞  
時ミセケチ）事、遺臭流芳附逝波

五一 古賀侗庵詩稿（夢遊故山）

二九・九×三〇・七種、画仙紙風。前半を欠くが、『詩鈔』  
によれば天保四年（一八三三）作「夢遊故山分韻」の後半部分  
で、冒頭欠落部分は「旅魂何宮々、西指紫海征、倏忽黍炊頃、  
飛過万里程、故山晴似画、歴々」で最後の句が「眼前横」につ  
ながる。題詠ながら、故郷佐賀の家族を詠んでいると見られる。

眼前横、路転入閩里、父老出<sup>（前カ）</sup>□迎、先人廬未古、門臨碧水清、

□<sup>（曾約ミ）</sup>磯寂寞、春草蕩氈平、周覽読書室、旧題字分明、親眷咸來  
集、最楽晤伯兄、聚首一堂裏、秉燭坐三更、豈但家釀美、郷味  
有尊羹、談及卅年前、喜極淚如傾、夢中安志夢、悔（恨ミセケ  
チ）不早帰耕、鄭重更相約、团欒送此（一ミセケチ）生、歛惊

五二 古賀侗庵詩稿（彗星・春寒）

三五・三×五〇・〇種、杉原か。冒頭に朱書「五」とある。  
天保一三年（一八四二）作。クロイツ群と呼ばれる彗星群に属  
する大彗星が二月（グレゴリオ暦で三月）を中心に出現したの  
を詠んだもの。

彗星

彗現初昏殘照辺、奇形独怪異従前、白如匹練林端曝、直似断虹  
山外懸、推測行応同月蝕、災殃何用駭人伝、長星勸汝一盃酒、  
饒舌休垂千丈涎  
春寒

孟陬経暴煖、一変似龍沙、凍損遷喬鳥、慘傷将咲花、孤眠寒起  
栗、枯坐縮如蝸、那可春焔別、屏幃更蔽遮

五三 某詩稿（擬贈韓人）

二四・八×三八・一種。朱の句点・批点、墨の訂正が多くあ  
る。『詩鈔』文化八年（一八一二）に同題の詩があるが別作品、

筆跡も侗庵と異なると見られるので、誰かの習作に侗庵が批点を加えたものか。

擬贈韓人

三韓桂客此尋源、咫尺無由与晤言、才美鳳皇揚五采、吏敵虎豹守重門、遙聞鏡吹叢祠宇、時瞰旄竿古梵園、(客避暑神廟、鼓笛音徹於敝寓、余屢遊以酌庵、見韓船於寺下)披得青雲瞻白雉、開襟(この間二字墨滅)半晌坐風漪、

何物堪消滯暑辰、水壺水月汝其人、初來衝鼻魚蝦市、小住結盟鷗鷺隣、波濺馬州淘鬱熱、雲依鯉域暈嶙峋、江都此去五千里、比較客還遲幾旬、

伊人宛在水之湄、呵禁難通唱和詩、館内象背伝筆札、島中駟僮売參皮、六旬渴想初相見、万里帰程已有期、各自東西雲海渺、其如再会隔生悲

公事未終私觀難、相逢便起別離(別太無を墨滅)端、島当朱鳥懸紅日、海泛蒼龍駕紫瀾、只見郢中歌寡和、曾無河朔飲成歡、何因千里重披面、翰墨留充佗日看、

馬州蕞爾駐旌麾、風物何堪慰官羈、悵恨吳江称(道衡裁を墨滅)句日、如同渭水(仲達日を墨滅)閉宮時、不須雄弁臧三耳、幸

接清遊舞兩眉、滿腹文章吐難尽、長風破浪可(始を墨滅)争奇、

五四 本多忠升文稿(古賀精里墓碑銘)

二七・四×三七・九糶。大塚先儒墓地に現存する精里の墓碑

銘の草稿で、佐賀藩儒時代の事績を述べた部分である。撰者本多忠升(一七九一—一八五九)は伊勢神戸藩主、精里の弟子。

全文は『東京府史蹟調査報告』第七冊(東京府、一九三〇)、龜山書三編『精里古賀先生碑文集』(近代先哲碑文集第二十五集、夢硯堂、一九七二)、藤井直正『江戸時代文人墓所の探訪』(『大

手前女子大学論集』二四、一九九〇・一二)に収録されており、文政五年(一八二二)五月成、文字の筆者は侗庵である。本作

品は、この資料が示すように、侗庵による添削を経て成ったもので、本文が忠升、批点と注記が侗庵筆であろう。ただし、こ

の部分に関しては、二案のうち前者が「民饑」も含めそのまま採用されている。

採用されている。

時国用弗給、諸吏束手無策。先生猷議、剗剔蠹弊、終以有濟。侯嘗命吏有罪者自首、咸謂自首必免、争自首、既皆褫其祿。先生謂是罔之、力争弗聽、遂辭其職。明年乃聽、仍命專掌教授。



民饑、先生告以賑之。〔民饑ノ二字、前二国用弗給トモ有之、目立候ニ付、今又御考可被下候〕

都合七十八字

時国用弗給、侯銳意凶治。先生猷議、剔剔蠹弊、一從儉素。侯多聽用其言。命婢妾織木綿布、以充服御、因賜先生以所織布一匹。是亦其一事也。侯以教化未宜習弊未革、遂命專掌教授。国饑、先生告以賑之。

凡七十九字

五五 古賀侗庵詩稿〔擬謁項王祠〕

二四・二×(五四・四+五四・三) 糧、二枚に分かれている〔翻字中に分かれ目を〕で表示。画仙紙風。下部インク染みあり。天保一三年(一八四二)作。

擬謁項王祠探韻

項王縱觀日、已有龍飛心、胸蘊韜鈴略、智勇冠古今、一朝風雲会、英声馳駁々、電擊七十戰、勅敵坐就擒、鴻門不迫險、洪量最可欽、顛瀛啓聖漢、如早遇甘霖、興亡固有運、天道難推〔研ミセケチ〕尋、自謂非戰罪、定評誰不謬、後來狗儒論、詆誣橫

相侵、何殊蠱与勺、擬測滄海深、土人〕思旧徳、遺廟烏江濤、叢樹鬱環〔回ミセケチ〕合、神威儼如臨、猶和〔拾ミセケチ〕域下曲、松籟不平音

詠史〔祖述〕

擊楫大江英氣豪、志含河朔虜奔逃、聞鷄一樣中宵舞、越石才輪士雅高

五六 古賀侗庵詩稿〔古戰場遺鏃類〕

二四・五×(五四・七糧+五四・九) 糧、二枚に分かれている〔同右〕。画仙紙風。天保二年(一八四〇)作。

古戰場遺鏃類探韻

一片箭鏃出蒿萊、湮晦曾經委〔埋ミセケチ〕劫灰、清涼磨洗認前代、不知閱幾星霜來、銛鋒刑鈍無光彩、繡洪已生滿面苔、牧童樵叟供咲翫、独有志士為興哀、緬憶此地列戰格、步騎雲屯森矛戟、猛士如虎復如熊、續紛〔この二字補入〕乱箭〔この間「雨下」ミセケチ〕競相射、薛仁貴可定天山、李将〕軍能洞寢石、鏖戰竟日々無輝〔光ミセケチ〕、流血漂杵平原赤、勝敗有数非由人、勅敵土崩半見骸、滄桑變兮陵谷遷、一彈指頃成今昔、麦

秀漸々鳥雀悲、荒涼誰訪連宮跡、纔存遺鏃被人憐、英雄喪元埋  
毅魄、々々銷沈何所婦、涼月空隨弓影（照断碣ミセケチ）白

五七 古賀侗庵詩稿（題孟母断機図）

二四・三×（五四・六四五・六）糧、二枚に分かれている  
（同右）。画仙紙風。冒頭に朱書「四」（？）とある。天保一三  
年（一八四二）作。

題孟母断機図探韻

孟母断機日、孟叟卬角初、懇到垂誨切、痛警学業疎、拜跪不敢  
弁、紅淚迸成珠、覲厥慙惶態、蠢々乳臭難、懿哉賢母教、嚴肅  
絕煦濡、卓矣佳兒志、銘骨矢改凶、永拋棄嬉戲、翱翔礼楽衢、  
蚤夜弗少怠、日新非故吾、希聖溯洙泗、鬱然称大儒、雕琢高施  
巧、和璧独燦乎、培養寧有異、松柏凌碧虚、雖然誘導妙、美  
質真所須、果似水投石、母兮竟何如

秋思

空房秋欲晚、鴻燕感居諸、風処陰虫咽、月中衰柳疎、緑雲頭任  
乱、玉筯眼難舒、縱裁秋衣就、蕭関万里余

五八 古賀侗庵詩稿（題漂母飯韓信図・夜雨夢故山）

二四・二×（五四・五五四・七）糧、二枚に分かれている  
（同右）。画仙紙風。天保一三年（一八四二）作。

題漂母飯韓信図探韻

王孫雌伏日、举世誰復知、漂母一隻眼、瞭（昭ミセケチ）然見  
英奇、進食（施飯ミセケチ）幾多日、惠沢滂無涯、漢高若微信、  
爭鞭四百基、能拯斯人死、母兮功豈卑、最愛不望報、片言真良  
規、濟物心自尽、胸無一点私、親夫淮陰略、風猷（英武ミセケ  
チ）洵卓而、多々才益弁、電掃百万師、如何荣利念、熱中攻心  
脾、戰勝輒希（求ミセケチ）賞、功成必望施、斉国飯「王請、  
争得免（無乃招ミセケチ）猜疑、（この間「不省盈満誠、鷹犬  
以自期」ミセケチ）、末路果蹉跌、鐘室事可悲、由来（借問ミ  
セケチ）方寸蘊、漂母判背馳、乃知匹婦志、英雄有愧時

夜雨夢故山

千里家遙紫海涯、魂飛碧落不知疲、孤（邱ミセケチ）墳宿草（草  
宿を転倒）雲龍友、双髻繁霜（髻髮霜侵の髪・侵ミセケチ、双・  
繁補入）竹馬兒、庭古全枯曾（親ミセケチ）種柳、壁頽安覓旧  
題詩、生憎簷溜驚殘睡、休道聽來琴筑奇

五九 古賀侗庵詩稿(温公破甕図)

二四・三×五四・二種、画仙紙風。天保一三年(一八四二)作。

温公破甕図探韻

君実破甕日、悍然猛氣振、不顧儕輩走、寧怕父兄瞋、巨石擲如瓦、大甕碎成塵、溺人脱万死、似回寒谷春、不知勇之卓、洛人独称仁、々者必有勇、聖訓当恪遵、泊至元豊季、枋用(国ミセケチ)材力伸、毅然任衆怨、報国不顧身、蠹弊剗剔尽、拯茲塗炭民、煌々良相業、早兆卯角辰、可嘆降澆季、世乏全德人、徒勇悻々士、徒仁諾々臣、仁勇倚一偏(一偏在の在ミセケチ、倚を補入)、何(不ミセケチ)足以経綸(以経の間、施ミセケチ)、楚項与徐偃、殷鑑眼前新、玩図有所感、管見試具陳

六〇 古賀侗庵詩稿(阮咸曝禪図)

一七・六×六五・六種、画仙紙風。訂正朱書。天保九年(一八三八)作。

阮咸曝禪図探韻

南阮貧到骨、北阮富薰天、(七日ミセケチ)曝衣当七日、錦綺照眼鮮、阿咸歷落士、在南素推賢、長竿挂犢鼻、高空隨風翻、垢汗如染皂、綻裂処々穿、自道未免俗、猶被世習牽、傍人指目咲、素心豈為遷、独立埃壙表、腹裏可撐船(舟ミセケチ)、縦非中庸行、流俗孰比肩、俯(仰ミセケチ)視北阮輩、眼孔小可憐、世間何物比、如禪中蝨然

六一 古賀侗庵詩稿(春寒・春雨)

一六・八×四五・八種、二枚繼、画仙紙風。天保一一年(一八四〇)作。

春寒探韻

東風難解凍、寒透重裘身、已過羊牛日、未催梅柳春、林無求友鳥、門少拜年賓、不是鑽研至(苦ミセケチ)、甘為閑戸人  
春雨

半夜廉纖雨、頓生天地春、草抽深綠秀、花染嫩紅新、画出山含潤、洗來街絕塵、濃雲猶未散、甘沢定無(遍天ミセケチ)根

六二 古賀侗庵詩稿(病起看鏡・辺詞)

一八・六×四五・九種、画仙紙風。天保一〇年（一八三九）作。

病起看鏡拈韻

病余初照鏡、鶴瘦自驚悲、豪氣空摧滅、壯容全變衰、凍梨將上類、微雪早侵髭、垂老（老境の境ミセケチ、垂を補入）心如此、非唯二豎為

辺詞

孤戍臨絕漠、白草滂無涯、殺氣四時凝、秋半雪压枝、去家七千里、刀環杳無期、寒威易釀疾、繁霜差（上ミセケチ）鬢髭（右傍に早可上、可の右に已と記す。『詩鈔』は「双鬢早已糸」とする）、幸值辺警息、艱苦幾多（心日ミセケチ）悲、疆虜倘為敵（深入ミセケチ）、埋骨遼水渚

六三 古賀侗庵詩稿（題川中島戦争図・暁起涉園）

一八・六×九一・四種、二枚継、画仙紙風。天保九年（一八三八）作。

題川中島戦争図

吾敦兵家流、騰説紛多端、至其執僻理、甚於腐儒頑、両虎信山

鬪、勝敗判不難、論者左右袒、長留大（この一字補入）疑团、

甲侯又雄傑、英声轟区寰、如何幄中策、忽為敵洞看、彼乘批虚勢、我致輿尸酸、大将通中創、流血甲裳股、連營悉崩潰、弟死爪牙殫、堪咲媾和日、驕高不下鞍、生平誇百勝、一敗心膽寒、独不去戰地、俗輩漫（漢ミセケチ）贊歎、兵勢貴神變、豈在膠柱彈、不然長湫役、神祖亦將辱

暁起涉園

涉園跡破翠（緑ミセケチ）苔斑、暁月猶懸楊柳灣、小径落紅鋪似錦、喬林新緑鬱成山、衣含瀟灑朝來爽、境占清幽物外閑、向晴空貪看鳥、露珠幾点洗塵顔／蘿月小軒主人

六四 古賀侗庵詩稿（喜稻垣木公至）

一八・六×七一・四種、二枚継、画仙紙風。インク染み有り。天保九年（一八三八）作。稻垣寒翠（一八〇三―四三、字は木公）は美作津山藩士、侗庵に学び藩儒となった。五年ぶりの出府の際に侗庵宅を訪問したのであろう。

喜稻垣木公至探韻

垣生要駕馬、追風超馱駉、曾寓家塾久（吾家塾の吾ミセケチ、

久を補入)、卓犖庄儻儻、一曙忽雲散、秦吳渺東西、豈意五寒暑、燭盟慰分睽、漸漬洙泗訓(教ミセケチ)、瑩(淵ミセケチ)粹似璋珪、持論何醇正、鑿々古与稽、発(使ミセケチ)我起予

嘆(嗟服甚ミセケチ)、心折頭已低、昔類俊鷹鷲、今覺儀鳳齊、今如触邪獬、昔似扶石猊、孔聖与(重・占ミセケチ)狂簡、博約(策勵ミセケチ)德日躋、善人雖可愛、委靡難提撕、出藍真(独ミセケチ)汝力、非予作(為ミセケチ)筌蹄、勗哉莫自画、前途猶邈兮

六五 古賀侗庵詩稿(始移菊苗・村莊聞蛙・客中聞子規)

一六・九×六一・一糧、画仙紙風。天保七年(一八三六)作。

始移菊苗拈韻

晨灌清泉夕戮虫、移來愛護掌珠同、寒儒勤苦君休咲、擬看黃金秋滿叢

村莊聞蛙

水田遠屋坐清風、閑々声中夕照紅、咲殺聽來充鼓吹、伊人塵念未全空(虚ミセケチ)

客中聞子規

声々啼血過遙空、起捲疎簾月正中、久客西歸寧待勸、從來鄉思浩無窮

六六 古賀侗庵詩稿(夜到漁家・逢俠者)

一九・三×一三七・七糧、四枚繼、杉原か。天保四年(一八三三)作。

夜到漁家拈韻

柳塘日没月如眉、談尽漁家樂事奇、隔壁稚兒方詳語、始逢俗客到茅茨

逢俠者

燕市有大俠、英風衆所宗、双眼如耀電、一怒髮上衝、袂服襲綺繡、劍光散芙蓉、一日旗亭上、邂逅偶相逢、豈凶(意ミセケチ)傾蓋際、莫逆情鄭重、自道骯髒性、之死惡面從、人間不平事、傍觀心寡悰、一諾泰山重、不換祿万鍾、吾咲今代士、脅肩事(満目尽ミセケチ)足恭、炬赫五侯門、心独無吾蹤、請看桃李艷、了輸(争如ミセケチ)後彫松、頑鈍鉛刀質、豈敵百鍊鋒、嗟予讀万卷、驚視汝猶龍、從此屢欲会、共吐磊塊胸

六七 古賀侗庵詩稿（客中逢故人）

一六・八×七二・三種、二枚継、画仙紙風。弘化元年（一八四四）作。

客中逢故人探韻

飄々為遠客、閱過幾多秋、豈意知心友、邂逅長江頭、班荆共叙  
旧、欲語淚先流、我自辞桑梓、蹤跡如雲浮、長劍纔自衛、寒暄  
一弊裘、傾危莫人恤、顛領誰我調、对面申盟約、背面即仇讐、  
親姻且或薄、行路人詎尤、世途多荆棘、七尺安所投、二豎動纏  
繞、衰鬢雪霜稠（鬢髻雪滿頭ミセケチ）、艱辛飽嘗尽、夙志未  
少酬、踰躓身世事、微子莫与謀、奈何絆塵務、無計可挽留、握  
手倏分手、薰心万斛愁、明朝関河隔、悵望青山悠

六八 古賀侗庵詩稿（画鷹）

一七・七×四〇・三種、二枚継、画仙紙風。冒頭に朱書「一六」とあり、「煜」朱陽凹印を捺す。弘化元年（一八四四）作。

画鷹探韻

山肩龍爪爛金眸、颯爽雄姿初脱鞴、高樹竦（聳ミセケチ）身翎

耀日、清溪照影氣横秋、勢冲碧落大鵬避（匹ミセケチ）、威遍

平原凡鳥愁、素練風霜朱夏冷（冷朱夏の冷ミセケチ）、可知能  
画妙無儔

六九 古賀侗庵詩稿（秋雨）

一六・七×五二・二種、画仙紙風。弘化元年（一八四四）作。

秋雨探韻

春來憂旱久、離畢忽滂沱、平野黑雲压、怒颺滄海波、氣難調玉  
燭、勢似挽銀河、経月未曾歇、漏天奚足多、濺摧臨水柳、滴破  
滿池荷、渠竇觀魚上、泥塗無客過、断鴻求匹侶、哀蟬伴唵哦、  
祇怕淹蘆舍、兼愁傷黍禾、同胞坡老嘆、艱食子桑歌、病叟最酸  
楚、奈茲遙夜何

七〇 古賀侗庵詩稿（墨江晴雪・詠史）

一六・八×六五・二種、二枚継、画仙紙風。天保二三年（一八四二）作。

墨江晴雪探韻

墨江快雪勝山陰、何敷花時月夕尋、湧出玉峰模遠浦、描成瓊樹  
列清薄、綺羅散變雲僊境、絃管消聞水鳥音、最是騷人真得意、  
蹇驢背上飽長吟

詠史

隆冬三尺電、前路黯難分、靜整熊羆卒、先驚鸞鶴群、回廳嚴刮  
面、堅凍冷通筋、早軫鱷鯨至、滿城眠未聞

七一 古賀侗庵詩稿（食筍・觀驢馬）

一六・七×八七・七糶、二枚継、画仙紙風。天保一二年（一  
八四一）作。この年、浅草奥山の見世物にロバが出た。「驢馬  
浅草觀世音奥山ニ於テ興行仕候」と命名された森田治兵衛刊の  
引札がある（江戸東京博物館蔵）。

食筍拈韻

寒厨閑者緑龍孫、下物芳甘酒可温、他日払雲千尺質、憐充一席  
腐儒簞

觀驢馬

近聞黔之獸、遙至自西溟、双耳批竹峻（如批竹の如ミセケチ、  
峻を補入）、脛瘦似鶴停、牽來觀音寺、仰見金榜釘、觀者群如

蟻、擲錢声瓏玲、齊声呼奇絶、比慶雲景星（雲ミセケチ）、此  
物值慕賤、纔存羸馬形、所以窮措大、騎過瀟橋亭、自（縦ミセ  
ケチ）非産殊域（殊域産を軛倒）、争得美名馨、菖蒲花足貴、

縁人見未經、蜀魂声見賞、全為難屢聽、眼前多英傑、藻鑑何冥々  
（粲然如日星ミセケチ）、漫發才難（無人ミセケチ）歎、遠求之  
野垌（賢否両冥々ミセケチ）、季葉（末俗ミセケチ）愛新異、  
大夢何日醒（迷溺夢未醒の迷溺・未ミセケチ、大・何日を補入）

七二 古賀侗庵詩稿（賦得池塘生春草）

一六・九×四七・一糶、画仙紙風。天保一三年（一八四二）作。  
賦得池塘生春草拈韻

雪尽清池漲、天音和氣颺、青莎垂玉沼、嫩草被金塘、靡々含膏  
雨、緘々迎艷陽、煙中多媚態、風外散微香、柔似狐裘軟、平如  
熊席張、柳条垂縮髮、梅蕊点成粧、映水魚吞影、連林鳥弄芳、  
柳衣堪比緑、闌玉了輪蒼、昆季夢魂会、王孫婦意忙（葉招瀾陵  
路、色憐長信傍ミセケチ）、空添思婦（臨別ミセケチ）涙、更  
斷離人（憶郷・遊人ミセケチ）腸、縹渺傷心遠、芋眠惹恨長（入  
夢長ミセケチ）、豈云希謝客、矢口漫裁章

七三 古賀侗庵文稿（天然硯銘）

一六・八×四六・八糶、画仙紙風。句点あり。天保八年（一八三七）作。

天然硯銘分韻

有扁奇石、生白雲峰、文燦星日、玉質玲瓏、窪然成池、見茲天工、式供磨墨、不煩雕鑿、毛楮並進、昕夕伴躬、賓筵文玷、愛護歎重、書聖揮染、走蛇騰籠、惡札播醜、亦於箇中、時俗譏褒、常任所逢、知白守黑、清濁并容、孰謂量窄、江海是同、

七四 古賀侗庵詩稿（老婦歎鏡）

一七・〇×四四・三糶、画仙紙風。冒頭に墨書「四」朱書「一」とある。天保一四年（一八四三）作。

老婦歎鏡探韻

嫁時芙蓉鏡、明如新月磨、憶曾芳齡際、日对描双蛾、自恃容華盛、矜持凝秋波、烏啼將花落、流光一擲梭、昔照鬢雲綠、今照蓬頭皤、昔写嫣然咲、今写涕泗沱、少老真常理、感触悲如（奈

ミセケチ）何、応長鎖塵匣、衰年夢裏過

七五 古賀侗庵詩稿（寿葛蔭飯尾翁六十）

一七・〇×二四・五糶、画仙紙風。冒頭に朱書「六」とある。弘化元年（一八四四）作。七言絶句二首。

寿葛蔭（この二字補入）飯尾翁六（七ミセケチ）十

嬰鏤行年已七旬、童顏玄髮地僂倫、最欽平素積能数、郷里翕然称善人

四方雲集滿堂賓、競脩金觴祝大椿、老健如斯（借問謁齡ミセケチ）何以致、児孫孝友一家春

七六 古賀侗庵文稿（謝人恵竹筍牘）

一七・六×六八・九糶、二枚継。訂正朱書。墨句点あり。天保二年（一八三一）作、『文集』では「文会席上」と注記する。

謝人恵竹筍牘

春來米佃翔貴、都下居殊不易。加旃愁霖黯黷、子桑殆病（この間、如咲如哭ミセケチ）之際、驟聞剝啄声。跣而出応、則銀鹿



賁然至、致郇翰一道、併擲賜新笋滿担。驚喜開（展ミセケチ）視、（この間、則ミセケチ）犢角繭栗、錦棚重疊。即非風流饒太守、口已津々流涎矣。念茲（此ミセケチ）俊味、独充一己之嗜（欲ミセケチ）、固所不嫌。又憫家人輩、竟歲未嘗一染指甘脆。因欲散大惠乎衆。於是洪炳熾炭、巨鍋烹煮（煮羹の羹ミセケチ、烹を補入）。胸息而熱、闔家聚頭（相与ミセケチ）鋪歛、莫不嘖嘖贊其美。感恩之極、非謝可罄。但自奢入儉難。飫牛羊者、不顧魚飧。今日一果腹（下箸之ミセケチ）後、居恒所甘、粗糲之餐首宿之盤、難復近口矣。且（又念ミセケチ）此物（筍ミセケチ）、不罹剪伐之災、而滋養於雨露、異時必当排雲障日、以供子猷嘯咏。乃為酸儒所陷、与菜羹脱粟同充飯坑、亦筍之薄命者也。興思及此、不禁停箸三嘆。足下聞之、得無噬杞叟善憂唐衢善哭、露窮措大之本（骨ミセケチ）相乎。率復不既。

七七 古賀侗庵文稿（蘭亭帖跋）

一六・八×七八・〇、二枚継、画仙紙風。朱訂止・句点あり。

乙未は天保六年（一八三五）。

蘭亭帖跋

章子厚日一臨蘭亭序、而蘇子瞻斷其必為惡札。既而果然、人莫不服蘇論之卓。是亦所謂不幸言而中者也。夫書尚於心得（この間、神悟ミセケチ）、無所嚮而非師。故古昔善書人、有聞鼓吹看舞劍盞而得書之神者、有觀道上蛇鬪而洞知草聖之妙旨者。矧蘭亭者、王右軍畢生得意之書、而用以為繩纏乎。意子厚（この間、之於蘭亭ミセケチ）、泥形似、而不諳風骨、拘々於点画、而遺忘其（この間、精ミセケチ）神、所以流於汙。此自學之失其方、非日臨蘭亭之咎（罪ミセケチ）也。鈞是老聃（子ミセケチ）也。吃公子學之、以自殺其身、留侯（張子房ミセケチ）學焉、以翊成炎漢四百載之祚。明乎此、則可与學蘭亭矣。乙未如月

七八 古賀侗庵文稿（趙広漢論）

一六・七×一〇九・四糎、三枚継、画仙紙風。句点あり。天保六年（一八三五）作。『文集』には「席上」と注記する。

趙広漢論

前有趙張、後有三王、時人贊（この間、頌ミセケチ）良（循ミセケチ）吏之言也。漢史録以為美譚。後人挾此、遂躋広漢、以為循吏之選。予醜疑之。夫広漢（この間、特察々小明ミセケチ）、

特（補入）斗簪之器、曾不足為士君子称道。幸甚哉其獲斯名於世（當時ミセケチ）也。觀其錡箠之制、鉤距之法、專以擿伏發姦為務、務（苟ミセケチ）逞私智、不知行所無事、愷悌之情薄、而絞許之意熾。任以為（この間、留什一之賈ミセケチ）、奉行簿書之小吏、則或可也。烏足（可ミセケチ）以為天子牧豎黎、総持法紀耶。蓋広漢察々之明（この四字、之為人ミセケチ、さらに小ミセケチして之に訂正）、微以為知。少有才而昧於（不聞ミセケチ）大道。聖賢之所不取（この六字ミセケチ後イキ也（補入）。其人之汙若此（以上六字補入）、宜為衆（時人ミセケチ）所憎遠。而（この間、其ミセケチ）服刑之際（この二字、也ミセケチ後補入）、至吏民守闕号泣者数万人。名声藉々天下、殊可怪。意爾時守土之吏、鮮克悉心民事、如広漢云為（才々之行ミセケチ）、亦足（この間、以ミセケチ）來人信慕。天下咸惑、則小不惑者、自膺（攘ミセケチ）賢智之（この間、美ミセケチ）名。広漢之誉望、祇見當時守令之乏人耳。至於魏丞相家婢、有過自殺死、而疑夫人妬殺、將吏卒突入（この間、丞ミセケチ）相府、詰責夫人、欲威脅以自脱已罪、則以下犯上、大損（この一字補入）傷国体（以々体、黠の下より移動）。全然桀黠（この間、回通ミセケチ）小人之態（この一字補入、尤者且所

不敢をミセケチ、誉■の二字補入後ミセケチ）、即百行靡一闕、且（尚ミセケチ）不足贖此巨（以上二字、其ミセケチして補入）罪。矧広漢之齷齪乎。漢宣帝以殺趙韓蓋楊、貽誚（得譏ミセケチ）乎千載。宣帝聡察（この間、而ミセケチ）果于殺、其刑誅（この間、固ミセケチ）多不協于中者。然広漢之死、則洵有自取之道、不可專以此蔽（以上三字補入）罪宣帝也。

#### 七九 古賀侗庵文稿（読三魏文集）

一六・六×二二〇・三種、三枚継、画仙紙風。朱墨訂正、墨句点あり。天保三年（一八三二）作。「三魏文集」は、清・林時益編『寧都三魏文集』で、魏伯子（際瑞）・叔子（禧、字は水叔）・季子（礼）および興士（世傑）昭士（世傲）・敬士（世儼）の文集を集めたもの。

#### 読三魏文集

三魏文集、総萃寧都魏氏兄弟三人文於（為ミセケチ）一編（集ミセケチ）者也。而其従子両三輩、所作（文ミセケチ）亦附見焉。然就其中、叔子水叔（この間、所作ミセケチ）、独矯々翹秀、竟兄弟諸姪、近之黯然亡光耀。猶之王導謝安伝、王謝諸（この

一字補入) 子弟、累々(続々ミセケチ) 羅列、而莫(無ミセケチ) 一人(この一字補入) 能望茂弘安石肩頂(この間、者ミセケチ)。則直目以一叔子集可也。叔子文、色沢絢爛、而骨氣厚重秀爽(老蒼超秀の秀以外ミセケチ)、老景之雄邁、半山之峻潔、兼有其美。在明季(この一字補入) 清初(この一字補入、之際ミセケチ)、卓為(爾ミセケチして称、さらにミセケチ) 大家。前乎是(この一字補入) 茅渚之庸(平ミセケチ) 凡、後乎是望溪鈍翁之枯淡(萎爾ミセケチ)、拳世所推(この間、導ミセケチ) 為一代文宗。今而平心比較、相距不啻百里之遠也。同時独侯朝宗称(為ミセケチ) 勁敵相当。朝宗天才似較優於叔子、而中道夭折、未足其(以上三字補入) 鎔鍊(この間、未足ミセケチ)。故俊(飄ミセケチ) 逸之態有余、而了不如叔子之精緻深穩。且評(語ミセケチ) 其制行、則朝宗特(この間、遊蕩ミセケチ) 薄倖一少年、非(未ミセケチ) 可与叔子之謹嚴同日語(而譚) 也。此(三魏文ミセケチ) 集、十年前清商始齋來、芸(文ミセケチ) 苑具眼(有識ミセケチ) 者、觀之莫不(以上二字補入) 擊節嗟賞、以為不意明清之際、有此大文宗(章ミセケチ) 也。叔子之没、距今百有(この一字補入) 余載(年ミセケチ)。碌々諸(作ミセケチ) 家(この間、遺ミセケチ) 集、遽已鏤梨

伝(来ミセケチ) 東、而叔子文近歲始至。可見西土知而欣賞者亦(この一字補入) 殊尠矣。嗟乎士抱負才德、自晦待時、自不知乎世者何限。(この間、良可嘆慨ミセケチ) 乃至綴文之末芸(業ミセケチ、二字補入)、其庸劣者、能(翻ミセケチ) 取悅(この間、於ミセケチ) 流俗、自風調絕高者、翻致(以上二字補入) 埋没之(この一字補入) 久。良可慨慨(之不彰、人之遇時、其難若此、豈不重可愧痛慨耶ミセケチ)。六二云、文章如精金美玉、市有定価、非人所(この一字補入) 能以口舌貴賤。晚近世、精金美玉、殆至無定価。吾將如之何哉。

#### 八〇 古賀侗庵文稿(觀傀儡説)

一六・七×六三・七種、二枚繼、千鳥と波文の雲母刷に淺葱色ばかりの入った下絵入り画仙紙風料紙。句点あり。天保二年(一八三二) 作。『文集』では「席上」と注記する。

#### 観傀儡説

傀儡小戯也。而模写人世之俗状変態、莫切乎此。予半面之新知某、巧於弄傀儡。一夕招延族属朋旧於家、為奏此伎。衆賓既就坐、叙寒暄甫訖(以上五字補入)、注目視呈戯者、悄無一語(以

上四字、就坐の後から移動)。泊相与静(以上四字補入) 觀其弄傀儡之状(要妙ミセケチ)也。其悲哀如幽咽、其喜類軒渠嗚嘍、其舞似妙伎之(この間、翩々ミセケチ) 迎風廻袖、乃至転眇伸屈進退俯仰(以上四字補入)、莫不一一中節拍。觀者感嗟、齊声贊揚。婦女稚子(この間、之ミセケチ) 輩、或櫛爾愁思(以悲ミセケチ)、或暢然悅懌欣(莞爾以喜・欣喜ミセケチ、「躍」補入後ミセケチ)。中有蒼顏皓髮老叟。從而晒之曰、此特(この一字補入) 刻木牽糸、以象人驅、漫呈悲喜之容、而人亦乃(この一字補入) 為之喜且悲。無乃為愚迷之甚(以上五字、近迂謬ミセケチして補入) 乎。嗟夫兒婦人之見固為駢(以上二字補入) 陋、而老叟亦徒(以上二字補入) 知咲傀儡、不知(この間、咲ミセケチ) 人事之可笑有甚於傀儡(以上八字、又ミセケチして補入) 何其偏也。今代士人獲斗升之祿、則欣踊(躍ミセケチ) 欲狂、失半級一資、則戚々若將隕生。竟日之間、而七情千(万ミセケチ) 慮、樊然紛殺、未始有涯極。百年昏々、醉生而夢死。可哀也已。乾坤一戲場也、烝黎(擾々人物ミセケチ) 一大傀儡也。有機而牽引、有数而把持、亨塞潛見咸有使之(為造化所脅制ミセケチ) 不得少(少得の得を移動) 自由。乃欲以己乃大傀儡。咲世之小傀儡。独不念造物小兒、拍手、冷咲(咲・喚ミセ

ケチ) 於側(其上其左右ミセケチして側を補入) 耶。

八一 古賀精里文稿(水月樓記)

二七・八×一一八・二種、三枚継、手書きの薄墨界を施す。

各紙冒頭に朱書「一(一三)」あり。句点あり。後欠。樓の主は「成島邦之」すなわち幕府奥儒者の成島東岳(一七七八一—一八六二、名は司直、邦之は字)。佐藤一斎にも享和二年(一八〇二) 作の同題の文がある(『愛日樓文』所収)。

水月樓記

水月相得、天下之至觀也。然有水月之名、而無水月之実焉。其如水月何哉。水月樓者、浜在荒川、其有水月之美、蓋亦不佞言矣。水明于月(水ミセケチ)、々曠於水。故天下之至觀、在水月之相得也。逝者如斯、而未嘗往也。盈虚者如彼、而卒莫消長也。此蘇翁(子ミセケチ) 水月之各賦也。各萃水月之体、未言水月之用。浮光曜金、静影沈璧、此范老水月之合賦也。合言水月之略、未及水月之詳。彼水月之用姑舍、請(この一字補入) 詳說水月之合。水与月相遭也、止為円、動為楫、进而彈丸、碎而連珠、其緩也為游龍、其疾也為驚蛇、乍而電散、乍而星流、

或蕩乎無形、或飄然遠往。其細逐泡沫而遍及、其大合天地而為一、殊狀異態、變化奇偉。使觀之者、神魂不自守、悅乎惚乎、不知所定処。如是而後水月之能事畢矣。而樓之名実得焉。蓋月

非水、無以張其清光。水非月、無以大其渺茫。水月之相須、如斯而已。惟人亦然。性有賢良之資、文之以學。々非性、無以入焉。性非學、無以文焉。性學相得、而後為人之美者具焉。樓之主人為成島邦之、既有賢良之資、亦文之以學、猶水月之相得也。夫水之与月相得、固天下之至觀也。主人取以名樓、々之与人相得、亦天下之至偶也。吾拳以為樓之記。吾足跡未嘗至水月之基、而作水月之記、眼目未嘗歷水月之觀、而言水月之概。得因名推実、々以偶人也耳。水月樓之所得、豈（惟ミセケチ）惟水月而止哉。若夫銜迴遠之山、吞寬閑之野、風帆（以下欠）

八二 古賀侗庵詩稿（几銘）

一六・九×四〇・一種、二枚継、画仙紙風。天保五年（一八三四）作。

几銘分韻

祭文密理、深山之桐、斲之鑿之、匠石效功、矩方準平、高低得

中、安如覆孟、（凭ミセケチ）足以（この一字補入）息躬、羅列瓊典、史乘積重、青燈繼晷、毘勉三冬、尚友千古、与聖賢逢、志士隱時、心目疏通、情夫憑之、睡魔立攻

八三 古賀侗庵詩稿（贈売卜生・舟行寒暄）

一八・七×五七・〇種、画仙紙風。端表下に鉛筆書「表紙造らぬ」「5、7」とあり。天保九年（一八三八）作。

贈売卜生蘭韻

百錢纔免凍饑災、消長窮通附一盃、豈独吉凶論事兆、常將忠孝導（化ミセケチ）人來、紅塵不染心如水、白屋孤棲妻是梅、市上滔々趨利者、輪君清潔不貪財

舟行寒暄

一葉遲々欸乃催、金盆落月掛林隈、篷窓貪看江山曙、不覺霜華袖上堆

八四 臨孝女曹娥碑（前後欠）

（一）二五・〇×三四・八種、（二）二九・九×三七・七種。

王羲之の小楷作品として知られる「孝女曹娥碑」の、古賀侗庵

による臨書。底本未詳。後半の辞の部分の途中から後の部分で、ほぼ同じ部分が二枚あり、(二)は年記を除いて末尾まで記している。習字のため、同じ字(の一部)を連続で書いている場合がある。

(一)

訴神告哀、赴江水号、視死如婦。是以眇然輕絶、投入沙泥。翻々孝女、乍沈乍浮、或泊洲嶼、或在在中流、或趨湍瀨、或還波濤。千夫失声、悼痛万余。觀者填道、流淚掩涕、驚慟国都。是以哀姜哭市、杞崩城隅。或有劾面引鏡、髣耳用刀、坐台待水、抱樹而燒。於戲孝女(女を傍書)、德茂此儔。何者大國、防礼自脩、豈況(況を傍書)庶賤、露屋草茅、不扶自直、不鏤而雕、越梁過宋。比之有殊、哀此貞厲、千千載不渝、嗚呼哀哉。乱曰、丘墓起墳、光于(以上四字傍書)、銘勒金石、質之乾坤、歲數曆祀

(二)

投(手偏二度書き)入沙泥。翻々孝女、乍沈乍浮、或泊洲嶼、或在中流、或趨湍瀨、或還波濤。千夫失声、悼痛万余。觀者填道、雲集路衢、流淚掩涕、驚慟国都。是以哀姜哭市、杞崩城隅。

或有劾面引鏡(金偏二度書き)、髣髴耳用刀、坐台待水、抱樹而燒。於戲孝女、德茂此儔。何者者(者を傍書)大國、防礼自脩、豈況庶賤、露屋草茅、不扶自直、不(以上三字傍書)不鏤而雕、越梁過宋。比之有殊、哀此貞厲、千千載不渝、嗚呼哀哉。乱曰、銘勒金石、質之乾坤、歲數曆祀、丘墓起墳、光于后土、顯照天人、生賤死貴、義之利門、何恨華落、雕零早分、葩艷窈窕、永永世配神、若堯二女女、為湘夫人、時效彷彿彷彿、以昭後昆。漢議郎崔雍聞之、來來來觀夜闌、手摸摸其文文而讀之(之を傍書)。雍題之文云、黃絹幼婦、外孫齋白。又又云、三百年後碑冢当墮江中、当墮不墮、逢王王。

八五 学問所書付草稿(古賀侗庵)

一六・八×二八・六種、画仙紙風。訂正は朱書。部屋住の番入り選考において、学問所による試験の上位成績者に対する優遇を確認するための文書。『日本教育史資料』七所収、卷十九・幕府ノ部・試験のうち「御番方部屋住内試一件」に実例がある。橋本昭彦『江戸幕府試験制度史の研究』(風間書房、一九九三)参照。

部屋住御番入二付字問御褒美相成候者之儀申上候書付

林大学頭

御備者

大御番

大岡紀伊(細川長門ミセケチ)守組■頭(この二字補入)

清左衛門養子(惣領ミセケチ)

久保孫次郎

右者、文政十一(子)年一統学問御試之節、乙科御褒賜相成候

者二御座候。一統学問御試(この間、「之節」ミセケチ)四科

二科之御褒美相成候者者、部屋住御撰之節、右を以御番入被

仰付候先例二御座候。就而ハ(以上三字補入)此度部屋住御番

入御調(「御座候へ者」傍書してミセケチ)替御儀も(「御義趣

ヲ承及候へ者」ミセケチ)、先例之通宜可被(「右を以」に上書)

加候儀二奉存候。(この間、「且右之者儀人物篤実学問今以無懈

怠出精仕趣二御座候へハ旁以」ミセケチ)以何分右御番入人之(以

上四字補入)御折二不相漏様仕度(この間、「奉存候依之」ミ

セケチ)、此段申上候。以上

(子)十一月 林大学頭/林 式部/四名

八六 古賀侗庵筆『淵鑑類函』卷二百四十九拔書

一八・七×六九・〇糧、二枚継、画仙紙風。『淵鑑類函』卷

二百四十九・人部八・兄弟からの抜粹。順序はもとの通りでは

ない。

南史(正史十一 三) 旧唐書八(以上朱書)

樂鴛鴦之同池、羨比翼之共林、亮根異其何戚、痛別幹之傷心。

(曹子建)

宝録兄書、積之盈筭、不得新命、無以自慰、時輒温故、以积其

思、有信勿忘数字、每見手跡、如復暫会。(陸雪景与兄)

崔光悌謂次子曰、阿鴻摩天去、汝可不勉哉。(崔鴻)

有羅浮道者、為巨麟合丹剂。将分半以遺仲丘、命刀中破之、分

銖無差焉。(劉巨麟)

子之友弟、我知琴瑟。(文選)

瓊奉惠茂(茂惠を転倒)、蘭發玉輝。(喻兄弟之賢也、初学記)

誰無兄弟、如手如足。(弔士戰場文) 以兄弟為左右手(王修)

元方兄弟過荷爽、夜会飲宴、太史奏、德星聚。

急雪鵲相並影、驚風鴻雁不成行。(黄山谷)

友愛之至、本之天性。(庾袞伝)

荆葉 古有兄弟、意欲分異。出見三荆同根、接葉連陰。歎曰、木猶欣聚、況我而殊異哉、還共雍和。

致美〈史佚之言〉

明皇遊後苑。有竹叢、密筍不出外。帝顧諸王曰、父子兄弟相親當如此。因謂之義竹。

芸文、昔我兄弟如鸞如龍。喻兄弟之賢也。

夢草 分荆

況我連枝樹、与子同一身。〈靈運答惠連〉

造花夢相輝之樓。〈唐明皇〉

李祖仁兄弟十人、並慈孝廉讓、因名其江曰廉讓江。

周必大兄弟、年皆八十、詩酒相娛終其身。

李綸兄弟酌別江浜、兄弟相勵以清白。

阿驥〈劉正兄弟二人〉 八龍〈荀爽〉 五常 二惠

六龍 八達 双丁 兩到 東漢二龍 北齊兩鳳〈崔陵、一仲文〉

賈氏三虎 張氏十龍 王氏三珠〈王勃兄弟稱為三珠樹〉

陸暉家双壁〈暉〉

世称何〈この字補入〉 点為大山、胤為小山。

秦景通兄弟、号大秦君小秦君。

酪酥醜乳〈穆贇〉 慈孝廉讓〈見上〉

聯珠集〈竇群兄弟〉 花蓼篇〈李義山兄弟〉

西州五鳳〈謝筮五子〉

龍駒鳳雛 玉昆金友 閔鴻見陸機陸雲而奇之曰、此兒若非龍駒

定是鳳雛。時人以王銓王錫為玉昆金友。

管輅曰、吾与劉穎川〈美〉兄弟語、使人神思清發、昏不假寐、

自此之外、殆白日欲寢矣。

馬況曰、汝〈援〉大器当晚成、良工不示人以朴、且從所好。

慈明外朗、叔明内潤〈荀爽〉

袁西三馬 北齊馬子結三人、陽休之曰、三馬皆白馬。

軍中呼大子大夫〈李光進光顏兄弟〉

韓子華兄弟皆為宰相、所居第有梧桐、京師称桐木韓家。

時羨三楊〈楊憑兄弟〉 人称七薛〈薛播〉

棠棣碑〈賈敦頤〉

兄弟左右手、譬人將闕断右手曰、吾必勝乎。〈王修〉

八七 古賀侗庵筆拔書

一七・一×二〇・七糰、茶色染、代赭色下絵刷〈山水を抽象化した図様〉あり。故事ことわざの類を抜き書きしたものか。

出典不明。



軹首認手荼首

五道班六道辛、真臘異（真ミセケチ）閻婆之諺

竭純成後歴而難詳（干戚千載之錯）

積側理約黜而莫罄（刑天形天之差）

梅落子卿所作漫道□語

（風母堪餐ミセケチ）

黃鶴磯未往（呂巖）

拖齊運誕於菟域

劉敞解獸言（合点あり）

獸探魚脅

茄鼓為虎豹之稱並稱寧吏（傍線あり）

延佐箋

直將曹霸為弗興（傍線あり）

魏東平銘留七日紀名者緣漢訛蒼

系程忘季（唐學士睡起八磚編氏者）

竊恐（この二字転倒）虎還刺鳥

八八 古賀侗庵筆『佩文韻府』卷九十下拔書

一六・六×一九・四種、画仙紙風。卷九十下・入声一屋韻の  
目錄部分を写したるもの。侗庵の名、煜が含まれる。瀆と櫛の間、  
牘を書き落とす。

佩文韻府卷九十下 十二行二十五字

入声 一屋韻

菊陸軸逐牧伏宿說牘瀆瀆譎穀復粥肅育六縮哭幅斛戮僕畜蕃叔  
淑菽独卜馥沐速祝麓鏃蹙築穆陸啄覆鶯麴禿穀扑覲鸞燠澳輻瀑漉  
歎惡沃鵬竺筑簇簇暴掬服濮鞠鞠郁蠱復籠宿塾樸蹴煜謬倅倅球  
盃踴醜罇毓軸柚幅楅豆服輓胸愔踞楸陸夙踞蝮或餗祝匄消躡鱗霖  
浴僂殞俶撼繆輾輾蠓麗蓼條熇鸚願復榭齷劇茜遂囿棟莢菴翠桑  
腴復縝首礪趨儻噉械伏涑翳睇礪譎慮杼猴偈鴉副劬攏

佩文韻府 卷九十下

八九 古賀侗庵筆『淵鑑類函』卷四十八拔書

一六・八×三二・一種、竹紙風。『淵鑑類函』卷四十八・帝

王部九・帝誕からの抜粋。

青虹繞神母身。〔庖犧〕

大星如虹、下流華渚。〔少昊〕

玉鷄銜赤珠出、刻曰玉英。〔高祖〕

有丹霞、起赤龍盤棟間。〔漢武〕 猗蘭殿。

神光照於室內。〔孝文〕

紫氣充庭、神光照室。〔唐高祖〕

常星不見之夜。〔唐表〕

流星 乙日

星精 日角

丹陵 若水

五麟 七鳳

杜鳴 河清

龍盤棟〔漢武〕 猷金鏡

神光 紫氣

異香絳宿 五緯聚奎

靈芝葉茂 金龍〔宋英宗〕

鶴算 山呼

銅律禦戶之時。〔周世宗〕

川珍嶽貢。〔趙汝談〕

九〇 古賀侗庵筆『淵鑑類函』卷百七十五等拔書

一六・九×一〇六・三種、二枚綴。『淵鑑類函』卷百七十五・

禮儀部二十二・婚姻、百七十六・同二十三・天子納后、卷五十

九・儲官部・太子妃および太子、卷五十七・后妃部一・皇后總

載〔蘭殿〕以下、下段に記す、の抜粹〔二部未詳の語句あり〕。

婚禮に関わる語句を抜き出している。卷五十七は一枚目下段余

白に追加して書かれたと思われるので、ここでは末尾に移動さ

せた。ミセケチはすべて朱線を引いている。

夫昏礼万世之始也。取於異性、所以附遠厚別也。〔礼〕

〔婚授綏御輪三周〔礼〕ミセケチ〕 共牢而食合卺而醕〔上

等同〕

〔六礼 納采 問名 納吉 請期 親迎ミセケチ〕

儼皮束帛、使某也、請納徵。

視諸衿鞶 施衿結帨

成肅雍之德〔詩〕

霜降而婦功成。嫁娶者行焉。〔家語〕

魏制諸侯娶妃、以皮馬為庭美、加以大璋。

合二姓之好〈礼〉

（媒、謀也。謀合異類、使和成也。ミセケチ）〈康成〉

附遠 厚別

待礼 備物

男女待礼而成〈詩〉（一物不具、一礼不備、守節持義不往。

ミセケチ）

施鞶〈穀梁伝〉

結褵〈詩〉施衿

礼冠三千（合点あり） 儀陳九十

百兩（二周ミセケチ）

（晋授綬御輪三周〈礼〉ミセケチ）

（猶男女嘉時以類相求（招ミセケチ）呼也〈箋〉ミセケチ）

（奠菜〈礼〉采蘋〈詩〉ミセケチ）

（爾室 我儀ミセケチ）

女贄不過榛栗棗修以告虔也〈左〉

（反馬 用羊ミセケチ）

（晋書羊者祥也。婚者用羊、漢末始也。ミセケチ）

好逑 嘉礼 相攸 求助 此求助之本也〈礼〉

乘龍 射雀〈唐高祖〉

掌熊〈郭元振〉

鳳占 龜卜〈晋猷〉

近代昏礼納采（この二字補入）有嘉木、朱葦双石云々〈酉陽〉

唐人昏礼多用百子帳

（月下老人赤繩繫夫妻之足ミセケチ）

（共牢 合卺ミセケチ）

聖証論（毛伝ミセケチ）嫁娶古人皆以秋冬 必用昏昕 儀礼昏

礼行事必——

礼有四備〈穀梁〉幣象五行〈礼〉

王維詩、羅帷送上七香車、宝扇迎婦九華帳

大綱〈王吉〉（遠恥〈公羊〉ミセケチ）

思義 不用樂幽陰之義也。欲令子婦深思其義〈礼〉

礼物〈後漢〉吉事卜先日〈礼〉嘉耦〈左〉造端

皇駁其馬 娶于塗山

（宜爾（型子に合点、ミセケチ）穀似ミセケチ）

秦晋之匹 温如蒲葦固以膠漆〈崔駰文〉

青鸞飛入合歡宮、紫鳳銜花出禁中〈王昌齡〉

（美人倫之端始〈蔡邕〉ミセケチ）

在味無愧、幽不改虔〈王廙婦德箴〉

天与純粹、氣鍾元和、含章在中、發秀於外、周旋中規、進退有度、一往居桂苑、淑問已彰〔唐冊文〕

奉承宗祧、化成天下。

鷄鳴之得賢妃、則有儆戒相成之道。〔王安石〕

超任邈姒、比德皇英。令月吉辰、百寮奉迎。〔左嬪頌〕

軒轅首出、西陵以之作合。〔温子昇〕

太子納妃、有七綵杯、文綺被、長命杯、文綺袴。〔東宮旧事〕

金璽 璫珮

皇太子妃、金璽龜紐朱綬、珮璫玉。〔宋書〕

皇太子納妃、有漆龍頭支髻枕一、銀華環紐自副、金塗連盤鴨燈。

〔東宮旧事〕

有絳地文履一量〔漆花籠二具〔上〕〕 同心雀鈿一具〔上〕ミセケチ

ケチ

步搖一具、九鈿函盛之〔上〕

丙殿、甲館〔この二字補入〕 画堂

作儷儲貳、允婦冠族〔唐太宗詔〕

作合春宮、美協三善、曰嬪守器、式昌万乘〔上〕

幼海 少微 蒼篔竹

承天序〔漢詔〕

贊太子之盛德曰、日重光、月重輪、星重輝、海重潤。

〔太子監国給及龍之符。〔六典〕ミセケチ〕

孝〔補入〕成帝初居桂宮〔漢〕 蘭殿

龍樓〔鷄戟ミセケチ〕〔東宮故事〕

西池〔太子池 釈問注〕

銀榜 銅扉〔下漢書 銅龍〕

元圃池 樂賢堂〔皆梁〕

赤旄 黄麾 銅羊〔東宮旧事〕 金馬

〔丹霞刀 彩虹劍〔魏文〕ミセケチ〕

青蓋車〔後漢〕 朱明服〔肆考〕

四術〔礼〕三善

樂正崇四術。三四數乎。王太子一皆造焉。

省視膳食〔漢〕 春誦夏絃〔上〕

〔唐順宗為太子、誦詩好樂無荒以對〔唐〕ミセケチ〕

鄭書 劉易 卜賦 温箴 二疏 四皓 四友 六傳〔愍懷〕

游習〔成王〕 太子成万世之業〔漢〕 繼体〔之慶〕

鶴禁〔漢〕

〔不喪匕鬯〕ミセケチ

太子国之棟〔国語〕

逍遙百氏 潜思書籍〔皆魏志〕

合洛雷之象 入虎闈而齒胃

前星太子也〔五行伝〕

、蘭殿〔漢武生〕

、金・玉階 元墀彤庭

、彤管

、皇后親蠶、乘雲母安車。

、玄雲入戸〔慶都生〕〔傍線あり〕

〔、黄氣滿室〔下后生〕ミセケチ〕

、日角偃月〔梁后〕

、徳閭 坤儀〔宋仁宗〕

、分蘭称糸〔月令章句〕

、衣不扞采〔鄧后〕

、承天〔易〕 猶月〔礼カ〕

、正位 内主 内令〔周礼〕 同体

、服洗濯之衣 被之祚々

九一 古賀侂庵筆『淵鑑類函』卷四十八等拔書

一五・二×六九・六種、三枚継。『淵鑑類函』卷四十八・帝

王部九・帝誕、卷五十九・儲官部・太子からの抜粹。八七・八

八と重複する内容だが、こちらのほうがやや詳細、また楷書で

しっかりと筆写している。

拾遺記曰、華胥之洲、神母遊其上、有青虹繞神母身。久而方滅、

即覺有娠、生庖犧。

帝王世紀曰、大星如虹下流華渚、女節夢接之、生少昊。

休子曰、少昊生於禪華之渚、其渚一旦化為陵、鬱々葱々。

瑤光之星貫月如虹、感女枢、生顓頊。

有玉鸚銜赤珠出、刻曰玉英、含始吞之、生高祖。

人夢日生武帝。

生成一（この二字、帝ミセケチ補入）於甲觀画堂。

后見庭前〔中ミセケチ〕葛蒲生華光彩照灼、生高祖〔梁一を傍書〕。

生梁元一（この三字、帝ミセケチ補入）時、拳室中非常香、有

紫胞之異。

生高祖（隋一を傍書）紫氣充庭。頭上角出、徧体鱗起。

太宗（唐一を傍書）已生、有慶雲見瀾漫數里、上屬於天、二

龍戲於門外水中、經三日乃冲天而去。

有神人、長丈余介金操劍、謂妾曰、帝命与汝作子。遂生代宗。

宋太祖生於洛陽夾馬營。生之夕、神光照室、胞如菌菖被五色三

日不變、異香馥郁經月不散。

太宗生之夕、赤光上騰如火。

英宗生於宣平坊、赤光滿室、見黃龍遊室中。

孝宗母張氏、夢府君擁一赤羊來、遣之曰、以此為識。生於秀州

杉青牖之官舍、紅光滿室如日正中。

明宣宗始生之夕、成祖夢高帝授以大圭、命曰、伝之子孫、永世

其（この一字補入）昌。

姚墟（舜所生）丹陵（堯）若水（顓頊）

五麟七鳳（光武生帝、赤光照室如——）

河清（運命論曰、里社鳴而聖人出、黃河清而聖人生）

電繞樞（黃帝之瑞）

尚冠里（漢元帝生）

五緯聚奎（宋乾德五年、五緯如連珠聚於奎、明年真宗生）

靈芝葉茂（仁宗誕（生ミセケチ）降、郭后榻生靈芝四十二葉、

後仁宗享國四十二年）

金龍（宋英宗之瑞）

朔月之良 華封祝 先生如蓬

大人跡 雷電晦冥（高祖） 黃帝生寿丘

嘉禾九穗（光武） 鳳皇來集（光武）

三世丁年（宋高孝光丁年生）

水浮紅羅（——至、遂取為衣。明太祖）

千秋節 幼海（一作少海）

万歲觴 少微 明兩

洊雷

重海（日重光、月重輪、星重輝、海重潤）

瑤山（其上有入曰太子長琴。山海經）

青宮（東方東明山有宮、青石為牆、面一門、々有銀榜、題云天

地長男之宮）

元圃

鷄戟（東宮故事曰、一鳴一十張）

西池（西明內有太子池、或曰——）

東閣（魏文帝為太子時、北園及——講堂並賦詩）

銅扉（龍樓門）

少陽（——政範（唐武后撰と傍書）賜太子賢

鶴禁（太子所居）

吹銅〈古者太子生太師――而御戸〉

金世宗以名馬宝刀御膳賜皇（この一字補入）太子及妃、既而皇孫生、是為章宗。

成祖以皇太孫生長深宮、欲其知稼穡艱難、作書以飭勵之、名曰務本之訓云。

金世宗嫡孫生麻達葛山、因以山名為章宗小字。

解縉曰、好聖孫蓋指宣孫也。

龍枕〈太子妃〉

鴨燈〈全上〉

丙殿〈元后見於――〉

九二 古賀侗庵筆弁書甲乙附案

一八・五×九五・七糶、二枚繼。訂正朱書。「丑」は、儒者の顔ぶれからみて天保九年（一八三八）か。各自上中下の品評は朱字。『日本教育史資料』七所収、卷十九・幕府ノ部・試験に天保一一年から嘉永五年までの「御番方部屋住内試」の資料を収め、これと同様の採点結果も含まれている。

（端裏）

二月三月兩度御役宅におゐて布衣以上以下御役人御番方部屋住之面々御逢有之弁書仕候者甲乙附 林大学頭／御儒者

甲乙仕方段階

一 上ハ学問斗を以御撰相成事

一 中ハ武芸等宜敷候歟又ハ父年数等之候上（この間、上ミセケチ）に学問相兼御沙汰ニ被及（成ミセケチ）候事

一 下ハ一向御沙汰ニ不被及候事

右者先例を以左ニ取調申上候。

弁書甲乙附

二月十四日河内守殿御宅

下 小学 井関貞之丞

下 小学 村越只次郎

上 詩経 渡邊忠次郎

中 孟子 佐々彦之進

中 論語 長崎四郎左衛門

三月十六日肥後守殿御宅

上 詩経 三嶋平九郎

下 論語 平岩左京

中 詩経 永井廉八郎

下 論語 佐々木敏三郎

下 小学 山本勝次郎

以上

林大字頭

林又三郎

〈丑〉三月 依田源左衛門

増嶋金之丞

古賀小太郎

野村兵藏

26X/27/1

九三 某詩箋

二一・四×三三・〇糧、画仙紙風、代赭色で竹簡を模した罫

を刷る。文化八年（一八一二）、朝鮮通信使の易地聘礼のため  
対馬に赴く古賀精里を送る、品川での宴席で作られた詩。作者

不明。韻が基づくのは大江匡房「日本国牒高麗国礼賓省却廻方物等事」（『本朝統文粹』卷十一所収）の一句で、『江談抄』第五「都督自讃事」にも自讃の句として引かれるもの。「古今著聞集」卷四・文字や「十訓抄」卷二では「何」を「豈」に作る。この一紙だと八字のうち冒頭「扁鵲」の二字しか用いていないので、残り六字分、四八句がこのあと続くか。

辛未春、<sup>（平出）</sup>精里先生品河祖席、叙所懷同江師扁鵲何入鷄林之雲三句為韻

馬嶋海西偏、桑暎没処天、長風宜破浪、鵬際遊龍船、水路何復

絶、更程幾且千、可知多少信、輸与一朝鮮、昔在豊臣氏、何事

恣陵虐、令彼八道民、流離無所託、慶元撥乱明、盪滌指前惡、

爾年二百年、修得長隣約（後欠か）

九四 菊池西臯詩稿

二一・八×五二・七糧、画仙紙風、墨刷罫紙を用いる。近作

の詩の批正を精里に求めたもの。「丁卯」は文化四年（一八〇

七）。菊池西臯（一七六九—一八一三）は名、元習、字、博甫。

和歌山藩儒菊池衡岳の子で藩儒となった。詞書に頼杏坪・大沼竹溪・大田南畝・倉成龍渚らの名が見える。「春日感懷」の本



文中にあるミセケチは精里によるものか。引首印「臥華」、落款印「元／習」「博／甫」。

(印)

探梅分韻

頃聞杏坪竹溪二字刻意放翁、因乞高和敢供哂政

東皇取次巧安排、随处梅花無不佳、殘臘頻携三斗酒、上春穿破幾双鞋、斜陽細雨黃昏月、山店村園野水涯、詩擬放翁吾肯效、

愛梅未讓放翁懷

春日感懷

家風万事自無(この二字、不強、ミセケチ)求、官暇幽情付一丘、遺愛花余他日感、旧題聯憶往時遊、老梅纏竹深清蔭、古硯新毫試小樓、白日漸長過客少、援琴獨懶写閒愁

丁卯二月朔夜雨、明日梅園殊得佳色、午後強風、翌又風、

其三日会、有南畝杏坪龍渚三先生及同社諸公來看花之約、

因成此篇

小塙梅花雪作叢、高低開尽庄第宮、洗粧忽喜殘更雨、吹面還憂終日風、有約故人春水外、無情隣笛夕陽中、幸令借我看三日、

一任飄英西又東

応需神秀才賦得春江对酒

春江如練酒如餠、処々青帘趁晚晴、何岸煙花非雨露、幾家楊柳媚清明、霞圍繡幕鞦韆影、風送蘭舟笑語声、不倩十洲能画手、新詩漫付醉書生

応需題峨眉石

峨眉天外色、鍾秀一拳石、且暮書堂中、寒光徹几席

右近作乞 正

菊池習拜具(印)(印)

精里先生

九五 某詩箋

二五・〇×三九・八糰、画仙紙風。作者不明。二首目、七言律詩だとすればまだ一九字足りない。最終行上部破損、さらに後欠。

陪(台頭)精里先生遊山形侯深川別業

三春欲尽興難乘、幸值佳期拉旧朋、昨雨且驚紅變緑、名園堪感海為陵、橋通池面無多路、樓对樹頭高一層、休怪逍遙未帰去、賞心元是付鷗鵬

其二奉和精里先生(台頭)瑤韻

別館陪遊興不凡、樓高樹杪見江帆、人因撫勝檻刃立、鳥似惜春枝上囀、詞客苦吟夷入險、侯家珍餉甘和鹹、  
□□□□□頭歩、  
数点(後欠)

九六 龍潭周楨詩箋

二三・九×四八・九糶、杉原か。龍潭周楨は天龍寺寿寧院の僧、文化八年朝鮮通信使易地聘礼の時に接伴僧として対馬に赴任したので、その頃のものか。引首印「鳥銜華／落碧巖前」、落款印「楨／之印」「龍／潭」。

和呈古賀精里君芳韻

(印)

晴雨連旬猶未分、蕭然客舍少幽欣、風前忽送洋々曲、筆下巧裁朶々雲、愧我投閒且置散、羨君善武又能文、幾回掃榻相望久、不識登音何日聞

莞政 丹崖和南／(印) (印)

九七 橋本敬之詩箋

二九・一×二九・七糶、竹紙。橋本敬之は伝不明。『精里集抄』初集卷三・五言律に「首春積翠園次礼興韻」と題する詩がある。

第三句「豊沛譙」は漢高祖が帝位に就いた後、帰郷して昔なじみを招いて宴会をしたという故事だから、易地聘礼で九州に戻った時のものか。

積翠園奉呈精里先生

幸迎軍駕狗江頭、寂寞衡門物象幽、今日復看豊沛譙、英風千載仰芳猷

橋本敬之拜上

九八 西原貞吉詩箋

二九・二×三八・三糶、竹紙。西原貞吉は伝不明。橋本敬之と同時の作か。引首印「休々」、落款印「西原／貞吉」「伯／頤」。

積翠園奉呈精里先生

恭陪函丈席、提行侍先生、秬稻田間熟、郊原眼底明、千山方暮色、万樹尽商声、竟日耽幽趣、悠然塵外情

西原吉拝草(印) (印)

九九 石川彦岳詩箋

二九・五×六二・五糶、薄茶色染画仙紙風。石川彦岳(一七

四七―一八一六）は名、剛、字、君潜。小倉藩儒。易地聘礼で対馬に赴いた際に直接奉呈されたものか。引首印「寓神冲／虚之途」、落款印「石川／剛印」「谷／膝」。

(印)

奉呈精里老先生

文旆悠悠歴列城、薰風一路玉驄声、題橋嘗見相如志、衣繡今看  
翁子荣、(印)縱是清揚存夢寐、何俄握手話平生、但嗟矍鑠乘豪氣、  
直蹴蒼波騎巨鯨

雄飛一自起関西、幾歲望懸雲与泥、引印嘗驚懷緑綬、校書定識  
遇青藜、俠星座接文昌動、詞筆光兼龍劍携、此地何期迎馬首、  
執鞭不復避奔馳

石川剛謹拜／(印) (印)

一〇〇 中村嘉田詩箋

二九・四×五七・一浬、竹紙風。中村嘉田（一七七七一―一八  
三〇）は、名、咸一。古賀精里の弟子で佐賀藩儒。侗庵撰「精  
里先生行実」（梅澤秀夫『早すぎた幕府御儒者の外交論 古賀  
精里・侗庵』肥前佐賀文庫003、出門堂、二〇〇八、に『事実文

編』に基づく翻刻と現代語訳が載る）には、易地聘礼を終えた  
後一時帰郷した際、藩校で藩主隣席のもと講義を行った（使  
事竣、枉路展先墓於郷、肥侯親蒞学、聴君説経、贈遺極厚）  
とある時のものであろう。『花竹堂詩文鈔』には見えない。

公莅学延精里先生講経、命諸臣同聴、恭賦

方鎮開光嶽、時休睹景星、熊車臨泮水、駟馬下槐厅、尊既推千  
乘、重唯帰一經、講論輕漢閣、吁咈冀堯廷、大義乾坤正、單言  
社稷寧、洋々往聖訓、妮々同堂聴、滿座干城具、拳朝肝肺銘、  
先公崇礼楽、夫子輔藩屏、紹述欽丹臚、仰行存典型、深知  
今日事、足以福生靈

伏乞(印)／中村咸一稿

一〇一 猪飼履堂詩箋

二八・九×四二・六浬、画仙紙風。猪飼履堂（?―?）は名、  
傑、字、斗南。古賀精里の弟子。国立公文書館蔵昌平坂学問所  
旧蔵本に旧蔵書あり、他にも国会図書館に『三五要録樂目錄』  
金沢文庫本の自身による転写本が伝わる。引首印「澹泊」、落  
款印「傑印」。

(印)

秋夜奉訪精里先生(平山)分韻得侵

數畝開園傍泮林、問奇載酒晚相尋、秋容自合高人意、夜色能澄  
狂士心、經雨芭蕉抽翠燭、待風瀟碧奏瑤琴、枯腸搜尽猶無句、  
頼有虫声助苦吟

博學 傑拝具(印)

一〇二 猪飼履堂詩箋

二九・二×四一・二種、画仙紙風。筆者は同前。二首は一字  
アキで続けて書かれているが、ここでは改行して示した。引首

印「談藝」、落款印「臣傑之印」「斗／南氏」。

秋日(印)(台頭) 精里先生賁臨、時子猷偶在座、復邀子侃同賦得虞侵

散堂清暇遇來臨、適会三朋盞簪、異席光芒如北斗、同袍珍重  
比南金、桂華經雨香猶烈、松葉迎霜綠更深、共坐春風和煦裡、  
不知秋氣入唵襟

西風秋景日荒蕪、九畹慈蘭菊百區、小隱頗疑蜀園橘、幽懷且托  
嶧陽梧、揮毫鳴鳳遊雲漢、裁句清冰在玉壺、九日退朝重枉駕、

多炊白飯刈青芻 傑拝具(印)(印)

一〇三 岡野逢原堂詩箋

二九・〇×六三・二種、画仙紙風。岡野逢原堂(一七七五—  
一八二〇)は、名、行従、字、子言。水戸藩士。立原翠軒の弟  
子。なお、『逢原堂真跡帖』(カリフォルニア大学バークレー校  
東亜図書館蔵本が孤本)という近世漢学者筆跡類の模刻集に、  
精里が題跋を与えている。同書では前欠、全文は『精里集抄』  
二集卷一に収める。引首印「逢原堂」、落款印「岡野／行従」「子  
／言」。

(印)

過昌平橋(平山)大成就有感、因賦一律奉呈精里主智先生(伏乞)鄂荃

昌平橋上仰高門、聖殿築成昭代恩、(平山)美玉爭光産学海、大材備用  
育文園、魯鄒正道分邪徑、伊洛清波極遠源、請看扶桑德華發、  
長懸日月照乾坤

水藩 岡栳従拝／(印)(印)

一〇四 鈴木椿亭詩箋

二九・六×四一・六種、画仙紙風。鈴木椿亭（一七六五—  
八二九）は幕臣。大田南畝の詩友。印記「盧文／之印」「字／  
猷人」。

幸陪消暑宴、重踐隔年盟、新樹千章暗、清池一鏡明、窺魚巢鷺  
下、慣客泛鷗迎、聊欲酬佳設、愧無片句成

右陪精里先生遊姫路侯柳亭 鱸文拝稿／（印）（印）

一〇五 鈴木椿亭詩箋

二九・七×二八・〇種、薄灰色画仙紙風。「三田別邸」は現  
在の慶應義塾大学三田キャンパス。印記「鱸／文」「尤／人」。

芳園借賞会詩盟、何料招延及鄙名、蓮嶽遙呈千古雪、梅天為仮  
一朝晴、高林花謝鶯声老、絶海風来帆影輕、幾倚吟欄不帰去、  
要看巴月与潮生

右五月望陪精里先生遊島原侯三田別邸 鱸文拝具（印）（印）

一〇六 芳賀貞詩箋

二九・三×五〇・四種、画仙紙風。芳賀貞は伝不明。

精里古賀先生賜肥製团扇、賦之奉謝

江邸炎蒸夕、終宵郷夢難、一揮涼睡足、三伏旅心寛、色帯肥泉  
潔、影疑秋月団、従来同賞物、持此擬金蘭

伏乞正 芳賀（貞） 拝稿

26X/28/1

一〇七 古賀謹堂文稿

二九・一×二二・一種、二枚綴。漢文書簡の断片か。

（前欠）諒非穢・、誰嘲熱客。若開懷暢叙、俾清風来襲、則不  
啻如浴寒水、処涼台矣、偶（？）所（？）何敢以暑為鮮。

一〇八 古賀謹堂詩稿

二四・二×（三四・一、三三・七）種。本来は三枚以上続い  
ているものうち、連続しない二枚か。一枚目末行と二枚目初  
行は継ぎ目にかかっており、筆画が失われて読めない字がある。

当午陰雲散、南薰積雨晴、亀巖苔鮮湿、曙嶺檜杉明、意適無塵

事、樽芳有友生、不知風土異、坐作故鄉情

為客經春夏、故園千里余、人情多冷熱、俗事有乘除、自感齒牙

脫、誰憐毛髮短、（補）□□□□□□（後欠）

（前欠）脱苞、小渠飛水馬、深樹睡山貓、戸自生雲霧、人主在石、悠悠適所遇、容膝有衡茅

欲雨山雲合、峰々乍失青、礪溪生瘴氣、草木有蛇腥、睡少茶難喫、愁多酒易醒、時々閱豎籍、保撰服參苓

一〇九 古賀謹堂文稿

一五・三×二七・〇糶、二枚繼。『近思錄』に関わる言説をメモしたのか。別々に書かれた二枚を継いだか。二枚目初行の一部が継ぎ目に隠れている。

晦菴論近思先太極説、勉齋則謂名近思反若遠思者。

黃氏日抄四十卷。読本朝諸儒理學書引之。

勉齋コノ上数句アリタルヤウ也。猶他書ヨリ檢出スヘシ。

（紙継）

二洲近思之説善矣。然語似倒。須言、自国而家、自家而身云々、乃得近思意。

類推則自所已知、而達所未知之意。以為近思方法則可以為近。字解義則不可。

黃勉齋遠思之譏、蓋病世之好談。太極陰陽仁義而不切於日用行事之実者（この一字補入）而發。然東萊跋語已準備此疑久矣。

一一〇 弘化改元詔

二四・七×三四・二糶、杉原か。古賀謹堂筆、句点あるが、足りないところは補った。

詔、朕聞、皇猷得和、則天地表符瑞、政教罔孚、則陰陽示災眚。是以、乘乾之后、膺籙之主、莫不感禎祥而建元、因咎徵而改号。朕以庸昧之身、恭居大宝之位、日慎一日、年将卅年、心雖勞于惕勵、化未及于雍熙。頃年武蔵国言、城中有灾、今年又聞遭祝融崇。此城也、国之要害、朝之重鎮。々々有災、是誰謬歟、靈譴不虛、咎在朕躬。爰尋釋先蹤、奉遵旧典、革紀年之号、數在宥之沢。其改天保十五年、為弘化元年。大赦天下、今日味爽以前、大辟以下、罪无輕重、已發覺、未發覺、已結止、未結止、咸皆赦除。但犯八虐、故殺、謀篡、私鑄錢、強竊二盜、常赦所不免者、不在此限。又復天下今年半徑、老人及僧尼、年百歲以

上給穀四斛、九十以上三斛、八十以上二斛、七十以上一斛。冀上答天心、下協人望、攘氛殿於一旦、期休祥於万年、普天率土、俾知此意。主者施行。

弘化元年十二月二日

一一一 昌平志積奠今儀不審（古賀謹堂）

一六・六×二五・八糶、二枚繼、薄墨色画仙紙風。積奠の配役の服装に関する疑問を記したものの。

昌平志云（積奠今儀）、

司樂狩衣、刀者素襖云々。

執爵六人、次着布衣者、着素襖者、着白丁者、各従其後。

右素襖ヲ着スル人、庭上ニ列スル時、袴ノ長裾ハク、リ居候ヤ、又履物ハ何ヲはき候ものヤ。

西猷官終猷巨並服緑袍半靴、各執事服布衣麻鞋、楽人服狩衣浅靴。

右麻鞋ト有之ハ、イカヤウノ形ノ物にヤ。

侗庵宛書簡を集めたもの。

一一二 岡本花亭書簡（古賀侗庵宛、某年二月九日付）

一五・七×三五・四糶、二枚繼。「両先生」とは侗庵の長兄・次兄、佐賀藩儒の古賀穀堂と洪晋城（洪家に養子に入った）であらう。

拝誦御暄和益御清適奉恭賀候。さてハ相<sup>（平出）</sup>候両先生御揮染早速被成下、大ニ適願仕候。晋城先生御通称被仰下、昔年馬島ニ而韓人御筆話中ニも、御姓氏之事ニ被相及候歟と存出し候。今度幸ニ御在都中ニ而、高作御一揮速ニ相叶、大悦仕候。御書法も乍憚御見事、呉々も感佩仕候。御序ニ御両所様ニも何分宜奉頼候。扱又拙詩早速御閱評被成下、御面倒の御事千万奉謝候。高評とくと拝見仕、遍く相楽申候。只今内客を得、御受取迄草々申上残候。頓首拝復

二月九日

小太郎様 忠次郎復

26X/29/5

\*第一冊

一一三 岡本花亭書簡（古賀侗庵宛、某年二月四日付）

一五・一×三二・一糶、蒲公英多色刷下絵入り料紙。前書簡の直前に出されたものであろう。「野邨先生」は野村篁園か。

（端裏）小太郎様 忠次郎／＼

先刻者御手教拝誦仕候。忽已春分天氣和暄、愈御清適奉賀候。

高作御揮毫并野邨先生題詩とも早速出来感荷仕候。御序二尚

御挨拶宜奉頼候。御仲（平出）兄様御文雅ハかねて伝承仕罷在候。拙詩

録進仕候やう被仰下、則漫揮応命候。御在都ヲ存不申、近々御

帰国のよし、拝謁者仕らず候へとも、御序に可然奉頼候。この

小緒幸二 高作御題被下候ハ、下壁連城別而かたしけなく奉

存候。可相成ハ、早速御一揮被成下候様、何分宜御通致奉願候。

且拙稿御暇候ハ、御閲評も可被成よし、乍御面倒其内いつに而

も奉願候。勿々頓首

二月四日

御仲兄様御通称御次ニ被仰知可被下候。

一一四 興三郎書簡（古賀侗庵宛、〔弘化元年（一八四四）〕一  
二月二七日付）

一六・五×四五・四糶、黄色染料紙。本文末尾と宛名の間の

余白に「麾下人手書／甲辰十二月識」という侗庵の識語がある。

この「甲辰」を書簡の書かれた年とした。興三郎は不明。侗庵の弟子か。

一簡 呈進仕候。兎角鬱陶之天氣御座候。併寒威者余程凌好御

さ候。先以御清勇奉賀候。誠二其後者御疎闊申上候。真平御仁

恕可被下候。扱此品粗疎之至御坐候得とも、不相替入高覽候。

御笑納可被下候。先者右進度如斯御坐候。頓首

晩冬廿七日

尚々時氣御自愛專一奉奉存候。最早年内余光も無之、来陽芽

出度拜眉万喜可申上候。以上

古賀先生尊下 興三郎

一一五 中村為一書簡（古賀侗庵宛、某年八月二日）

一六・〇×四二・八糶、薄手上質の料紙。中村為一（？）

は幕臣、学問所勤番組頭。文中『彙刻書目』は昌平饗が文政元年（一八一八）に刊行した官版のひとつ。増刷は五部単位で行



い、特別に一部だけだと割増料金だったということか。「宮崎次郎太夫」は編著『視聽草』で知られる幕臣・学者の宮崎栗軒（安身）か。

（端裏切継力）小太郎様納帳前 安八郎

益御清適被成御坐奉恭喜候。然者、過日御約束仕置申候

彙刻書目 一部

右御急キ一部御摺立、掛り之者江為相調申候処、別紙之通増価

ニ而出来仕候段申聞候。尤右同書外ニ兩人願入御坐候間、御急

ニ茂無御坐候ハ、少々御見合被成候ハ、無程五部も満可申

候哉ニも被奉存候。別紙増価書付入御覽、此段奉申上候。

一 此絹 一 〈但書画帖江張り申度〉

右江御高作御佳詩何卒御染筆被下置候様、宮崎次郎太夫相願申

候。草行之内御随意ニ御書奉希候。乍序此段申上候。以上

八月二日

一一六 磁書簡（古賀侗庵宛、某年二月一八日付）

一七・一×六三・〇糶、二枚継、雲母引料紙。虫損多し。磁

は不明。

（端裏）侗庵先生閣下 〈弟子〉磁拝具

乍憚啓上仕候。時下寒冷 尊体益御万福被遊御動止奉筆<sup>レ</sup>山候。

随而近來菲薄之至御坐候得共、御看一籠奉獻候。聊寒氣御詞申

上候印迄御坐候。御笑納被成下候得者、難有仕合奉存候。御約

束之通明日參上仕、万喜可申上勿々御坐候。頓首

季冬十八日

一一七 永井忠敏書簡（古賀侗庵宛、某年六月六日付）

一五・四×四一・〇糶。永井忠敏は謹堂同様、京都二条城在

番になった幕臣か。「九二 古賀侗庵筆弁書甲乙附案」に名が

見え、中の成績を収めている。追伸部分は、端余白に書き始め、

足りなくなつて奥余白に続いている。

一筆啓上仕候。甚暑之節御座候得共、益御莊健被遊御座、恐悅至

極之御儀奉存候。右者書中御容体奉窺度如斯御座候。恐惶謹言

六月六日 永井廉八郎忠敏（花押）

古賀小太郎様參人々御中

猶以時候折角御自愛可被遊候様奉存候。私義当一条無異義

義

在勤罷在候。乍恐尊意易思召可被下候。当地相応之御用も

御坐候ハ、無御遠慮被仰下候様奉存候。私義当年者御倉

奉行相勤候而、折々御城外江張出候間、当地之文人等承り

候処、当地も以前と違、扨地文雅相衰候様子、只拳国利耳

耆候者斗二御坐候。折々其甚敷事耳承り候。皆雲上人之風

儀奉存候。以上

一一八 勝田半齋書簡（古賀侗庵宛、某年八月二十七日付）

一六・三×四一・一 種、二枚継。勝田半齋（一七八〇—一八

三二）は幕臣、学問所勤番組頭から書物奉行になった。

新涼之候益御万祉被為在奉拵賀候。然者、先達而一寸申上候高

氏之秘書、渋川より借置疾為持差上可申候所、怠慢遲滞仕候。

則奉差上候。寛々御覽被成宜鋪御座候。只々大二秘物二仕候間、

其思召二而御覽被下候様仕度旨渋川申聞候。余ハ拝 芝万々可

申上候。頓首

仲秋念七日

先達而高氏より本を借一見仕候。本ハ今少シ委敷もの、様ニ  
覚候所、これハ至而略々之ものニ御座候。何之御用ニも立申

間鋪候得共、先御覽二入申候。

侗庵先生絳帳下 勝田献拜

一一九 林敬蔵書簡（古賀侗庵宛、某年十一月八日付）

一七・〇×六八・八 種、二枚継。林敬蔵については不明。端

裏別筆（謹堂か）「〇林敬蔵」とある。

頓首奉拜啓候。寒冷之節二御座候処、益御機嫌克被為在御座、

目出度御義奉恐賀候。扱私義、書生寮ニ罷在勤学中ハ段々御教

訓ニ相預り、難有仕合ニ奉存候。前月廿二日無恙帰郷仕、家母

も次第ニ快氣ニ相移、大悦仕候。来春勿々再遊仕度奉存候得共、

只今之処難斗御座候故、先退寮之義奉願候。発足之節參上仕候

得共、御客来二而却而御面倒ニ奉存候故、拝謁之義不相願、先

者在寮中之御礼奉申上度如此御座候。寒冷次第ニ増加之節、御

保護被為在候様、乍憚奉存上候。以上

十一月八日 林敬蔵（花押）

小太郎様

一一〇 那波鶴峰書簡（古賀侗庵宛、〔天保六年（一八三五）正月二日付〕）

一七・四×九六・三種、間似合か、薄墨・薄茶二色刷松樹下  
繪、金銀砂子散らし料紙を用いる。那波鶴峰は、徳島藩儒。魯  
堂の女婿で家を継いだ網川の子に当たり、精里・侗庵の門人。

二六二・二六三にも名が見える。端裏別筆（謹堂か）「○那波  
辰之介」とある。文中「平次郎」は柴野栗山の養子で徳島藩儒  
の碧海。天保六年（一八三五）七月没、『枕上集』一〇巻は八  
年の刊行。「山陽集」は四年刊『山陽詩鈔』、『杏坪集』は五年  
刊『春草堂詩鈔』を指すと思われるので、本書簡は六年正月と  
推定した。「筱寄長左衛門」は精里門人で大坂の儒者篠崎小竹、  
私塾の弟子が多く裕福なことで知られた。「齋藤五郎」は魯峰  
の父網川の門人で精里にも学んだ齋藤鑾江（書簡二通後出）、「野  
田」は精里門人で丹後田辺藩儒の野田笛浦か。

尚々、春寒随時為道御自愛奉祈候。且末毫二相成候へ共、  
小先生（平出）へも本文同段御機嫌奉窺候。已上

一簡謹啓仕候。即辰春寒難退御坐候処、帳下（平出）益御清寧可被成御  
坐奉恭賀候。始終多忙に取紛、時々御様子も不奉窺候段、万々

御海涵奉希候。此間賀正之書者奉呈候得共、此度幸便尚又御機  
嫌奉窺候。且堯花紙三百枚、不<sub>レ</sub>珍品ニ御坐候へ共、献呈仕候。

御笑受可被下候。尤近来紙益濫悪ニ相成、御用ニ相立申間敷と  
奉存候へ共、別ニ存付候品も無御坐候故、先差上申候。拙稿一  
巻序二任七差上候間、乍御面倒御電覽奉希候。誠ニ孤島索居、  
良師友無御坐、著作等も随意而已ニ而、寸進無御坐候。何卒痛  
ク御斧削奉希候。平次郎も近年中症ニ而、始終臥蓐、最早著作  
も出来不申候。然シ自著枕上集（集／名）校正、近日上木之様  
子ニ御坐候。山陽集・杏坪集杯近来段々上木、御寓目も被為在  
候や。御鼎評承申度候。筱寄長左衛門、年之一度宛弊邑へ参逢  
申候。当時関西之大家ニ御坐候へ共、唯其財癖ハ可惜事ニ奉存  
候。齋藤五郎も近年浪華ニ而下帷、追々名も出申候。尤異説益  
盛之様子ニ御坐候。野田者此節在国ニ御坐候。様子承不申候。  
其御地英才も御坐候や。承知仕度候。且又御新著少々和三郎・  
富三郎杯ニ御写サセ御投示奉希候。先生時候奉窺度旁草々申上  
留候。万緒奉期後祇候。恐惶謹言

那波辰之介希顔（花押）

正月廿二日

古賀小太郎様御侍史

一一一 陶白常書簡（古賀侗庵宛、某年五月二三日付）

一六・三×七〇・四糶、三枚継。陶白常については不明。文面からすると幕臣か。

梅候陰晴難凶候。先以 道体万祉恭喜不翅奉存候。然者、昨日者凶らす御光 臨被下、千万奉謝候。然処折悪不在、不能拝謁、千悔万憾仕候義ニ御座候。過日小集之節、御貴臨下されすとの御挨拶、一々被仰重候由、却而恐懼仕候儀ニ御座候。兼而申上候通、不時御寵臨被下候而ハ、不在之程無覺束と奉存候所、果して其ことく、重々恐悚仕候。何れ其内拝趨之上、御貴臨之日限可奉窺候。何茂昨日之御礼旁草勿如斯御座候。頓首

仲夏廿三

二陳、過日者樋口生来扣之処、不得拝眉、遺憾不少。〈小臣江縷々被申述候段被入御念候御事ニ存候。乍憚宜敷被仰流可被下候。先後ながら先君御遺業順々御写サセ被下、千万奉謝候。以上

（端裏切継力）メ／古心堂主人（左右） 陶白常拝

一二二 岸本立吉書簡（古賀侗庵宛、某年二月二五日付）

一六・〇×二七・八糶。岸本立吉については不明。

（端裏）小太郎様（内事） 岸本立吉

益御勇榮ニ被成御座奉恐悦候。然者、先達而御内々申上候米倉藤兵衛跡、去廿二日大坂御鉄炮奉行同御倉奉行兼帯朝倉次郎右衛門ニ被 仰付、残念奉存候。右跡大坂御鉄炮奉行ハ如何可有御座哉、御内々此段申上候。書余御目通り可申上候。以上

如月廿五日

一二三 広瀬蒙斎書簡（古賀侗庵宛、（文化一四年（一八一七）八月二三日付）

一六・〇×七一・五糶、三枚継。広瀬蒙斎（一七六八—一八

二九）は白河藩儒（のち桑名藩儒）、松平定信の腹心の一人。通称、臺八。「泣血録」は侗庵が文化一四年（一八一七）、父精里の病と死を日録で綴ったもの。慶應義塾図書館蔵自筆本『泣血録稿』（176/29/1）には冒頭に大字で「留為兒子訓／不許外人見」と記されている。

尊答拝見、審御起居仕候。倍御機嫌能被成御座、珍重奉存候。

泣血録之御文字、管見申上候処、御丁寧之御挨拶被仰下、痛入

奉存候。右者御一家之秘記ニ而、公世之思召ニ無之、依而一覽

仕候本返上敷又ハ秘蔵敷、両様之内ニ取計候様御垂示ニ付、持

歸之者其旨申聞候処、御返し可申上との事ニ付、今便呈上仕候。

尤同寮共、追々拝見仕候ものへ写取候ハ、焚毀致候様ニと堅

く申達致候間、当地へハ相残り不申候。左様思召可被下置候。

乍去古先生之御遺事故、至而おしく割愛返璧仕候処、御憐察可

被成下候。右尊答如此御座候。恐懼謹言

八月廿三日 広瀬臺八

古賀小太郎様侍史

追而追々弊藩諸生共、御学問所へ罷出、御苦勞被取扱、難有

仕合奉存候。何卒可然御提撕可被成下奉願候。以上

一二四 杉原心齋書簡（古賀侗庵宛、某年二月二十八日付）

封筒（開いた状態）一八・〇×九・六糎、本紙一七・七×六

六・二糎、二枚継。杉原心齋は一六・二五既出。ただし通称は

通常平助であり、平吉というのは見慣れない。封筒には萌黄・

朱二色刷蕨下絵あり。

（封筒ウハ書）古 小太郎様奉復 杉原平吉

（端裏カ）先生函丈 杉直反拝復

朶雲奉薫読候。如尊論好雨ニ而発生相催候処、絳幢益御福祥被

成御座、奉拝慶候。然者疇昔之経訓堂叢書中弍本、態々御返却

被成下、殊更不存奇味挺恚及恩賜之段、縷々御懇書被仰下、難

有奉感佩候。乍併甚奉恐入候次第奉存候。殊鋌者永く重宝仕候

事、山海奉謝候。書物二冊者落手仕候。いつれ拝趨万御礼可奉

申上候。右奉復迄草布御海涵奉希候。以上

二月廿八日

再啓御懇至御加筆被成下、甚御丁寧之御儀、汗顔仕候。此撮

扇七握、折節有合御移申上候。乍鹿薄奉入御覧候。以上

一二五 杉原心齋書簡（古賀侗庵宛、〔天保一四年（一八四三）正月九日付〕

一六・〇×九二・九糎、三枚継。学問吟味の出題等に関わる

内容。両者が学問所儒者でいた時期に行われたのは天保一四年

のみなので、そう推定した。

(端裏) 古賀小太郎様 杉原平助

当年者私義取込之義二付、參上延引候処、此御時節罷成、存外之義大御無沙汰申上、早春者御六ヶ敷義奉伺候処、委曲御垂教被成下、安心仕候。病人茂少し快方ニ御座候処、又々不出来ニて困り申候。右二付十一日者弥試題調有之候而も、出勤之程無心元奉存候。其節二相成不得已候ハ、別段御断もの差上可申候得共、先生御含置可被成下候。

一 試題調之節、書投之もの出席候様被仰達置候哉。何分宜奉希候。  
一 初場之日張出之書物之方一件者、先日祭酒江一覽二呈し、其通り可然様被御申越候間、右書面並張出之案共差上申、当日宜奉願候。

一 同断弁書文言華麗ニ認候流弊を矯候張出之方者、尊公様御取調御座候様奉存候得共、旧冬愚弟江起家被命候間、試ニ認候得共、甚不妥帖奉存候。則尙通差上申候。御斧正之上宜奉願候。  
一 甲府試卷御返却之節、妄評御一所ニ祭酒江差出被下候様奉願上候。則是又尙封差上申候。其外ニ同度義共御座候得共、認取兼、先務而已申上候。春寒御厭被成候様奉祈候。以上

正月九日

一二六 坂千松書簡(古賀洞庵宛、(天保四年(一八三三))二月一日付)

一五・二×一六三・三糶、五枚継。坂千松は、米沢藩儒坂積翠か。端裏別筆(謹堂か)「〇坂千松」とある。文中「片山紀兵衛」は米沢藩儒片山觀光の通称だが、時代が合わないもので、その子竹村か。米沢藩関係者については長尾直茂「山形県漢學者総覧稿」(「山形大学紀要(人文科学)」一五―四、二〇〇五・二)および米沢市医師会・米沢市上杉博物館編刊「米沢藩医堀内家文書」(二〇一五)を参照した。

一 翰呈上仕候。春寒難除候得共、益御機嫌能被遊御坐、恐悦奉存候。(小子) 幸無事相勤罷在候間、乍恐御安心被成下度奉存候。但し凶荒ニ付而ハ不安心之事共ニて、仲々詩文江心を専ニする事も不相成候処、追々手当茂罷出、一民茂餓死など、申事ハ無之仕合成事ニ御坐候。旧冬より、家中ニて先年より備置候麦相渡候処、家中ハ格別食物多罷成、心強罷成候。尤町家も夫々之出口有之、野人も同様旧年より、春來ハ闔境穩ニ罷成候。唯山間者食不足ニて困申候。雪消候て、かて出候得ハ、是又格別宜義と存罷在候。生來凶年ハ耳ニ斗承居候処、今親く違候て、能々

難者と覚候。再ハ逢はぬ様ニ仕度存候。若途有餓拳と申位に候ハ、何程苦キ者か難図候。上下共ニ式度かゆ一度かてと言振合ニ御坐候。然しかて不自由之者ハ、三度かゆ用候者も多御坐候。春耕之節ニ至候ヘハ、民間ニて者、粥を度々食候てハ、仲々

二月朔日 坂千松  
古賀小太郎様御左右

力田も不相成義、此節ハ食物余程入増筈と憂罷在候。然し無是非次第ニ御坐候。只々八九月比、穂おひた、敷出候ハ、何程喜敷者か、それ斗待居申候。片山紀兵衛始何れ茂勉強仕候哉、無心元罷在候。当月廿七日ハ諸生之試業ニ付、寡君被臨筈ニ候。是迄文道軍役之筋之事共ハ、例年之通ニ仕来候。只正月中鉄炮揃有之、四放ツ、打候処、寡君之被臨、一々日ニ放ツ、二相成候。奇なる例ニて、私共同列より詰人有之、已ニ両日相詰候。

二二七 中村嘉田書簡（古賀侗庵宛、〔文政一二年（一八二九）正月二〇日付〕  
一七・五×四七・八糶、正掣型押奉書。中村嘉田は一〇〇既出。端裏別筆（侗庵か）「〇中村咸」とある。文中「未曾有之大風」は文政一一年八月の台風、「長公」は長兄である穀堂か。

廿一日より廿六日迄ニ終候。毎朝明時過相始、大てい尽日か、り候。江戸表ハ春來穀の多寡者何ニ成者ニ候哉、弊邑ハ四斗五升俵七貫前後に御坐候。貧家ニてハ随分求候事苦惱ニ御坐候。殊ニ産物共不弁候故、金錢不足ニて困事ニ御坐候。春來先生御遠行ハ何ニ被遊候哉。段々好時節ニ罷成候。私も少々かて取ニも成共、可罷出と存罷在候。春色を採候とかて取とハ、誠ニ雲泥之違ニ候得共、所遇ニ依て之事、無意非次第ニ御坐候。先早々申上候。再拝頓首

別啓

藩客歳経未曾有之大風、艱難此時御座候。国学之儀等、此節長公迄弥縷申越候。御序之折御同人より尚又右御咄等可有御坐、維持之程御声援奉伏希候。是ハ風灾前より憂腹中罷在、其後尽瘁拮据權道候。文字之儀等ニ付、前辺略申上置候儀も有之候得共、未遑候。是等之儀、御序之御御一同宜被仰上被下度、致御頼候。以上

正月廿日 中村咸一  
侗菴先生侍史

一二八 小嶋優藏書簡（古賀侗庵宛、某年十一月五日付）

一六・二×六八・五糶、薄茶色料紙。小嶋優藏については不明。

（端裏） 侗菴先生 小嶋優藏再拜／乍憚御親拆奉希候。

乍憚以手紙申上候。向寒之節御座候処、御惣容様被為揃益御機嫌克被遊御坐、恐悅至極奉存候。毎度御吉凶之儀も承知仕居候得共、拝趨等も不任心底、失礼至極奉恐入候。然者、先達而松田多助より御歎申上候二付、段々御懇切之思召之上、不存寄格別之頂戴物仕、其上御写本等迄被仰付、万々難有仕合奉存候。

私儀当藩中江罷越候節も、亡兄其外共より、御塾二而之不都束、以藩汚瀆二も相成候儀、呉々嚴敷申聞、後悔仕候二付、当藩二而汚名も雪き申度心得二奉存候処、以御蔭聊説書も仕候故、幸二承進、早速儒官二申付候得共、養家甚小録、殊二借財等五十金余御座候二付、取統兼申候処、逐々打寄世話仕管候者共有之、殊二逐々加録等仕候而、借財等も過半減少仕候内、一昨年より之大変二而、家中一統も難渋、其上米価高直二罷成、是迄世話仕管候も自分々々難様二罷成候二付、金錢融通一切不仕候故、器物其外不残荒払候得共、当時減録二而、二人扶持二而六口を養育仕候。其上二も渡り物も近來ハ無之仕合二罷成、進退窮迫

仕候二付、無拋御歎申上候処、不存寄頂戴物被仰付、老人小方等薄物二て飢寒に泣居候処、一旦相陵、難尺筆紙難有仕合奉存候。私儀も自刃仕候も恥辱と奉存候間、此上命之統候丈ケハ飢

寒を相忍申候心得二罷在候。御写本等も今日持參仕度奉存候得共、衣服其外二差支、戸外仕兼、無拋乍失敬以使申上候。兎角久々俗耳仕、心神も不專一候故力、誤謬脱字等多く御座候而奉恐入候。是二ても御容恕被成下候得ハ、御憐察被成下、何卒何成共御写本等被仰付候様、偏奉希上候。右御願申上旁内実之儀も申上置候。乍憚奉呈愚札候。頓首再拜

十一月五日

一二九 上原尚賢書簡（古賀侗庵宛、某年正月三日付）

一七・八×三三・八糶。上原尚賢（？―？）は鹿兒島藩士、精里の門人で、島津久光の師として知られる。

履端之御慶不可有尺期御坐、目出度申取候。奉始函丈御闔門様被遊御揃益御安泰可被為成御超歳、恐悅御儀奉存候。年甫御賀詞申上度如此御座候。猶奉期永陽之時候。恐惶謹言

正月三日 上原善藏尚賢（花押）



古賀小太郎様御執事

一三〇 亀里豊園書簡(古賀侗庵宛、某年八月二十七日付)

一五・八×三〇・五種。亀里豊園(名は章、通称権左衛門)

は昌平坂学問所内の部局である地誌調所調方出役並。小嶋優藏書簡にもあるように、これも経済的に恵まれない弟子に筆耕を依頼することで援助していた例であろうか。「左氏探蹟」は侗庵の著作、全八巻。「輿地誌略」は文政九年成、青地林宗訳の西洋地誌で、明治になって刊行されたが、それまでは写本で流布した。書陵部古賀本にある七冊本(204/179)のうちの一冊がこれか。

(端裏) 古賀小太郎様 亀里権左衛門

益被為揃御壮健被成御坐、奉恭賀候。然者、兼而被仰付候写もの

左氏探蹟(三巻/原本新写とも)

輿地誌略(之内一本/原本新写とも)

右出来仕候二付、為持差上申候。御落手可被下候。頓首

八月廿七日

一三一 安藤秋里書簡(古賀侗庵宛、某年正月一日付)

一五・八×三二・六種。安藤秋里は大坂の書家、篠崎小竹の弟子。

新禧万福申取候。先生御全家益御機嫌克被為遊御超歳奉恭祝候。  
乍例吹田慈姑些少奉献上候。聊新正奉賀之証迄御坐候。御叱頓被遊被下候得者、難有奉存候。右年始御祝詞奉申上度、上蕪札候。恐惶謹言

正月十一日 安藤(兼)再拜

侗庵大先生函丈

再啓客冬希八郎書中先生御病氣以て漸進候由、乍恐奉痛心候。

為道御保重万々奉祈候。頓首

一三二 伊沢政義書簡(古賀侗庵宛、某年五月二日付)

一 本紙一五・五×五六・二種、二枚継、封筒(開いた状態)

一 八・三×九・二種。伊沢政義(?—一八六四)は幕臣、浦賀奉

行・長崎奉行・下田奉行等を歴任し、幕末対欧米外交で活躍した。

(端裏) 小太郎様 美作守

逐日輕暑相催候之処、益御清適被成御起居、奉賀祝候。陳者、過日松代別業ニ而拜面仕候節、相頼置候御揮毫之儀、何卒乍御面倒此籠絹江御序之節御一筆奉頼度候。尤何ニ而も宜御座候。

崔子玉坐右銘など如何と被存、右等位之字数之処相頼度、孰ニ茂思召次第奉頼候。余者拜顔万々可申上。草々頓首

五月二日

(封筒ウハ書) 古賀小太郎様案下 伊沢美作守

一三三 香坂衡山書簡(古賀侗庵宛、某年三月二十八日付)

一五・六×一二・三糰、三枚繼、薄紅料紙。香坂衡山(一七四九—一八三三)は米沢藩儒、精里の門人。端裏別筆(侗庵か)「○香坂登」とある。生年は高橋明彦「昌平饗の怪談仲間—古賀侗庵『今齊諧』の人々」(『江戸文学』一二、一九九四・七)による。文中「志賀孫太郎」も精里門の同藩士、宜親(二二・二三・二三参照)。「桜井恭藏」は旭峰か。「浅間」は侗庵門下、藩儒の浅間南溝。

一筆奉啓上候。時令不正春寒難去御座候処、(平也)函丈益御戲嚴ニ可被為在、恐喜之至ニ奉存上候。最次(鄙生)事旧時依然ニ相過

申候条、乍憚御降心可被成下奉存候。将亦此度桜井恭藏御門下江之勤学被申付、来月十日此表出発仕候。右ニ付而者万御薰陶被成而、其器を成シ候様奉願斗ニ御坐候。兎角御熟知被成下候通、僻地故業ヲ成シ候ものも無御坐、氣之毒至極仕候。何分好キニ御垂教奉仰候。浅間生永年帳下ニ親灸仕り、不遠拜辞可仕候。是迄ノ御愛顧真に不淺旨奉万謝候。此生直ニ此元学校江入寮為仕候而、又候明年末か明後年早春ニハ、再遊為仕度之存念に御坐候。何を申も兎角ニ人物に乏ク、学校勤之義も十分不仕、困惑仕候間、宜敷御教育可被成下候。

早春奉寄之詩致置候。好便故差上申候。鄙政被仰候。志賀孫太郎より之一首同様拜呈仕候。叱覽奉希候。扱々心外之御無音申上、失面目候義、御海涵可被成下候。多忙中草々申上候。万期後便候。恐惶頓首

三月廿八日 香坂登

古賀小太郎様侍史中

一三四 森田桂園書簡(古賀侗庵宛、(天保九年(一八三八)二月二〇日付)

一六・一×五六・一糰、海松・代赭色刷草虫下絵料紙。森田

桂園（一八一二—一六一）は田安徳川家家臣大城氏の出身で、幕臣森田家養子、天保九年の試業及第の後学問所教授方出役となる。文中「同役」とはそれを指すか。

朶雲拝読仕候。御清適被成御座、奉恐賀候。過日者復原高樓へ參上、寛晤殊種々御馳走奉鳴謝候。不覚酔飽、乍併長座奉恐入候。然者、來廿三日瀬名氏へ罷越候義、承諾仕候。折よく閑暇、必可罷越奉存候。段々御鄭重、却奉恐悚候。其以前鳥渡御面話との御事、奉諾候。尊亭へ可罷出哉之処、復原樓上之御出会ニ候へ者、大ニ難有奉存候。廿二日午後退直より可罷出候。乍去必御茶斗ニて事足申候。別之御経営ハ御免可被下候。御相談快拝見仕候。至極精選と奉存候。尚廿二可申上候。小生義も明日同役被 仰付候様子、俗事色々蝟集、早々乱揮、御覽分可被下候。頓首

二月廿日

尚々衣服之義も難有奉存候。平服とハ奉存候へ共、尚羽織下奉願候。以上

洞菴先生左右執事奉復 桂園懺拜

一三五 杉原心齋書簡（古賀侗庵宛、（弘化二年（一八四五）四月三〇日付）

一五・九×七一・一糶、二枚継。杉原心齋は一六・二五・一二四・一二五既出。文中「紀功新書」は弘化二年秋に大村藩校五教館蔵版で刊行された『刪定紀効新書』（外題による）で、同年八月付朝川善庵の序文がある。「御場所納」とは、昌平覺の寮備付の書物として献納された、の意。非朱子学の善庵なので、一応検閲したということか。

（端裏）侗庵先奉酬侍史 直養

此間者尊翰被成下候処、不得即答不恭之義奉恐悚候。自後不同之時氣ニ御座候得共、被為摘益御清暢被成御座、奉賀候。御客体茂可相伺之処、彼是取紛御無音申上候段、御寛暇奉希候。然者、大村侯蔵板之紀功新書老部御場所納として差出候由、為御持被遺落手仕候。其趣取扱可申候。序文之義子細有御坐間敷奉存候。惣教以下万一異見も御座候ハ、可申上候得共、左様無之候ハ、別段御左右申上間敷候。御状箱返上仕度、御請如斯此御坐候。勿々

四月尽

御借米手形、当夏者友野氏直り二候間、同所江被遣候分二通  
共相渡置申候。来月早々相濟次第、例之通御札さし迄相渡可  
被申事二候。以上

一三六 津田賁書簡(古賀侗庵宛、某年正月晦日付)

一五・〇×一一・八糎、四枚継。津田賁は侗庵門人、姫路藩儒。端裏別筆(侗庵か)「○津田元二郎」とある。文中「徳次郎」は侗庵二男、「寸翁」は天保一二年(一八四一)に没した姫路藩家老河合寸翁。「大府御新政」が天保一四年の水野忠邦失脚を指すとすれば、翌一五年のものか。

乍恐以手紙奉申上候。春暖之候被遊御揃、愈御機嫌能被遊御坐、恐悅之至奉存候。徳次郎様御病氣、時々刻々御案思申上而已二て打過申候。此節ハ最早御全快可被遊と奉遠察候。大府御新政、四海拭目万邦帰心、去年以来伝聞事々不堪愉快、殊包荒之風相止候ハ、陪台迄被<sup>(平出)</sup>大徳難有義二御坐候。就てハ、学問も追々流行、諸生寮青衿雲集、御誨誘御繁多二可被遊御坐奉拝察候。国元も寸翁死後、学問ハ黑白不弁之者而已、固陋之村夫子登用、

諸老儒議諂成風、貪浬不厭、金穴之口入等二取掛、五経掃地事耳に御座候。(小子)空心独居、離索既久、素未熟之学問、随年就荒、日夜東望歎息仕候。何れ当四五月中にハ出府、今一度御教諭相受候積り二致置可被下候。此度主人下令、求立言候。実情か虚名かハ相分不申候へとも、平生之狂態一日も沈黙難仕、政事之宿蠹、執政之私曲、諸吏之旧蔽、上自主人之行状、下至庶民之情実、年来之愚慮不残吐出、先達て上書仕候。今日か明日かニハ披見可致と申事二御坐候。右書中所論致ハ、大抵寸翁致置候事故、負知己之恩不本意之至二御坐候。一日も国事此候にてハ、不十年士庶困窮、如何成行可申と思慮仕候事二御坐候へハ、国ノ大事ニハ私恩二負とも可宜と決断仕候。最一言たりとも無実之妄言に相極候ハ、如何様被申付候とも、固所甘心と認置候へハ、何れ扶持之食あけと覚悟仕候。惟老親之情を思遣候へハ、流涕二不堪義に御坐候へとも、是以私事と可申、何分退身仕候ハ、早速東帰拜謁、以御余光仮生於草莽、老父にも安堵為致可申と末路相定申候事二御坐候。十余年来御厚恩相<sup>(平出)</sup>受、且其初一言之御推挙をも辱致候事、師恩之广大、生々銘肝難忘義故、外江難漏義候へとも、不顧卒然之晒、直書にて奉申上候。猶乍恐祭酒様へ御会晤被遊候節、時候御機嫌伺宜布被仰<sup>(平出)</sup>

被下置候様、俯奉願上候。拝言

正月晦日 賁再拜

侗庵先生函丈

一三七 尾藤水竹書簡（古賀侗庵宛、某年二月一日付）

一五・二×一〇五・三糶、四枚継。尾藤水竹（一七九五—一八五四）は尾藤三洲の子、ほとんどを幕府には仕えず在野の文人として過ごした。文中「尾池晚齋」は『升堂記』に寛政七年（一七九五）二月一日、広瀬台八の紹介で、丸亀浪人として林家に入門した記録がある。「日本史」は水戸藩編纂の『大日本史』か。

（端裏）侗庵老先生函丈 積高百拝／謹封

謹啓仕候。向寒之節御坐候得共、函丈益御清泰被成御座、恭喜之至奉存候。爾来者心外御無沙汰申上奉恐入候。抱地一件相濟候後も、一寸御礼参上可仕筈之処、彼是俗事取紛及延引、失敬之段奉恐入候。扱此度尾池晚齋と申者、出府仕候処、貧生二付筆耕杯之儀仕度、日本史拝借之儀奉願呉候様、相頼申候。此者儀者、以前之名ハ栄次郎と申林門之者ニ而、聖堂御改政前入塾

仕候者御坐候。其以前御家へも罷出、先生（平也）へも拝謁仕候儀致し

御座候由、久敷儀御忘御座候儀と申居候。其中拝趨拝謁も奉願度心得御坐候。何分貧生且家内多之者ニ候間、半ハ筆耕を業ニ仕候儀御坐候。右日本史之儀、何分ニも奉願度奉存候。少々、二而宜、度々ニ引替相願、参上可仕候。是等之儀、（小生）拝趨奉願上筈之処、此節普請等取掛、甚取込罷在候間、奉恐入候得共、書中此段奉願上候。若御書物等被仰付候儀も御坐候ハ、何卒此者へ被仰付被下候様奉願候。至極之好人物御坐候。見事成儀者出来不申候得共、誤写等ハ仕間敷候。何も以参上万々可奉申上候。時下万々御厭可被遊候。恐惧百拝

十一月十日

日本史列傳ヨリ奉願候。

一三八 鈴木桃野書簡（古賀侗庵宛、某年二月一三日付）

一四・八×四四・〇糶、二枚継。鈴木桃野（一八〇〇—一五二）は幕臣、白藤の子。天保一〇年（一八三九）学問所教授方出役。文中「田中雅楽郎」は楽山と号する医師。

（端裏）古賀小太郎様足下 鈴木孫兵衛／

春寒峭料御清邁奉恐賀候。然者、尾州御番医師田中雅樂郎次男十三才ニ被成候由、熟生ニ被致度被申談候。寮明キ有之候ハ、早速願度由ニ候。奉窺候。且左様候得者、諸人等迄之処并当日御弟子入振合、承り呉候様申越候。御返事先方江見せ申度候間、御家来より之御返事ニ被成不殘相分り候様被仰越可被下候様奉願候。急キ之由ニ候間、御即答奉願候。余期拝眉、早々頓首。

二月十三日

\*第二冊

洪晋城書簡を集めたもの。

一三九 洪晋城書簡（古賀侗庵宛、某年五月六日付）

一六・一×六七・〇糶、二枚継。洪晋城（一七八一—一八三八）は佐賀藩儒、侗庵の次兄で、洪家の養子となった。先の岡本花亭書簡に述べられた江戸滞在中のものか。この日は二人の父精里の祥月命日。

（端裏）古賀小太郎様急要用 洪助右衛門

向暑之節愈御壯健被成御勤、奉恭賀候。然者今日者、顕考様御

正当ニ付、参上之含御坐候処、色々殿様不克御儀、御無礼申上候。随而乍是式龜茶ニ袋進上之仕候。御叱留可被下候。頓首

五月六日

追而僕最前略御沙汰仕候。末来<sup>②</sup>ル十日前より帰郷仕筈ニ御坐候。然者帰装少々不足、立時旁々■金廿円御暫借仕度奉願候。帰郷之上直様無間違返上可仕候。尤慥成便を相待候而、帰後卅日四十日程者、延引仕候哉者難計、然常体之飛脚ニ候ハ、全分一同之返上者相案し候故、是節ハ五両斗宛数度ニ返上可仕候間、其思召可被下候。右金何卒出立兩三日前ニ手ニ入候様御心配奉希候。以上

一四〇 洪晋城書簡（古賀侗庵宛、某年一〇月一六日付）

一七・二×八九・六糶、三枚継、縹・海松・朱色刷流水に紅葉下絵料紙。「大一郎」は穀堂の子素堂。

一筆奉啓上候。寒冷之節募候処、益御惣容様御壯健被成御座、奉恭賀候。於爰元相替候少も無御座、御放念可被下候。穀堂兄先月中六日より出立、付而者追々御面会、久振皆様御集會御歡娛可被成奉存候。爰元之様子者、御同人より委細御承知可被成

二付、不克細筆候。

一 大一郎出府之儀二付、色々最前差付ケ間敷候へ共、御懸合奉恐入候得共、右も極々不得止事処より申上たる儀二御坐候。

右之末、爰元学館より申立之末、是迄教諭役相勤罷在候小柳安兵衛と申者、大一郎一同游学ニ■筈ニ御坐候。是者年齢も四十前後、篤実之人、少々者才氣も有之、此人同処へ罷在候得者、游蕩之氣遣無之、小子も大二致安心候。尤爰元出立者多分十二月初比より二而、正月着府、同月二到聖堂へ寄宿之御願可致相考候。委細者穀堂兄より御承知可被成候二付、不克細筆候。先以時候御尋旁為可得御意如斯御坐候。尚期後鴻候。恐惶頓首

十月十六日 洪助右衛門

古小太郎様

一四一 洪晋城書簡(代筆、古賀穀堂・侗庵宛、某年一月二一日付)

一五・九×一六二・三糰、香・紅色替料紙。修理は穀堂の通称、このとき江戸にいたのであろう。

一筆奉啓上候。寒冷之節募候処、各様益御壯健可被遊御勤、大

慶至極奉存候。然者、先便申上候通、私儀九月中旬比陰囊之水を取候処、不計拘攀仕、元より者大二相成、一向安坐歩行も不相叶、平臥罷在候二付、様々葉養仕候得共、更ニ其驗無御坐、一生起立も付相叶事ニ可相成哉、甚屈託仕候位二付、江戸勤之儀御断申上候。然所当所井上友庵と申外科、先年紀州瑞軒と歟申名医多年游学、伝授有之候由ニ而、陰囊重墜相成候を、一生病根を断候療治致馴被罷在(是ハ蘭法ニ者無之、瑞軒始而工夫出被申療治之由)候二付、本道杯吟味之上、療治相頼候処、陰囊江ノミ打、中之汁を半分計出、其穴より腐ラカシヲ入置、数日いたし引抜候得者、中膿汁ニ相成、段々出申候。日々其穴より吸出、膏葉を指入候得者、陰囊中皆以膿ニ相成、漸々出申候。最初五六日者熱惡寒杯出、甚惱、其後者次第第二気分も宜、膿汁も日夜出申候。私右之療治、十月廿七日ニ致、今廿一日迄日夜膿汁少々宛出申候得共、最早最前より者、十二七八者陰囊相細、今暫仕候得者、大体元ニ復、重而重墜仕儀者無之由、勿論斯迄大ク可ナル候末ニ而、快方仕候而も全平人之様ニ迄者不相成、少シ者人并より者大ク可有之由、然シ日々快方ニ趣、追々出勤等も出来可申候。惣而此節之儀、右之療治仕候故、年来之難病追々清快可と甚仕合之儀御坐候。尤右療治余程体ニも中り

候様子二而、甚疲瘦候得共、折角補薬等相用候二付而者、月日相立候二随、漸々二者本復可仕と相見候。誠ニ此節之一通、先塞翁之馬と一笑仕候。御放念可被下候。扱又前段出府御断、再往申上候処、得と養生仕、全快之上出府仕候様被仰付候二付而者、メク者罷登候事と相見候。尤前段之通甚疲仕、年始共より御城まで罷出候通可相成哉、一体之処得と保養仕候者而、中々不遠内共旅行仕候通無之、何れ来年之振合次第と奉存候。先以各之為御知時候御見舞旁為可申上如是御坐候。猶期後便之時候。恐惶謹言

十一月廿一日 助右衛門

修理様

小太郎様

一四二〔洪晋城〕書簡〔古賀侗庵〕宛、某年六月二〇日付）  
一七・二×五四・五種、萌黄・海松・代赭・朱色刷秋草下絵料紙。前欠（初行右半切断、その前に端裏書などあったか）、差出人・宛名ともないが、筆跡・内容より判断した。

暑氣御坐候処、御惣容様愈御安泰被成御栄、奉恭賀候。然者、

私儀用向有之、去十六日御当地參着仕候。右二付而者、早速御点合旁參上仕筈之処、着懸別而取紛未能其儀、失礼罷過候処、一昨日者御使者を以預御懇示、忝奉存候。且又明廿一日御来訪可被下由被仰下、彼是本懐至極奉存候。久振拜顔、海山御咄拜聽仕度御坐候条、明昼比御枉顧可被下候。此段御点合旁為可得御意如斯御坐候。以上

季夏廿日

追而、近来乍輕微持得候二付、煙草唐团扇茶たる其外致進覽之候。聊土宜之印迄御察留可被下候。以上

\*第三冊

依田匠里書簡を集めたもの。

一四三 依田匠里書簡〔古賀侗庵宛、某年二月五日付〕  
一六・五×二八・七種。依田匠里は名を利用といい、侗庵に先んじて学問所儒者となった人物。

（端裏）小太郎様 源太左衛門

御勝常奉賀候。然者、〈小子〉儀此節家内之儀二付紛冗罷在候間、



今日も罷出不申、御苦勞相掛奉恐入候。右之仕合ニ付、明日習

礼も難相出奉存候。尤御当日ハ差支之儀も無之候間、出勤可仕

奉存候。何分様御取計奉頼候。右之次第ニ付、諸執役中又々断

之者も可有之哉奉存候間、寄宿ニ階稽古人姓名書ニ通差上候間、

是又宜様奉頼候。以上

二月五日

一四四 依田匠里・古賀侗庵願書案（御疊奉行宛、某年一〇月付）

一六・八×三〇・三種。筆跡は依田匠里のもの。

（端裏）御疊奉行衆 〈依田源太左衛門／古賀小太郎〉

此度字問所向惣体御修復ニ付、拙者共御役宅御手入ニ成候場所

畳替有之取合七ヶ所ハ、畳揚候分斗替候儀ニ有之候。然所已前

御修復以來、年久敷相成候間、御役宅畳惣体及大破居、重而之

御修復迄ハ又々年数も可有之、旁以可相成ハ、御見分被下、惣

体拔替ニ成共相成候様致度存候。此段及御掛合候。已上

〈午〉十月 依田源太左衛門／古賀小太郎

一四五 依田匠里書簡（古賀侗庵宛、某年四月一二日付）

一五・三×三三・四種。

（端裏）侗庵老台絳帳下 依田利用拜

不同之季候御座候得共、益御清勝被成御興居、奉恭賀候。然者、

先達而ハ賤恙御尋被下、殊ニ見事成御重の内御患脱被成下、感

荷無量奉存候。此節先大方痊愈仕候。随而御看恙篋之内〈三〉

余り輕些之至御座候得共、右御厚貺之御答礼迄献呈仕候。御笑

納被成下候ハ、喜幸奉存候。右申上度草々頓首。

孟夏十二日

一四六 依田匠里書簡（古賀侗庵宛、某年一二月九日付）

一五・五×二〇・九種。何らかの試験の答案に関する相談で

あろうか。侗庵には事前に下書きを送っていたことがわかる。

（端裏）小太郎様内当用 源太左衛門

別紙之通唯今申来候間、手扣帳面見調候所、自評ニハ合格くら

みのつもりニ相成居候。総評ニ而をち相成候ハ如何ニ御さ候や。

下書御手許ニ有之候ハ、一寸御見調可被下候。早々以上

十二月九日

一四七 依田匠里書簡（古賀侗庵宛、某年二月二四日付）

一五・七×二四・六糶。文中「令郎」は茶溪のこと。

（端裏）古賀小太郎様 依田源太左衛門

雪故別而寒威料隋御座候得共、益御清勝奉恭賀候。然者、今般者御願之通令郎 御目見被為濟、重疊目出度奉存候。随而御肴（代金百疋）菲薄之至御座候得共、右御祝詞申上候寸悩まで献呈仕候。御叱留被成下候ハ、本懐之至奉存候。右御歎迄如斯御座候。已上

臘月廿四日

一四八 依田匠里書簡（古賀侗庵宛、某年九月一七日付）

一六・二×三五・七糶、二枚繼。追伸部分の「世話心得」は学問所で学ぶ学生の世話をする係のこと。「寄合」は高禄無役の旗本のこと。本文部分は何か別の人事であろう。「君玉」は野村篁園、「楊子」は林裡宇か。

（端裏）小太郎様 源太左衛門

御勝常奉恭喜候。然者、別紙之通申来候間、思召次第之儀とハ御座候得共、猶又申談否御答可申と申遣置候。御存念之儀（この間、被仰下度御座候ミセケチ）明朝試業、君玉御出会之儀と御座候間、御打合被成御異儀も無之候ハ、乍御面倒楊子江御答被成下度奉存候。已上

九月十七日

二白 外寄合世話心得明跡へ松平健吉・松平内記兩人申談有之候様致度旨、肝煎より申候由、御一同存念之所、問合参候間、右ハ何れも異儀無之旨直ニ相答申候。左様思召可被下候。以上

一四九 依田匠里書簡（学問所同僚宛、某年二月九日付）

一五・八×四三・五糶。教官に回覧され、侗庵の手許に伝わったものか。

（端裏）御同寮中様 依田源太左衛門

益御勝常奉恭賀候。然者、今日演儀可罷出所、例之面痛朔日頃より別而強相成、飲食言語等殊外差支、難儀仕候。三日二ハ試卷調推而罷出、退衛之節私宅迄漸々歩行仕候仕合御座候。日々

浴湯而已仕、浴後少々飲食仕、凌キ居候。四五日ハ夜も一向臥兼申候。一昨夕より少々痛間遠相成、昨日ハ試ニ二類共(?)迄相越申候所、存外歩行も出来申候得共、中々平常之通りニハ無御座、今朝ハ又々昨日よりハ不出来之方御座候間、無扨御断申候。可然様御取計可被下候。尤痛所之儀故、少々も和らき候へハ御當日ハ推而も出勤仕候心得ニ御座候。

一 試卷引戻し再評之儀、禮宇江御問合、日限御取極可被成候。  
一 岩松大久保へ申達候儀、昨日別紙之通申来候。尤早川庄左衛門へ案内申遣、右兩人江心得させ置申候。右御舍御取計可被下候。痛所難儀仕候間、要用斗早々以上。

二月九日

\*第四冊

侗庵宛または謹堂宛書簡等を集めたもの。

一五〇 津金新十郎書簡(古賀侗庵宛、某年五月二二日付)

一七・八×四五・九糎、奉書か。津金新十郎は不明。文中「伊藤督太郎」は「升堂記」によると文政四年一月に林家に入門したことが知られる。

(端裏) 古賀小太郎様 津金新十郎

以手紙啓上仕候。追日向暑罷成候得共、弥御壮健被成御座、珍重御儀奉存候。然者、先達而伊藤督太郎キ以悴去実名儀相願候処、早速御聞濟被下、千万忝仕合奉存候。殊ニ御繁用之中別而奉恐入候。且又此一籠之内庵末ニ候仕合御座候得共、御礼申上候験迄、入貴覽申候。幾久敷御祝納被成下候ハ、忝奉存候。右申上度如此御座候。以上

五月十二日

猶以呉々も乍延引右御厚礼申上候。以上

一五一 古賀徳次郎書簡(古賀侗庵宛、某年一〇月四日付)

一六・〇×五〇・八糎、奉書か。徳次郎は侗庵次男。文中「浩浩然」は侗庵の次兄晋城が養子となった洪家の家祖で、朝鮮の儒学者。「素公」は侗庵の長兄毅堂の子素堂か。

(端裏) 古処堂先生左右 徳拝

短札拝啓仕候。先以冷候相成候処、其後も御動止愈御康裕可被成御出、不勝至慰候。然者、過日攀祇之節、御話及御坐候浩浩



謹奉申上候。寒冷之節御坐候処、御動靜益御万福被遊御坐奉恭賀候。兎角繁務取紛御疎遠奉申上候。真平御海涵可被成下候。

陳者、拙文兩篇草稿、乍恐奉乞正候。近頃弊藩（この二字補入）文学之者共頻々物故或者病魔等二而、（小子）輩不朽之業可顧儀無御坐候得共、無鳥里之蝙蝠、無拋懇請二辺り、結構仕候得共、甚不安心奉存候。何分茂御垂教被成下候様、乍恐奉冀上候。尤迎茂用立不申候者、其段御教示奉願上候。

一 同藩真田図書と申者、日頃慶元以来之儀講究仕、名君賢相之事跡ヲ悉考索仕候儀を好、就中備前芳烈候ヲ奉慕罷在候処、文会雜記中ニ御坐候備藩湯淺家ニ持伝候芳烈候筆跡、愷悌君子民之父母之八字、何卒双鉤ニ写し得貫度旨、年来志願罷在候処、媒酌可相頼手寄無御坐、空敷打過候処、近來私儀御門下入仕、蒙御懇命候儀承伝、私江申聞候二者、聖堂并御家塾二者、定而備藩之学生可有御坐奉存候。何卒 大先生執事之御方便を以入手仕候儀可罷成哉、以序奉伺呉様類ニ相頼候。乍恐御様子奉候。雜記抄出別紙、従同人差遣候其儘奉呈左右候。御覽可被成下候。尤右八字二限り候儀二者無御坐、何成共墨本等二相成候品ニ而茂御坐候得者、幸之儀何卒申受度志願之旨懇請仕罷在候。甚奉恐入候得共、御様子奉窺候。

一 同藩鎌原司馬と申者、篤学之者二而日比臭味相同仕候処、教化之儀厚心掛、既ニ六論衍義翻訳仕候。此間作文二篇私へ見

七申候。奉汚高閱候。御郢正被成下候得ハ、難有可奉存候。何分高評奉冀上候。右衍義時有テ施刻仕候儀茂御坐候ハ、必大先生之御序文奉願、光輝ヲ添申度志願罷在候。御内慮謹奉窺候。

一 私從兄久保喜伝二と申者、慷慨有志之者ニ御坐候。其内出都仕度相含罷在候。其節ハ何卒御門下入仕度志願罷在候。何卒賤名ヲ申上置呉候様申聞候。此墨梅二葉者、同人緒余之遊戯御坐候。文詩者不得手ニ付、此画ヲ奉呈上度志願二候而、私迄相送候。御叱留被成下候得者難有可奉存候。此者儀者、松代ヨリ西五里余山中二而、水内橋近所新町村と申二地著仕、民情ニ甚熟達仕、有用之器ニ而甚頼母敷存罷在候。其内出都仕候ハ、何分爲奉得拜謁度奉冀上候。

一 墨梅毫幅、乍恐御一覽奉願度指上候。外白紙四葉、何卒御近製御揮毫被成下候様奉希上候。御出来被成候ハ、竹内八十五郎迄也共御下可被成下候。此段奉願上候。尚時下寒冷千万被遊御（平出）自愛候様奉祈候。頓首百拜

九月廿九日 山寺源大夫

一五四 山寺常山書簡（古賀謹堂宛、慶応元年（一八六五）七月一日付）

一五・五×五八・四種、三枚綴。端裏別筆（謹堂か）「〇乙丑八月初九収手／山寺源太夫尺牘」とある。次の六月一三日付書簡への返事に対する返事。謹堂は元治元年（一八六四）九月に、前月拜命した大坂町奉行を辞退、慶応二年（一八六六）二月の横須賀製鉄所奉行並に就任するまで無役の寄合だった。

文中「神蔵」は神戸神蔵。次の書簡の端裏別筆に門人として見える。「竹村半蔵」も松代藩士か。「中村学士」は中村敬宇、「大駕」は將軍家茂、「白川執政」は老中阿部正外。追伸部分「二統」の統字欠筆。

前月念五日之尊復教、七夕ニ相逢奉敬誦候。如高教殘炎酷烈之処、益御万祥被成御興居候状、不勝恭祝之至奉存候。〈神蔵〉義も早速拜謁被仰付難有御事、於〈同人〉茂右御請奉申上度申聞候。扱又、御告退後之高調多々蒙御投示、千万難有不取敢拜吟、誠ニ何より之薬石と不能釈手候。乍失敬書後一篇拙稿仕候。不成文候所ハ何分も被成下御刪正候様、奉願上候。固ニ〈小生〉輩非可企及候へ共、何分恬退之機会を失、此羞辱を取候段、千

悔難及、併此上修養時至り候ハ、洗雪之期も可有之と、苦熱中も専勤学仕候得共、晩学夜行之如くニ而、埒明かね候。神蔵へ四書訓蒙輯疏之義も御教誨被成下難有、其外奉願上候件々々々蒙御復教、竹村半蔵〈杏村義〉拜謁之義も御聞濟被成下難有、中村学士も上海行之命を被奉候よし、初而承知仕、右二付御託し被遣候様願之、紙末ニ奉申上候旁、〈半蔵〉拜謁を催し、此奉復之一書を相託し候。

一 大駕も弥前月廿日ニ姫路まで被為進候由、右二付白川執政發憤激論云々、詳説ハ不被為得候へ共、何分勇々敷拳動恐悦之至り、此上之事務局如何相成候哉、薄海生靈之為メ云々被為思候段、於〈小生〉輩も只管企望、疾々御捷報を承知仕度奉存候。外無他腸罷在候。近來者何か怪敷、勅書杯申もの流布、又者長州へも勅使を被發候杯と、紛々之雜説而已ニ付不堪鬱悶、杞憂可在候所、右之御新聞被仰下候ニ而、初而快然之心地仕候。尚此上之処、御神速ニ御指揮有之、御先鋒諸家粉骨碎身、不日ニ鏖戦奏功御坐候様、默禱仕候。

一 高調者中々一時ニ了解仕かね候処も御坐候得共、先ニ御大意之処、実ニ難有思召と奉敬報候心を、乍不都束紳稿仕、別紙ニ相認め差上候。何卒御刪正之程奉願上候。過日之拙作も、

何分乍拙陋御刪正之程奉企望候。色々奉申上度候得共明便申承り、先勿々奉敬復候。時下千万被遊御愛重候様奉願上候。先頃者霖雨洪水等二而、作も氣遣候処、残日者強二而、諸作勢引直シ、唯今之様二候へ者、信中者大凡秋豊二可有之と、上下相悦罷在候義御坐候。恐惶敬白

七月十一日 無名頓首拜復

謹堂先生帳下

二啓 宇和島桑名藩人之義も難有好人、若達尊聽候ハ、奉願上候。諸藩者人物無之様子、天下一統之季運と奉存候。

一五五 山寺常山書簡(古賀謹堂宛、慶応元年(一八六五)六月一三日付)

一九・一×一・一三・六種、三枚継。端裏別筆(謹堂か)「○乙丑六月念四取手松代山寺源太夫尺一〇其同郷門人神戸神藏手通」とある。受け取った翌日返信したことが七月一日付書簡冒頭からわかる。文中「安部井氏之輯疏」は精里門人、会津藩儒の安部井帽山『四書訓蒙輯疏』(嘉永元年刊)で、侗庵が序を寄せている。

一筆奉謹啓候。酷暑之節御座候処、先以絳帳(平出)益御清穆可被為成御興居、奉恭祝候。三月廿二日之尊復教、四月十七日相達奉敬誦、縷々蒙御教誨、去就自由二不致候方可然旨、不勝服膺銘肝仕候。元來出外展力之儀、一時救急之窮策二御座候処、爾來駸々滿朝悉皆奸党二相成り、右之者共当路中者、(私)身分屏居無際限様子二御座候得共、是以永統之勢二も不相見、只々其内二国祿ヲ縮、奈何共不可為もの二仕候段、苦々敷不堪見聞次第、切齒罷在候処、於大朝(平出)も今日之御形勢何共当惑之外無御座、何と歎御挽回之時至り不申候而ハ、何分致申方無之と覚悟罷在候。何卒其内二絳帳(平出)前御驥足を被為伸候時二も相成候ハ、又何と歎附尾之策も可有之哉、先夫迄者堅臥不起と申覚悟二罷在候。(私)式之儀、元々蒼海之一粟、絳帳(平出)前今日之御不遇不及是非候。塵世之事は大抵御絶念被遊、御家居之節御読書、天晴候へ者御出遊、正月中浣より三月中浣迄二十余度之御出遊、高調六十首二近く被遊、花月外之事ハ都而御紺黙之思召、何共苦々敷奉存候。只々御無病ヲ以一日ヲ被為度候ヲ御幸福と被遊候旨、吉人天佑は必ず御康健二而、是非々々其内天人勝之時至り可申と希望罷在候。扱御投示を蒙り候御高調、拝吟数四不能釈手、乍不都束勉強攀躋高礎仕而別紙二写し、先 御刪定を奉願

上候。拙劣は固無論、只々日頃蠅蠅之鳴ヲ自ら棄候而已ニ御座候処、右も屏居以來心底不平ニ御座候故、一切廢絶罷在候処、

御高調之多ク御出来と申二驚入、不覺奉和之志を言出し候而已。御一笑之後、何卒痛く御駁正ヲ奉希上候。其砌より好儀次第奉復申上度心得之処、(米弥も)上京之由、彼是不都合之処、今般未熟之門人(神戸神威と)申者、立歸出府ニ付、相託し(片山生)迄差出候。(同生)若退塾も仕候ハ、御取次衆へ手寄可奉願、可相成は御落手之趣者、一寸御日通候而被仰付可被成下候。此(神戸生)学問者未熟ニ御坐候処、生得孝心貞実之ものニ而、(私)冤罪ヲも殊之外憂念罷在候ものニ御座候。学問をも是より研究仕度と申志ニ而、於(私)も甚愛申罷在候者ニ御座候。四書を安部井氏之輯疏ニ而為説申度哉ニ奉存候。如何可有御座哉。弥拝謁も相叶候ハ、何卒御一言之御垂教を為蒙度、伏而奉希上候。且又今度供辻ニ而出府仕、御馬奉行相勤候竹村半蔵、名悌、号杏村、好詩候もの、(私)友生ニ御座候処、詩酒之交遊は互ニ無覆蔵御坐候処、此ものハ從來隠操之ものニ而、国事抔は頼と度外ニ置キ候流義ニ候。詩は中々出来仕候。窃ニ(私)呈書を託し持參仕候節者、何卒拝謁を奉願度と申間候。御含可被成下候。(私)屏居罷在候儀も氣之毒ニ

者相心得候得共、方今当路之奸党をも深く可怨共不心得候程之好人ニ御座候。御一見被成下候へハ、申上候迄も無御座判然と相分り可申、先隱逸伝之人物ニ御座候。但(私)身分ニ付而之儀は、此生岡生神生等と者差別御座候迄ニ御座候。為念奉申上候。万々一尊教被下置候節は、此半蔵義上屋敷ニ詰合、来六月中まで在府仕候儀ニ御座候。(この間削除か)之儀者(片山生へ)充可承合之処、(同生)此節在否之程も難計、不顧失敬奉申上候。(北沢生)儀も留守居役被申付、定府に可相成、秋中者出府ニ可相成趣ニ御座候。此ものは乍虚弱学問も心懸候ものニ御坐候処、存外之役義被申付、空敷廢学可仕と嘆息仕候儀ニ御座候。一 予州宇和島藩之大夫ニ桑折雅楽と申人御座候而、先年(平出)伺養夫子之御席上ニ而一見話し合候儀御座候処、其後絶而噂も不承候。年齢今程者古稀ニも可及哉とも奉存候。定而世ニ在候而も致仕も可有之歟。其外ニ御門人ニ而方今当路之人物御座候ハ、姓名人品之大略を奉窺度候。(私)之含者、当路ニ而学問有之有志之人物を承り度儀ニ御座候。且其人御座候而も、此節は多分在国ニも可有之哉、迎も御門人之内ニ無之候而は御熟知も被成下間敷、又勢州桑名藩ハ如何ニ候哉、是亦奉願上候。(神生)出立急ニ相成り、勿々走筆甚以失敬之認方ニ御座候。



御仁宥被成下候。尚時下千万被遊御愛重(平出)候様奉禱候。恐惶謹言

六月十三日 山寺源大夫信龍(花押)

一五六 中山次左衛門書簡(古賀謹堂)宛、某年三月二二日付  
一六・一×六七・九種、二枚継、奉書か。中山次左衛門について不明。御家流筆跡。

(端裏)〈古賀様〉御近習申様 中山次左衛門/×  
一筆致啓上候。謹平出一郎様愈御安全被成御座、珍重御儀奉存候。  
一昨日者参上緩々奉特拝顔、殊御丁寧之御取扱、忝次第奉存、其御沙汰承知仕候通、明廿三日参上之事井上江申聞候処、別而難有奉承知候へ共、無拗難被出用向にて、後日ニ延引仕度、宜申上置呉候様承候。然共私ニ者いつれ明日参拝之賦罷在候。此段勿々各様迄得御意候間、宜御取成奉願候。敬白

三月廿二日

一五七 日治大次郎書簡(古賀侗庵)宛、某年二月七日付  
一五・九×一一〇・三種、四枚継、浅葱色料紙。日治大次郎については不明。文中「世子」は所属する藩の嗣子の意か。一

九八の作者日治天球と同一人物だとすると小田原藩士である。

(端裏) 古先生尊下 日治大次郎拝答

尊書被成下難有奉拝誦候。如 尊命薄寒之節御坐候処、益御機嫌能被為成御坐、奉恐悦奉存候。扱亦(この間、之ミセケチ)此間者世子参上之節者、段々難有仕合奉存候。爾後(私儀も)御礼参上可仕候処、公私取紛段々延引恐入奉存候。何分御海容被成下候様奉願上候。然者、今日無御拗御方より之儀ニ而、古一左衛門と御面話被成度旨、尊書之趣同人懸合候処、別紙之通申越候ニ付、昼後世子住居迄、例之通ニ而御光来被成候上ニ而、取次之者より古一左衛門江御通被成度旨被仰聞候ハ、罷出可奉得尊願候。尤も世子此間中より未廻勤仕舞兼居候内、此節流行之風邪ニ而打臥罷在候。右故昨日も御逢人差上申上候。今日者私儀も間閑ニ而罷在候間、右世子住居江御入之上、私御呼出被遊候而も、早速ニ罷出可申上候。右者尊酬御請申上度如是ニ御坐候。謹答

十一月七日

唯今教授中甚取込乱筆尊免被成下候様奉願候。

一五八 日治大次郎書簡（藁科俊藏・宇津種治宛、某年正月二日付）

一五・五×五八・二種、二枚継。宛名の二名は不明だが、あるいは日治大次郎と同じ藩で古賀家門人か。

（端裏）藁科俊藏様／宇津種治様当用 日治大次郎

以手紙啓上仕候。各様弥御安泰被成御勤、奉珍賀候。然者、昨日者御答書委細承知仕候。明日御断之儀者、今朝役人共より申上候旨ニ御坐候。且別段申上候。此間御噂申上候通、明十三日者、為年始世子高館御玄関迄被致伺公候よしニ御坐候。各様迄内々申上置候。尤も夕八ツ過頃ニも供頭之者ニも相頼置候間、伺公前定而押之者先ニ御案内可申上候間、左様御承知可被下候。以上

正月十二日

一五九 径書簡（古賀侗庵）宛、某年三月二日付）

一六・一×五三・四種、二枚継。端裏別筆（謹書か）「〇水戸人 径」とある。文中「立原氏」は立原杏所、「杉山千太郎」は杉山復堂、ともに水戸藩儒、復堂は精里門人。「精里先生御集」

は『精里集抄』で、初集・二集が文政元年、三集が翌二年の刊行と見られ、本書簡は二年または三年頃か。

呈一書候。時下暖和日々催候処、愈御安寧可被成御起居、奉恭喜候。先以初春不凶罷登得拜晤、大幸無此上奉存候。其砌ニ御馳走ニ罷成、奉拝謝候。罷下候後日々紛冗、不呈寸楮失敬御海恕可被下候。此度精里先生御集一部御下シ被下、千万奉拝謝候。封紙ニ書状添と有之、御状ハ相届不申候。只書籍一封のみ相届申候間、立原氏より届被申候間、彼方にも承り申候所、御状ハ不参候由、杉山千太郎方ニ参候半とはも承候処、是も届不申候由ニ御坐候。所々承申候故、延引ニ及申候。料ハ何許にハ御坐候哉、被仰下候様奉願候。御集実ニ精細ニ出来、感服仕候。永宝秘藏仕候。雀躍此事御坐候。頓首

三月廿一日 径再拜

古賀博士函丈

一六〇 佐藤善兵衛寛（古賀侗庵）宛、某年三月二九日付）

一六・二×二三・九種。佐藤善兵衛は不明。仲介者として、あるいは親代わりとして中村忠順入門の束脩を差し出したとき

の覚である。奥に別筆（伺庵）書入「上封ニ束脩 花金壹円／中村忠順」とある。

覚

一金壹両 孤子忠順薄幣

一紫薇五百目 善兵衛御見舞

以上

右御改御請取可被下候。

三月廿九日 佐藤善兵衛

古賀先生執事御衆中様

一六一 文次郎書簡（〔古賀伺庵〕宛、某年六月六日付）

一七・三×四二・〇糶、二枚繼、代楮色刷草花（加茂葵・芳

野山桜・八瀬信夫・高尾紅葉などと名入）下絵料紙。文次郎は

不明。

（端裏）古賀先生侍史 文次郎

大暑尚更難凌相覚候。弥御勇健被成御勤、珍重御儀奉存候。先  
日ハ早々御光臨被成下、難有奉存候。病懶之上多冗、于今出兼

候而失礼仕候。就者被仰下候陶器、調子合候処、中已下之形、  
品物払底いたし、此大皿■手二入候故、差上申候。何分御用  
弁可仕哉、無覚束候へ共、先々為持申候。自然如何二候ハ、  
外二面可仕、尚無御用捨被仰下候様仕度候。先ハ先日之御礼  
旁申上度如是御坐候。已上

六月六日

一六二 毛利興元書簡（代筆、〔古賀謹堂〕宛、某年一月一  
五日付）

一六・九×一三八・五糶、三枚繼、浅葱色雲母引料紙。毛利  
興元は米沢藩家老として戊辰戦争で活躍、維新後毛利安積と改  
名し大参事となる。文中、病気で筆が持てないため「世悴」の  
代筆だとある。

片楮拝啓仕候。時下栗烈之寒威御座候所、御惣容様益御安泰被  
為揃、恭欣之至奉拝賀候。久々御起居も不奉伺候ニ、即染々呈  
書も仕度存候所、近来惣身變急、甚不氣分罷在、殊二肩腕凝結  
仕、執筆心底二任兼、乍失敬世悴以代毫御近状奉伺候。且不相  
替鹿抹之至御座候得共、鴨舌懸奉呈厨下候。時節柄塩味不相用

為差登候へハ、万一変味仕間敷も難計、不安罷在候。幸無別儀相達、一夕之御慰も罷成候ハ、本懐之至奉存候。右早々時候御伺申上度、以走毫呈御左右候。切角時令御自玉奉祈候。頓首再拜

十一月十五日 毛利上総興元（花押）

一六三 岡田左大夫書簡（古賀謹堂）宛、某年二月二八日付  
一六・一×四五・六糶、奉書か。岡田左大夫は不明。『今斎譜』では相模の話を提供している。文中の『抱経堂叢書』『甌北全集』（欧に誤る）とも書陵部古賀本に見える。

（端裏）上 〈岡田左大夫〉

奉呈書候。雪後寒氣厳敷御坐候処、益御福履被成御座、奉恐悅候。陳者、去冬寡君へ御頼被成候持渡書物之内、抱経堂叢書、趙欧北全集到来仕候付、為齋上候様被申付候間、則差上申候。抱経十二套、欧北六套三而御座候。為御受取可被下候。代料之儀者、いまた相知兼申候へ共、先二書物者差上候様被申付候。四部之御頼之処、外二部者一向相分り不申候。定而 come 春者相知可申哉、右之外に注文之書籍御届候へ共分り不申候。先者右之

段申上度艸々申上候。再拜

十二月廿八日

奉再啓 先日者拜走奉拜謁、御酒御膳等頂戴、難有仕合奉存候。乍略御礼奉申上候。再拜

一六四 高尾善三郎書簡（古賀侗庵）宛、某年三月中旬付  
二三・六×一四・四糶。高尾善三郎（？—一八四八）は精里門人、高松藩士。筆跡から判断すると、二四一—二四四の漢文書簡の差出人高尾養（竹溪）と同一人物。一つ書き以下は、亡き親の碑文（二四一参照）を侗庵に依頼し、その彫刻および拓本撮写の出来が良くなかったのを詫びている。

別啓

先達而相願候御筆跡、御出来二御座候得ハ、御恵投被下候様奉願候。毎度多憚奉存候得共、恐悦奉畏候。  
一 此度指上申候撮本、誠二大文ヲ汚穢仕候義、別紙申上候通恐入罷在候。若後日改鑄仕候得ハ、其節又指上可申と奉存候。且又撮写仕候者少々巧なるもの御座候処、是相間違甚下手二而撮写仕候故、相分がたき処等出来仕候。此段も御海濶可被下候。

誠ニ貧家之態御垂察奉願候。

此度も急キ草略申上候。又後便心緒可申上と奉存候。謹言

碑石別紙申上候通、庵治村之産ニ而甚堅く、歳ヲ経候而も

破さけ候事等無之、其故此石ニ仕り候得共、一体石理ハア

ラク、琢磨行届不申候方、搦写甚見苦相成申候。先其ま、

上申候。御海涵可被下候。

三月中澁 高尾善三郎

一六五 井関盛休書簡(桑折雅楽宛、〔天保八年(一八三七)〕

二月二日付)

一六・六×九九。五糶、三枚継。井関盛休は大坂詰の宇和島

藩士か。宛名の桑折雅楽は山寺常山書簡(一五五)に見える同

藩家老。大塩平八郎の乱および「大塩焼け」と呼ばれる大火を

報じる。一四の洞庵書簡(謹堂宛)で言及する乱関係の資料集

編纂の参考とするため桑折雅楽より譲り受けたものか。

一 一昨十九日六ツ半頃より天満与力町より出荷仕候処、天満

橋辺、夫より船場内東横堀上ノ町辺一円焼失仕、爰元近来ニ無

之大火ニ相成申候。昼之内者西風、夜分者北風、昨廿日朝者南

風ニ而、始終御屋敷者風下タニ相成、何も別条も無御坐候間、

御安心可被成下候。昨廿日夜四ツ時頃消火仕候処、一昨早朝よ

り焼候事ニ而、全体暫之火事ニ御坐候。右出火之次第者誠ニ前

代未聞之大変事ニ御坐候。未タ昨今之事故、一向何之趣意と申

事も相分り不申様ニと評判ヲも仕、今以人氣者静り不申、大坂

中之大騒動ニ御坐候。一昨十八日東御奉行所におゐて、与力中

御用談も御坐候や何歟余程之大論ニ相成、終刃傷ニ及候事杯も

御坐候よし、夫より事起り候様風聞仕候。十九日早朝より与力

徒党之面々、妻子ヲ刺殺、各自分之家へ火ヲ付焼払、夫より天

満橋辺へ焼抜申候。一二百人程之同勢ニ而、大筒小筒鎗長刀抜

身ニ而町中ヲ乱妨仕、鴻池善え右衛門壺丁内、三ツ井呉服店江

大筒ニ棒火矢ヲ仕込打懸候所、直ニ焼立、船場内者一円焼広り

申候。上ノ町ニ而者米や平右衛門方へも大筒ヲ打込候趣ニ御坐

候。夫より追々南之方江向ケ鉄炮ヲ打立、乱妨仕候趣之所、加

島や久左衛門方江も参候趣ニ相聞へ、丁度御屋敷前之事にて不

安奉存候所、其内ニ少しハ途中ニ而被召捕よし、公儀之御手も

迫り、徒党之面々も逃失、大分静り申候得共、何レへ乱妨致候

程も難計、火も何方より起り候義も難計、不安堵至極ニ奉存候。

手早ク御屋敷内者何も歟も御蔵詰込ミ、窓ニ者目塗ヲも仕、焼

候構へ二而、手丈夫ニ覚悟仕居候。尤御人数も差出し候得者、更ニ無人一頃者、如何可相成やと大ニ心配仕候義ニ御坐候。其内一旦之勢ヒ斗ニ而、今日ニ至候而者、是切之事ニ可有御坐と、少し者安堵仕候。御城廻り者、土井様御家中、尼ヶ崎家中御城番ニ而、弓鉄ヲ備へ各着具拔身ヲ携へ固メ候趣、其辺者更ニ火事之気色者無御坐、戦場之光景ニ御坐候よし、其外辻々諸屋敷之御人数ニて相固メ候趣、誠ニ仰天之至ニ御坐候。大坂中何方と申事も無御坐、端々迄も荷仕舞等仕老人子共、東西へ逃走り候騒動者、誠ニ可申上様無御坐異常之事ニ御坐候。右徒党之張本人者、大塩平八郎と相聞へ申候。已ニ右平八郎父子其外六人者、早速御奉行所より人相書被差出、似寄り之者ハ早々召捕、爰元へ引出し候様被相達、昨日別便ヲ以御国許へ申上候。定而天下中之評判ニ相成、其御地江者別而早ク、御手前も御仰天可被成と奉存候。私共一向何之詛やら子細も稔と承不申、唯々如夢仰天而已ニ御坐候。当時不人氣之上へ、又々ケ様之大乱、扱々可恐事ニ奉存候。先者右風聞杯之所も申上度如此御坐候。余者重便ニ可奉申上、早々恐惶謹言。

二月廿一日 井関徳左衛門盛休（花押）

桑 雅楽様玉案下

一六六 某書簡（宛先不明、某年七月二一日付）  
一六・〇×七二・四糰、二枚継、浅葱色料紙。

寸紙稟啓仕候。昨雷雨後頓清涼、益御清閑可被為在、抔喜奉賀（遊に上書）候。然ハ、前日御教諭之尊言儀、親家夫妻江逐一伝説仕候処、巨細欣然領諾仕、一応御粧奩倍嫁之具、都尊裁二任七、盛不盛異儀不仕由御坐候。毎度申上候如く、舅氏ハ忽略神率之人、親姑又漸其風ニ化し、敢て煩文を好み候にも無御坐殊ニ清貧、合巻之夕、洞房華燭之儀品、其外文飾之具久く典売、一物も留メ不申、華麗之御粧奩、却而闔家赧顔可仕抔、款嗽仕候。左候へ者、一兩日中親近族譜相認、御取替者可仕之令旨、珍重代稟仕候様、叮嚀属把申聞候。乍憚此儀御留心可被下候。右神率家に御坐候へ者、每事急遽之僻有之、俗説当月ハ一歳中之令月吉期之由、強て申上候義ニハ無御坐候得共、可相成候ハ、儀文ハ何様ニも相略し、御粧奩者後日追々御搬移被下、親逆合巻之儀、本月中相済申候ハ、格別大幸之由、夫妻連口懇々申聞候。此儀大草忙難必請趣、委曲辞謝仕置候へ共、夫婦一片之苦衷没し難く、一応転稟仕候。猶御裁奪可被下候。早晚間親

族譜到來次第、即日送上且拝 光子細敬稟可仕、專一為此。早々  
頓首

七月廿一日

補啓 愈御成儀之上、御引移者、尊裁ニ從強請難仕御坐候  
へ共、納聘之儀ハ佳期を追本月中執行度、令旨相見へ申候。  
是亦乍憚御在令(?)可被下候。以上

一六七 平野甚右衛門書簡(古賀侗庵宛、某年二月二三日付)  
一六・〇×五四・九糶、二枚継。平野甚右衛門は内容からす  
ると幕臣であろう。

(端裏)メ/古小太郎様申上候 平野甚右衛門  
歳暮之御祝儀目出度奉存候。先以度々雪ニ而一入之嚴寒御座候  
得共、弥御勇健被成御座、珍重御儀奉存候。随而右御祝詞申上  
度、御肴代金百疋、進上之仕候。誠以御祝詞之驗、迄御座候。

一 私儀老衰仕御奉<sup>(平出)</sup>公難相勤、小普請入奉頼候処、去八日被為  
召<sup>(平出)</sup>名代差出候処、願之通御番 御免、且年寄候迄相勤候二付、  
御褒美頂戴仕、難有仕合奉存候。右之段、乍序御吹聴可申上如  
斯御座候。以上

十二月十三日

一六八 小野寺丹元書簡(古賀侗庵宛、某年六月二日付)

一七・四×九一・四糶、二枚継、布目型押奉書、水損あり。  
端裏別筆(侗庵か)「小野寺玄適」とある。小野寺丹元(一八  
〇〇―七六)は蘭方医、仙台藩で医学・蘭学を教える。岩井憲  
幸「幕末仙台藩におけるロシア学研究の開始とその展開」(『明  
治大学人文科学研究所紀要』八一、二〇一七・三)によると  
文政一二年(一八二八)から天保五年(一八三四)まで長崎に  
留学したというから、その間のものであろう。侗庵とはそれ以  
前の江戸留学時に知り合っていたか。文中トルコの戦死者に触  
れるが、これが第一次トルコ・エジプト戦争であれば、天保四  
年あたりか。早稲田大学図書館には丹元宛侗庵書簡がある(チ  
06/03890/0069/0012)。

薰沐奉拜啓候。辰下土用中炎熱難渡御坐候所、御物<sup>(平出)</sup>体様被為搦  
益、御機嫌能被遊御凌、恐悦之御義ニ奉存上候。陳者、先月鎮  
台御使ニ相託書状奉呈上候筈、定而相達候御事と奉存候。其節、  
惜故紙文、奉呈上候積りニ而、疑失念仕申、此度指上候申候間、

御一覽被下度、是ハ舶来之清客崎陽ニ而猥リニ故紙ヲ賤用仕候  
を見当リ、為日本製候事と奉存候。

一 蘭船も当月六日入津仕申、例年より四拾日も早く着仕候由、  
扱当年之船ハ少々大形ニ而、形状も異様ニ相見得申、是迄ハ式  
艘ツ、參候所、当夏者老艘參リ、殊ニ反物等者聊持渡申候由、  
前書風説書ニ相見得候通、本国より咬嚼吧より之通路相絶候ニ  
付、畢竟持渡も品ニ依リ少キ物も可有之と奉存候。風説書ニハ、  
無御坐候得共、トルコ四万人余ニ戦死と相見得申、全体風説書  
ハ大凡を申上、中々ハ相秘候事も有之、此間もカヒタン對話之  
御承候得ば、印度辺も戦争不斷義ニ相見得、当人頭ニハ相咄不  
申候得共、話説之間自然と相知レ申候。此度医者老人參リ申候  
所、是も数度戰場ニ相出候趣ニ而、炮創も有之、殊ニ医術ハ頗  
ル卓越之由、乍然入津後日数無之義ニ御坐候間、未タ驗不申候。  
官位ハ、テウエー、リツトルニ御坐候間（行間に「両総ト申衣  
服ノ肩の左右ニ両総を垂申候」、得尋常ニ有之之間敷奉存候。  
私義も此節イキリス学并ニロシヤ風土記翻訳ニ懸リ居申候。出  
来仕候ハ、追々奉入御覽候様可仕候。只今蘭館より罷歸リ急  
便承リ、細々相認候候ニ付、要用耳奉申上候。時下酷暑之候、  
折角御保護乍影奉折候。他近便万々可奉申上候。恐惶謹言

六月十二日 小野寺玄適拜

小太郎様侍者御披露

再白 崎陽御用事も被為有候ハ、被仰付度奉存候。

一六九 小野寺丹元書簡（古賀侗庵宛、天保二年（二八四〇）  
某月某日付）

一六・〇×六六・九糶、二枚継。端裏別筆（謹堂か）「〇小  
野寺（天保庚子）」とある。日付入書簡が別であり、それに添  
えられたもの。文中「閔英之忝件」は、前年五月、蛮社の獄の  
連座を恐れて自害した小閔三英を指すか。「尾州一件」はやは  
り前年、幕府の命令により後継藩主が決められ反発があつたこ  
と、「南部侯少将」は当主の左少将任官のことであろう。

副啓去秋之御尊書途中ニ而及迂滞、臘月念六日相届、難有奉拜  
読候。俄羅斯国都府焼亡之義被仰下候所、是ハ新都ペートルス  
ビユルクと相見得申候。如貴命南北近極之地者エレキテル之氣  
盛故、時々悪風有之義ト承申候。昨年之風説書ハ未タ崎陽より  
遣不申、兎角閔英之忝件より訳司輩恐懼仕候義ト奉存候。追々  
入手仕候ハ、入御覽候様可仕候。当年者朝鮮采舶ト伝聞仕候



所、実説ニ御坐候哉、必定林家并先生家、对州江可被為入相唱<sup>②</sup>申候。相叶候義ニ御坐候ハ、御供奉願度義ニ御坐候。

一 尾州一件も世評相止候様ニ御坐候所、如何相片付申候哉。

唱通ニ御坐候而ハ、無事ニ鎮靜無覺束義ト奉存候。南部侯少將是亦一盛事ト奉存候。南部ニても御国政大革ト相見得申候。何レ剝民之詭不免義ト奉存候。

一 当国者客冬以來諸病流行仕候而不得寸暇、甚学業之妨ニ相成申候。右様碌々消過光陰仕候義、甚背夙志申候間、何卒出府仕度内存ニ御坐候。乍恐縮工夫ヲ以伺天台之方ニ而も相弁候義ニ御坐候得ば、実ニ於（拙子）難有仕合ニ奉存候。御堪考偏ニ奉希上候。区々住偏地候義、甚不本意ニ御坐候。将亦蝦夷近島拙訳小冊子、奉入御覽候。次ニ乍失敬不腆之軽品奉献上候。御笑留被成下候ハ、難有仕合奉存候。病用紛冗中匆々奉申上候。春寒料峭之候御自玉乍蔭奉祈上候。以上

同日 小野寺玄適拝

小太郎様御用人中様

一七〇 小野寺丹元書簡（『古賀侗庵』宛、某年六月二二日付）  
一五・六×二一・〇糰。同じく本体の書簡に添えられたもの。

三田村太一郎は商人、困窮者のため私財を提供したことにより役人に取り立てられた。

副啓

嫻 嫻 一

々 嫻 一

亭 亭 一

一 依玄適嘸 為三田邨生

為三田邨生

右三様之内何ニ而も思召ニ相叶候通御認被下置度奉希上候。

毎度恐入奉存候得共、右額字御認被下置候ハ、難有仕合ニ奉存候。右ハ長崎会所御救方役人ニ而三田村太一郎と申、書画詩を嗜、随分篤実なる者ニ御坐候所、乍恐何卒御書願具候様、強而相願申候間、無拗奉希上候。六月十二日 小野寺玄適拝

一七一 松田迂仙覚書（『侗庵文集』編纂メモ）

一三・九×八一・一糰、二枚綴。松田迂仙（一七八三―一八五二）は高崎藩儒、精里門人。朱書別筆が二カ所（ともに謹堂筆か）、冒頭に「四月朔下谷松田兄評定」、作品名列挙の最後に

「圈ヲ加へ候分、先ツ除キ候方ニ評決仕候事」とある。文中「丙子」「丁丑」は文化二三・一四年（二八一六・一七）で、岩瀬文庫蔵『侗庵文集』二集卷三ノ五所収作品に全て含まれ、首冊『侗庵文集選目』で「松」と記される作品とこの一覽の無印作品とがほぼ一致する。

卷之三（丙子上）

答原田維岳

○与隠者書

○送川副子亨序

○送梯子礼序

送上村大淵序

送入遊松島序

蘭学凡序

送石冢志堅序

○日新館志序

卷之四（丙子下）

夢遊金沢記

勤有堂記

暢懷樓記

琴説

○売菊翁言

四皓贊

○晏子御贊

○磨兜鞣贊（并序）

卷之五（丁丑）

○答高尾子浩（第一書ノ方）

答玉潤和尚

贈近藤子実序

奚疑堂記

謙受益説（「謙」欠筆）

○伍大夫贊

愁賦

右二十又四篇、鄙意欲収載者、不但以文辭之巧、或有所關係頗大者、是以取之。其冠一圏者、刪之亦可。譬譬論声色、安得其無謬。伏仰諸賢評騭焉耳。

松田（順之）再拜謹咨

一七二 那珂通世書簡封筒（松平某宛、日付なし）

二七・五×二二・二糎。封筒を開いて台紙に貼付したもの。

裏側は四方から折りたたみ、左右の先端に分かれて「メ」がある。「川田先生」は川田麿江か。

川田先生御内にて

松平様 那珂通世

愚息又世持参

一七三 某書簡（古賀侗庵）宛、某年二月二十九日付

一五・九×二三・〇糎、浅葱色料紙、前半を欠く。文中「新齊諧」は清・袁枚編の怪談集。侗庵も『今齊諧』と名付けた、全国の門人等から集めた奇談集を編んでいる。「復原」は精里の居宅復原楼。しばしば雅会が開かれた。

「記録新齊諧之類書物出候ハ、御知せ被下度□斗ニ而も」

ニ脇差重クこまり申候間、医者之さし抜古物、又ハ斗ニ而も

除二出候ハ、大井より見せ候様被成可被下候。代ハ凡三兩内外二而無之而ハ、手二及不申候。今日者忘臘二復原江遊行居

申候。御出ハ被成間敷候哉。但時分柄非所敢望候。已上

十二月廿九日

一七四 松木魯堂書簡（古賀侗庵宛、「天保二年（一八三二）二月一日付」）

一五・七×（四三・七十一・九六・〇）糎、二枚継・六枚継、浅葱色料紙。前半二枚目途中で破れ、現状は二つに分かれている（分かれ目を「で示す」）。松木魯堂（一七八五—一八三八）は米沢藩儒、精里門人。通称は彦右衛門とされるが、国文学研究資料館蔵『古賀穀堂書簡』（ヨリ）は魯堂宛穀堂・侗庵書簡七通を卷子本に仕立てたもので、宛名に通称を用いる場合「彦左衛門」。また、上杉鷹山手沢『古序翼』（市立米沢図書館蔵）第一冊末に「松木彦左衛門」の署名がある。二〇二詩箋と同時と推定した。「支侯」は支藩新田藩の藩主。「丹泉」は赤湯温泉か。「篠崎」は篠崎小竹か。「字津討源（原が正しい）」は清代の叢書、古賀家本が書陵部にある。聖賢群輔録はそこには収めれない。

（前欠カ）好風景ニ而時々江辺之御閑行御風致不堪想像候。米沢ハ寒中より春來大雪ニ而、二十年來無覺事ニて、官舎栖居な

と八軒より高相成、池塘春草にも扱々待遠ニ罷在候。乍然此間ハ漸暖、長閑ニ而喜罷在候。履端之御慶も不申上、夫故俗牘ハやめにして、一言拙考奉寄候間、御笑正可被下候。此事一承り候て、志賀孫太郎も一首差上候。且春來臥病引籠之内考候草稿両三首差上候間、何卒御清暇之時、痛御点竄奉希候。其内牡丹之詩ハ支候発駕前浄書差出候筈ニ付、可相成ハ早御差下被下度儀奉頼候。去冬丹泉入浴仕候。時節後れに候得共、久々ニ而■■故、十日之間頓爾俗累無一点、誠ニ閑日月浴三昧ニ候得者、此節伏枕退屈之跡拙文考■■候而、一冊ニ書加置候。且又丸山直之進紙差遣、御書を相願候。御緬道恐入候得共、横物ニ律賦を御揮毫被下度奉希候。穀堂先生より度々御書翰御往来被成候筈、御別状も不被成御坐御奉職之段と奉賀候。御出府之程如何ニ候や、勞夢計ニ候。

一 諸藩之文学碩儒先生、嗚々有之候半、寒郷可聞様も無之、誰之物か都下尤盛ニ候半と致想像候。去年中ハ篠崎書状一道申遣被下奉謝候。

一 学津討源御蔵書詰合之写、両三日參上拜見仕候得者、聖賢群輔録と申物、陶潜著と見得候。近年清朝本珍敷書も追々御入手被成候半、不堪羨恐候。

一 当役支配下三百六十人計、八九組ニなり、■■支配之差事多なる事ニ御坐候。兼而御熟知被下候通、度量小局ニハ乍浅知困り居候。先年量を広げ候義、質問ニも申上候得者、□不如と之御示常々守り居候。城宇狭けれハ人之悪、か目ニ留り申候義、散々なる事と省察罷在候。且又楽園記御文之内ニても御書被下候。古人恥独為君子之伯玉氏之語、深服膺仕居候。尚又只今ニ至り候而ハ、鴻魚之便斗、再款親敷御示も難請事ニ候得ハ、何卒御閑之折御垂示奉希候斗ニ候。余ハ奉期後鴻候。恐惶頓首

二月十一日 松樹彦左衛門秀□(花押カ)

侗莽劉先生侍右

一七五 (水虎考略草稿)

二九・六×三四・四糧。書写者不明。河童に関する聞書や文、献を集めた侗庵『水虎考略』後編卷二「水唐余話二」の原文で、同書では漢文体に書きかえている。

薩摩出水の郡出水の郷に鬼塚八右衛門と云一奇勇士あり。放言汗漫貴人を恐敬はす、又絶て生産をおさめず。常に山川をかけるき漁獵をすぎ好む。或夜深山江にたまちに行キ、薪を折火

を焼鰯イシを焼き飯を食ひ候処、小サキ手之肚ハラを柴之影より三ツ四ツさし出ス。八右衛門こやつ河伯ニは紛なしとおもひ、鰯一口ツ、与へて曰、此恩報しに猪を驅り出し来よと云。暫ありて、八右衛門、大猪来るぞ、射逃ツスな、と呼声あり。八右衛門鉄炮に火繩をかひ待ち候処、斑白之老猪筒先五六間計之所江来り立止り候のを射斃したるよし。又或夜差越、火を焼き休息いたし居候処、以前之如く河伯三四頭来りて手をさし出ス。八右衛門又鰯一口ツ、与ふ。一ツ之河伯最後に来りて手を差出ス。時に八右衛門いわしも既に尽て一口もなし。戯に是食へと焚落しをはさみあげ、其手之肚ハラ江投ス。河伯大ニ呼て逃去。忽満山崩がとごく林木之折る、声ありて大に躁がし。八右衛門大ニ驚きて匆々帰たるよし。其後山中江差越候得者、河伯色々邪魔をなし、終ニ獵を止又候由。

右八右衛門于今存命仕候。年比五十内外ニ而も可有之と奉存候。

\*第五冊

第四冊に同じ。ただし幕臣関係者が多いか。

一七六 懋書簡（古賀侗庵宛、某年三月一日付）

一七・九×一〇八・四種、二枚継、奉書か。懋については不明。文中「瀬名氏」については、「慶應義塾所在近世文人書簡筆跡類総覧（二三）」（論集五一、二〇一七・二）四九古賀穀堂書簡に「瀬名氏一件」とあるものと同じか。

口演

一昨九日和多理拙宅へ罷越候。弥（小生）論之通、瀬名氏より御離縁可申出との事ニ御坐候。但内実ハ金之義甚六ヶ敷、此所二者躊躇致居候と、先御離縁申出之内含斗私へ相話候旨、右金之所ハ只今中之才覚も出来不申候間、是ハ追々可申請旨ニ御坐候。右ニ付今日為御相談罷出候処、御外出之由ニ而認置候。

右度（小生）存意ニハ、御離縁之義ハ表向被申越候者、御承知ニ而不苦義かと奉存候。

扱金之儀ハ（小生）始終両方半分ツ、之損ニ致し、瀬家ニても廿五ハ没入、廿五ハ返金ニ可致旨、（小生）之持論ニ御坐候。

此所ハ尚一応も再応も可申談奉存候。と、の所五年賦、あるひハ禎二氏へ新婦出来候節戻し候とか申候。右両条之内ニ諾し可申哉と奉存候。如何仰高裁候。奮具之家ハ甚心配仕候。是ハ申

出し候てハ、都而無礼之訳故、先ツ向方之發言鬱々窺居候。孰

十六〔左傍「十九」〕廿日之内、御閑日鳥渡伺度候。其節罷出

委曲御相談可仕候。先右之儀申上置候。御勘考被成可被下候。

頓首

御覽後丙丁

三月十一日

侗庵老先生内要 懋拝

一七七 林復齋書簡〔古賀侗庵宛、某年九月六日付〕

一六・四×三三・四糶、奉書か。林復齋は述齋六男、夭折し

た壮軒（述齋三男でその跡を継いだ裡宇の子）を継いで第一  
代大学頭になる。

（端裏） 侗菴先醒 糶

朶雲捧読、如諭秋晴明嫺御同意奉存候。陳者、過日者拝趨之処、

雅愛之款留を蒙り、劬厨<sup>②</sup>之御設千万拝謝候。扱又磁枕一筒之代

価早々御投下、如敷落掌仕候。只今晚餐中乱揮奉復迄写申候。

不一

秋末之六夜

一七八 某書簡〔古賀侗庵〕宛、某年九月一八日付〕

一六・六×三八・二糶、奉書か。学問所の同僚からの書簡と  
思われる。文中「成島桓吉」は幕府儒官成島東岳。

秋氣肅然御多祥奉賀候。然者、先日來御約束のみニ打過キ候。

小墅御來被下哉之儀、廿後何日比ハ御都合御出來可有之哉。廿

三四五之内ニ候得者（小生）方さしくりも出來申候。否御訂日  
可被下候。尤午後より御來臨の御都合に仕度候。成島桓吉と顯

待いたし居候事ニ御坐候。已上

九月十八

二白 賤恙大抵快復、明日出勤仕候。廿日貴面も可致候得と  
も、序故先書中を以申述置候。已上

一七九〔古賀侗庵〕書簡〔宛先不明、某年某月一七日付〕

一六・一×三七・五糶。筆者は筆跡から推定。謹堂宛か。

（端裏） 私用御倉

今日者御同道ニ退屈仕候。扱船載鎧甲之事、いさゝる被仰下、承候。成程ツ、切定方右之通りニ候ハ、却而其方此後とも能御都合可然と奉存候。明日之談見合可申候。しかれとも、何か御不便利之儀も候ハ、早速可被仰下、此節之事何かやら候も御間欠キ不申候様ニハ随分周旋可仕候間、御遠慮無之様奉存候。右少々早々貴報斗に御坐候。以上

十七日

一八〇〔古賀侂庵〕書簡〔宛先不明、某年二月二五日付〕

一六・〇×五五・七糶。同前。

〔端裏〕御直披

益御安和奉恭賀候。先日元美一件ニ付親縷之御答書承知仕候。相良へも内々人を以御書面之趣者申通候。相良之方も其後埒明不申由、定而今時分ハとふとか相成居可申と奉存候。別紙先日草卒中差上候儀、認物落、恐入儀御坐候。是ハ無詮ものニ候へとも、もし其内元美へも御便候節、是を御包込御届被下度ため差上申候。友太郎一件ニ付被仰下候儀も承知仕候。其後何たる儀も不承知候。いつれ近日之内拜眉万々可申上候。先以匆匆不

宣

十二月廿五日

一八一〔古賀穀堂〕書簡〔古賀侂庵〕宛、日付なし

一六・二×二七・〇糶。書簡の別紙として同封されていた、文政一〇年（一八二七）五月の赤札事件に関する処分一覧か。

〔役方被差止／參相慎候様〕政務惣心遣／鍋嶋山城

右同

執政／鍋嶋弥平左衛門

右同

大目付／多々良喜左衛門

役方被差止／多久美作へ御預

參政／鍋嶋源右衛門

〔差控參／相慎候様〕

年寄／木下左監

右同

右同／石井又左衛門

差控御免

鍋嶋十左衛門

右同

鍋嶋但馬

先右之分相知レ申候。

一八二〔尾藤二洲〕書簡〔古賀精里〕宛、日付なし

一六・四×二三・五糶。台紙に鉛筆書で「尾藤二洲」とあり。

「肇」は二洲の名。

屏画類之事、考立候ハ、波翁元来得手ニて好物ニ御坐候。肇ガ不得手ハ固ヨリナリ。老兄も恐クハ御得手ニハ有之間敷候。然ラハ少々偏見ハ出し候共、あちらへ任セ申事兎角得宜可申候。

於弟ハ拙者故便之一計ニも奉存候。ケ様之事ニ骨を折候ハ誠ニ無益なれハ、何分ニも好き人江任セ申方一上策ニ奉存候。如何々々も御覽後早々御投炎可被下候。

一八三 某書簡（古賀侗庵宛、某年六月五日付）

一五・四×二〇・五糶。宛名の下および左が破棄されている。

（前欠）乍御面倒別封夫々御届被下度御頼御坐候。此便別而取込別段書状差上不申候。

六月五日

小太郎様御取次（後欠）

一八四 文久三年二月五日御用掛任命者一覽

一六・四×五〇・二糶。謹堂筆か。

文久三年癸亥二月五日学問御引立として小学校御取立御用掛り被 仰付旨於芙蓉之間御老中井上河内守殿被仰渡。（但御掛り松平豊前守殿御引<sup>レ</sup>ニ付<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>之由）

〈学問所奉行〉本多伯耆守

一同江一席ニ而 断 秋月右京亮

被仰渡 〈大目付〉 松平对馬守

林 大学頭

〈御勘定奉行〉 竹内下野守

〈西丸御留守居〉 林式部少輔

〈御留守居番〉 古賀謹一郎

〈二丸御留守居〉 杉原平助

〈御目付〉 池田修理

土屋民部

堀宮内

其後於新番所前溜御同人御書付御渡し伯耆大学修理三人ニ而請取退也。

儒員者 岡本信太郎

御右筆部屋 佐野令助

縁類ニ而被渡 永井三藏



但御書付八通

中邨敬輔

観積り

塩野谷甲藏

断 安井仲平

芳野立藏

望月万一郎

一八五 芳野金陵書簡（古賀侗庵宛、某年某月二六日付）

一七・九×二八・四糶、二枚継。芳野金陵（一八〇二一七八）

は文久二年（一八六二）に学問所儒者に取り立てられるが、その前は私塾を開き、また田中藩儒でもあった。文中「御鍔」は「御破損」は大坂定番の役職名。「平吉」は杉原心齋か。

御別紙拝見仕候。朝倉次郎右衛門跡江推薦之儀被仰下、平吉書

面為御見被下、委曲承知仕候。随分可然哉二奉存候。乍併御鍔

炮ハ御破損より階格も下り、其上外々よりの贈物等も余程違候

哉二承及申候。当人望有無を承候而申遣候方ニも可有之候哉。

何レ明後日拝謁ニ御相談可申上候。平吉書面返上仕候。御落掌

可被成下候。何も明後期御面話而申上残候。以上

廿六日 立藏

小太郎様

一八六 中村為一書簡（古賀侗庵宛、某年八月六日付）

一五・九×一七・六糶。中村為一は一五既出。

（端裏）小太郎様 安八郎

過刻者奉得拝顔大慶仕候。其節御預申上置候間敷御書付之内、墨引張紙仕候処斜（この字補入）之間敷、相伺申度旨賤息為弥申聞候。何卒御書記し可被下候。匆々申上候。以上

八月六日

一八七 芳野金陵書簡（古賀侗庵宛、某年四月二六日付）

一七・八×三四・八糶。

（端裏）小太郎様奉復 立藏

御手教薫誦仕候。如尊諭清和之節益御佳勝被成御座奉敬賀候。

昨日者御寵臨被成下、緩々拝晤奉謝候。乍併客来紛冗別而龜末

之至奉恐悚候。縷々御諭辞赧汗仕候。其節之尊仕御浄写被成下

候様奉願候。且御到来候由塩鴨一隻被下置、難有早速拝味可仕

御礼申上、尽年奉感銘候。何レ拝謁御厚謝可申上、尊答迄草布御海容奉願候。不一

四月廿六日

尚々提灯早速御擲還被下落手仕候。呉々も寄何(二字転倒)之品御恵貺被成下、感佩不浅奉存候。以上

一八八 江木鰐水書簡(古賀謹堂宛、〔安政元年(二八五四)六月二六日付〕

一五・五×七〇・八糶、二枚継。江木鰐水(一八一〇―一八一)は洞庵の弟子、福山藩儒。文中「カロウト」は樺太、「布恬廷」はプチャーチン、「堀織部」は安政元年六月設置された箱館奉行堀利熙。謹堂は嘉永六年のプチャーチン長崎来航に際して国書翻訳のため派遣されている。江木鰐水は老中首座(福山藩主)阿部正弘の側近として情報を得られる立場にいた。

奉拝見候。酷暑之砌執事御万忙、恭賀之至奉存候。扱被仰下候一条、五六日前ハ其沙汰御坐候共、此節ハ沙汰止虚説と申居候ニテ、外ニ何ラ御届等も無御坐候。此比松前より届ニ、去秋以來蝦夷地の陣屋ヲ速居候夷人共、四艘之船来り候而、小屋ヲ取

くすし、カロウトノ方江引取候由、何故ト尋見候。布恬廷長崎より南京二行、南京より一軍(商ミセケチ)船ヲ差越、其地早々引弘候由、命令来り候故と申候。両三日中ニハ堀織部来着故、

其迄待呉候様申候共聞入不申、此地引弘之命故早々引取とて夜ニかけ小屋ヲ取扱、帰帆致候。布恬廷より堀織部工の書ヲ残置候而出帆仕候。一昨日之届ニ御坐候。日附ハ忘れ候共、大概此通ナル義、頗ル奇ヲ出申候。織部工残置候書状之和解とも参り、何ぞ御関係之事共御坐候者、極内々ニ而可奉申上候奉存候(以上三字右傍に追加)。例之通御覽後速ニ御投火奉願上候。不具

六月廿六日 江木戩頓首拝

謹堂先生執事

一八九 中島棕隠書簡(古賀洞庵宛、某年七月一二日付)

一六・〇×三〇・七糶、浅葱・薄墨色刷棕欄下絵料紙。中島棕隠(櫻隠とも、一七七九―一八五五)は京都の儒者・詩人、狂詩作者としても知られる。

短楮謹上、先以暑後猶炎赫の処、涼雨一過稍凌能相覚候。益御万祥不耐扑喜之至奉存候。随而は霎時ながら拝謁、奉欣慰候。

時季之興居猶相窺度、平昔御疎逃のみ仕候。致謝旁手製求肥、  
わさとの御鮮さ相添奉獻呈候。御祭留可被下候。折角順時之御  
保撰最要奉存候。換舌書までと万卒略仕候。頓首

初秋十二

侗庵先生函丈

櫻蔭再拜

一九〇 長野豊山書簡（古賀侗庵宛、某年九月一日付）

一六・〇×七三・八種、二枚継。長野豊山（一七八三—一八

三七）は川越藩儒。

（端裏）紫溟劉公執事 確百拜

近作一首陋拙之至御座候得共、乍序博祭呈覽仕候。再頓首  
爾來相絶御安否も御伺不申上、悚息之至奉存候。道履益以御万  
福被成御座、奉恭祝候。然ハ先達而拝借仕候望溪文集久々難有  
仕合奉存候。誠ニ写取り候も作止無常甚手間取候而何共恐入候  
御義奉存候。思召之程難凶、偏ニ悚息慚惶仕候事ニ奉存候。漸  
近日卒業仕候間、完璧仕候。御落手被下候得ハ難有奉存候。万  
其内以參御礼可申上候。恐惶頓首

九月十四日

一九一 斎藤鑿江書簡（古賀侗庵宛、某年三月二日付）

一七・三×四六・三種、二枚継。斎藤鑿江（一七八五—一八

四八）は阿波出身、精里門下、後に大坂の儒者。端裏別筆（謹  
堂か）「〇斎藤五郎」とある。

象再拜上

昨秋来往來之書生も無之、旁久敷不奉伺候、万咎無所逃次第、  
偏ニ御海恕奉祈候。其中昨十二月之御教示当三月着仕、早々相  
披、御動履御勝常ニ被為在候段、千万奉伏賀候。（小生事）瓦  
全如旧、但年々馬齒相加候。何之志業も不遂、往時之御訓導ニ  
相負、申上方無之候段、遺憾之至仕候者、郷士渡部太郎昨秋再  
遊之節、（小生）同様御召使等奉希候処、早々御計冥利御引立  
等与り候段、太郎より申來、於小生面目ニ相余り難有仕合重疊  
奉謝、（小生）事も東遊侍教之志者于今不已、乍去太郎杯ニ御  
聞も可有御座哉、往年十四年も自業相廢、周旋仕候祖業又々愚  
姪ニ破ラレ、親族之者共小生ヲ帰省相促場合相成候。乍去馮婦  
之行も得不仕、断然一顧不仕候得共、先々暫時当地淹留仕候得  
者、愚姪之懲劔改過再復之道ニ相成、且親族共世話仕者之申訳

二も相成、旁又々一兩年当地留足仕、此苦 尊聴ニ相汚申義無御座候得共、此迄東遊不相果食言之恥も自恐仕、誠ニ終身家事役之寸中御垂悵奉希候。当地居況ハ、益友無之、屏迹閉戸独学孤陋、日々自嘆仕罷在候。此茶少々伺候之印御左右迄献上之間、御笑納奉祈候。何しも東遊者相果候間、先賜書奉報旁如此候。自外者為時御自重万々奉祈候。頓首拜上／三月十二日

古賀小太郎様御用人衆中 齋藤五郎象

一九二 齋藤鑿江書簡（古賀侗庵宛、某年七月一四日付）

一七・四×五四・五糎、二枚継。文中「那波辰之助」は徳島藩儒那波鶴峰、一二〇既出。

頓首再拜上

其後者繼而不奉伺候御機嫌之程恐入候。歲月荏苒、当年も最早秋涼相催候時節相向仕候。惟御左右御動況御自若可被遊御座、千万奉賀候。（小生事）万不相更当地留学、乍恐御省思奉希候。乍去兎角郷事全免不得、于今東遊宿志未相遂、此件遺憾之至仕候。又渡辺太郎此度西遊仕間、私同様之御思召御垂教之程奉希

候。且又小生事も委曲此者に御尋被下度、何レ東遊仕、今一度奉拜謁積ニ御座候。先者任便啓上如此候。尤も此度何カ御品等も献上仕度候得共、太郎单身故相属シ候事難罷成、何レ当秋者又々那波辰之助出府、其節ニ相留メ候間、乍憚□万宜敷御執成奉希候。拜上 七月十四日

古賀先生御取次中 齋藤五郎象

26X・30/2

\*第一冊

侗庵に贈られた詩箋を主とするもの。

一九三 原田復初詩箋

二八・五×三四・〇糎。初行下部欠損。原田復初（一七六七

一八二五）は佐賀藩儒、精里の弟子。「癸未」は文政六年（一八二三）、「辛巳」はその二年前。引首印「静脩」、落款印「喬」。

癸未之夏檢書棚「」、則博士侗菴先生之国字牘、暨恩寄小絶五（三ミ七ケチ）首、係辛巳春晚之作。書則登時、

一 奉答詩猶闕然。深慚遲臯、以三韻奉謝。

(印)

少小学爲君子儒、風標矯々立雲衢、遠程入夢尋無路、月落長空獨鶴呼、  
孤厚守拙海西隅、纔免利名靡刃徒、幕下斯文(名流ミセケチ)  
門戶盛、何人濂洛称醇儒

沈綸衰病歲云徂、道学友朋掃地無、代遷愧將夢前質、維持学運  
待人扶 復初喬拜具 / (印) (印)

(盆脚上通ノ日勿々相認申候ゆへ、籠紙草稿塗鴉之儘奉呈、  
御海涵成可被下候。)

一九四 杉原静書簡(古賀侗庵宛、某年五月一日付)  
二九・二×四五・四糧。杉原静は不明。

静白、方今春往夏来、未審 先醒動止安健否。頃者聞先醒起居  
清榮、幸甚不勝抃踏之至。静也、不慮客歲之秋不幸罹疾、足不  
踵学校者凡半載、今茲之春再往來学校、欲一仰眉宇者有日矣。  
然静也、雖知 先醒之眉、先醒却知僕之面否。僕故深潜恐怖、  
不敢復謁、望然於此者數十日矣。常聞 先醒腹笥吻筆神腸皆錦。  
伏冀托驥尾而騰驥絕塵、謹獻鄙文一兩篇。情隘辭蹙、固無足覽

者。願 先醒不陋僕、電覽賜斧正、則雖蒙九遷之命得万戸之封、  
何喜加焉幸甚。伏惟、時稍向暑、加餐自愛。不既

侗莽古賀先醒 / 閣下

仲夏仲澣一日 杉原静拜呈 / (印)「杉原 / 静印」

一九五 垣内恕詩箋

二九・七×四五・四糧、奉書か。垣内恕は不明。

披雲樓集奉迎侗莽先生

野藪且山飯、偶迎長者軒、飛鴻鳴(「鳴」本文末より補入)遠落、  
寒月照荒垣、欲下南州榻、先開北海樽、非才一何幸、追陪接龍  
門 / (垣内恕再拜)

一九六 牟田昭詩稿

一六・二×九・七糧。牟田昭は不明、一九七に侗庵の「門下」  
とある。次の詩箋の詩の尾聯に関わつて添えられていたメモの  
ようなものか。

僕客歲陪紫溟先生、遊田辺侯邸、垂釣前池、驟雨忽至、時有拙詩

侯亭罷釣引杯頻、雷雨忽從西北臻、添得秋池十分水、此中必有羨魚人

僕近日閱旧作、至此詩不堪馳想、彷彿在眼前、故今作句中及之

一九七 牟田昭詩箋

二八・九×三八・七糶、薄茶色料紙。後出の歳旦詩が天保元年（一八三〇）作なので、その前後であろうか。引首印「飾和」、落款印「牟田／昭印」「晋／卿」。

奉寄紫溟先生（印）

路遠天長夢不成、音書動歷歲時迎、文知解題無儔匹、德仰斗南高姓名、鬢髮彩雲当戸散、芙蓉白雪入窓晴、何年重对侯亭雨、細話江湖漁釣情（散一作映）

叱正 門下 牟田昭拜上／（印）（印）

一九八 日治天球詩箋

二九・四×五一・五糶。日治天球は小田原藩士。藩主の命により『貞観政要』刊行のため校訂を行ったことが知られている。

一五七・一五八の日治次郎と同一人物か。印記「天璩／印信」「東／序」。

別業忘三伏炎、巢林架水結茅櫛、窓間接膝無情隔、竹裡移牀有興添、黃鳥繞枝猶宛轉、紫蓀滿圃綵穠織、園亭幸值儒賢到、

（儒腐）恩榮得飽甜

奉和侗庵先生同我公子遊石原別莊之瑤韻

伏乞正 日治天球拜具／（印）（印）

一九九 池田冠山詩箋

三一・二×六〇・〇糶、画仙紙風。池田冠山（二七六七～一八三三）は鳥取藩支藩若桜藩藩主、定常。文人大名として知られた。初行冒頭欠損あり。印記「源常／之印」「字曰／君倫」。

（別勢）□庵劉公見訪後以詩見寄、因賡原韻却寄

負郭柴門不輒開、興情今日為 君催、斯交非是緣詩酒、礫水菊  
花曾非媒（公嚮觀菊長沼侯園、余邂逅初見）

詩徒多是属高陽、君独常醒興却長、誰識撚鬚支頰際、醉鄉外  
别有吟鄉

知 君胸次最澄清、品鬻從來矯世情、詩格超凡何所擬、唐推柳々  
宋王荆

冠山源常拝／（印）（印）

欠損あり。

二〇〇 岡雄詩箋

二九・五×六七・四種、薄茶色料紙。岡雄は不明。文中「湘水梅諸」が曾我の梅とすれば、小田原藩士か。

〔男〕  
□翠園奉呈精里先生

相陪山斗尊、何幸脱塵喧、和滿春風坐、教知時雨恩、庭見銜鱸雀、人皆立雪門、吾徒蒙末照、聊此問淵源

森煥拜上

冒雨赴侗菴先生聖堂觀楓之約、支事到遲、既日之夕矣、猶得追陪、詩以奉謝

二〇二 松木魯堂詩箋

夫子牆辺介葉丹、仰高門畔与君看、聖堂之美楓林富、日暮西昏闕見難

二四・三×五五・五種。松木魯堂は一七四既出。天保二年（一八三二）二月作。引首印「藏宝／於身」、落款印「秀／実」「文雍／氏」。

是日也、携乾檮奉呈先生、有詩曰、湘水梅諸天下無、投余勝獲一簞珠。至若三四、所謂、虞藏方奏和羹績、調變欽君輔廟謨。非雄之所得居也。敢賦以避尊者之礼。

梅諸豈復足称珍、冬月羞君儲待類、倘問和羹臣職事、周官所載即蓬人

（印）

政 岡雄再拜具紳

政 岡雄再拜具紳

江城一告別、索居十余年、年々長相憶、道路幾山川、髣髴茶溪水、艤舟垂楊辺、有人綽如玉、顧我眎新編、新編真広博、欲説説無縁、拱手叩玄解、不答嘯青天、所思含未述

二〇一 森煥詩箋

二九・三×三七・六種、薄茶色料紙。森煥は不明。初行冒頭

辛卯仲春奉寄懷侗菴劉先生

松木秀実拜具／（印）（印）

驚起一枕眠、茫茫猶夢境、清容在眼前、端坐望檐外、曉雲梅月懸

二〇三 松木魯堂詩箋

二四・一×三四・四種、二枚継。四周を朱枠を施した料紙を使用。次韻した相手の甲斐庄恒山は、楠木正成の弟正季の子孫と称する幕臣甲斐庄家の人間であろう。古賀精里の門人の甲斐庄荘五郎と同一人物か。

祖先高德自兼三、万古忠精天不曇、講武修経伝事業、延師接客見包含、四時行楽湖山勝、一社風流花月談、戈戟何須太平日、文章無対昔人慚

次韻甲斐庄恒山君

乞正 松秀実草

二〇四・二〇六 北沢観書簡〔古賀侗庵〕宛、〔文化九年（一八二二）六月七日付〕

一五・二×（五六・八十三・九）種。筆跡・料紙から二〇六と一具のものと判断し、紙の替わり目を」で示す。北沢観は不明、精里門の久保田藩士北沢隆蔵と同一人物か。文中、昨年「仲安」（佐賀藩医古賀朝陽か）からの書簡で、父上が対馬にお

いて朝鮮通信使を接迎したと知った、とあるので、その翌年のものと推定した。

別来既逾一紀、道塗綿邈、闕然絕音耗。伏惟、動止清穆、闔門膺福、每憶旧遊、不勝感想。当僕從事 令尊、君年小幼志、未忘嬉戯間出、然岐嶷異常、誦說如流、以為後必成大器矣。而謙卑退讓、不敢以了々自処、非世所謂神童之比。譬諸松柏之質、深養其根而遠達其幹、以成棟梁之材、猶未足以喻焉。僕嘗窺察于榜内竊喜曰、精里先生有子、長松下有清風、古人不欺（我ミセケチ）吾。僕久廁門下子弟之列、薰陶教化、沾被德沢。感戴之至、刻骨銘心、終身弗忘。但資質劣弱、不能称指教之敦、徒深愧畏耳。材質若 君、必当大成、常欲聞其進学所至、或承一言之賜。適有杜生半千者紀州之客、問之則旧嘗遊弘文館、屢謁門下云。乃得審文履欣慰、繼訊德業。客称揚其崇広、仰歎不置、則」不違鄙見所鑑、果成大器矣。今不獲待下風而挹余芳、但願捧新著高作冷眼。覽之質雖雕朽、亦有所振起、不靳示及幸甚。客歲得仲安書云、令尊接待韓使于对州、則山海道遠、極勞思慕。帰期在何日、新正僕郵致書、問于門下并仲安、不知達否。時下溽暑、為道自重。頓首再拜



六月七日 辱知生北沢親再拜

大時傑古賀君（梧右）

二〇五 森樅堂詩箋

二〇・六×四六・一糶。森樅堂は白河（後に桑名）藩士。

微官責疎堪曲肱、午陰眠足夢懵騰、看書隨意過難字、曝背從容  
對野僧、石洞雲歸迷花影、林溪雨漲失河稜、家貧常弁春衣晚、  
自笑山妻剪夜燈

竹屋松窓容膝寬、醉來試步倩前欄、雨過四野皆春色、雪殘群山  
多暮寒、地僻時鷄時換漏、年凶慶麦僅當餐、稚兒字語言尤好、  
為補家訓至夜闌

正 森靖拜

為御一笑■一兩首奉入 清覽候。御序ニ付者、御叱正奉仰候。

二〇六 二〇四と合体。

二〇七 筑波有親詩箋

三〇・〇×七四・四糶。筑波有親は堅田藩士。文化八年（一

八一）、「精里門下の次期藩主堀田昌六郎（正敦の子、後の正衡）  
らが精里の對馬下向に際して送別詩を贈ったのに便乗したもの。

先生者吾 世子之所師事也。而聞今茲辛未春二月、奉<sup>（台頭）</sup>白命有

對州之役、世子及我二三同僚者、共賦詩以送。雖（微躬

未得函丈、每在世子之側、聞<sup>（平出）</sup>郁々先生之芳声。所謂二三同僚

者、皆是詩賦討論之友也。今也、見送<sup>（平出）</sup>先生諸作、敢賦詩一律、

因彼同僚以奉壯行色云。

聞說大儒茲調珂、昇平橋上唱離歌、書紳最敬<sup>（台頭）</sup>朝廷命、慮戒何須

明世和、程半<sup>（台頭）</sup>皇都揖人士、行浮紫海棹滄波、往來非是優游客、

定識余才賦興多

〈堅田藩〉筑波有親拜

二〇八 駒澤廉書簡（古賀伺庵）宛、某年二月一日付）

一七・〇×二六〇・二糶、四枚継、薄茶色雲母引料紙。駒澤

廉は篠山藩士。幕末明治にいくつか著作を残している。引首印

「服卿」、落款印（落款に重捺）「廉印」。

（印）

尊復由青山生達、兼以生之言、仰審履候(平出)方福、貴塾桃李依旧益藜藜、甚慰翹緒。始得伝致也、疑其封筒之太大。便遽爾解緘、則百言瓊瑤、二事煙袋、錦玉競色、光彩赫燦然、奪人之魂目。賜正之別封、依旧若大寐之頓覺。憮然良久、更復訝蒙寵厚之至。於斯乃不自獲為心跪、而奉誦之五六、復而后纔得說過。非敢謂文之贅牙、以紳勢自在、變動如神、非村儒鄙生之所慣見也。既而稍及領高意(平出)、誨諭淳篤、慰勉懇到。出入口之、起居手之。經旬涉月、翻更停滯、拜附呵々祈寬宥。如煙袋之賜、里諺所謂、自僧寺施贈於檀越者非耶。恐卻之具、鄙芹之獻、不禁辱謝、愧汗寔多。(弟子)不敏、以居是邦不能事其大夫、在是家不能睡其族戚、善見罪唯。故深枉軫念、忝煩頤旨、感荷々々。独記刻我之肝腸而已、不知所以陳謝於帳下。郷日議論如沸羹、幾將為飄飄浮浪漢、丐憐於人家門前、而嘗飢寒之苦辛。幸遇吾侯之無私、七八之交、得復故常。雖然余燼猶未消、策謀周至、欺瞞以術、控告無途之可由、撲滅曾不得術耳。終併義家以供人之玩弄、坐而以遲命。已而重垂照察、方挫衆計之鋒、頗開禦禍之路、千里之遠、賤奏之疎、頓不能脫厄網。庶不至為几上之物、伏請勿置於清懷(平出)。頃所賜尊序、前便如所奉、(廉)稟姿之偏急、重複煩勞貴念、死罪奈何償之。別封賜正之拙字、

初欲將竟憂懼、而后淨書。顧念孟德何人也、橫槊尚賦詩。吾輩縱令不能當於乱世英雄、寧為傲婦女子之態乎。偷間寫以攙入、既以付乎書策、匠實非恩惠之所贖(平出)、而何如著作。固非不才之所望、誠是賴函丈之運斧与染毫。伝而夸示諸雲、仍非止(廉)、与外翁外婆死且有心將結草。更矧降殷懃、豈秃筆所能竭。從(愚弟)還于藩、幸又有所相識、銃隊卒役乎邸、再託伝通有人。因而疇昔所冀韻文、雖闕耳且長、敢欲淨寫於函上、以試復來之心。倘覘雌黃(平出)、彼銃卒敢走于門下之日、蒙投下則幸殊甚。今也、一之日弊發意比再報之達知、二之日栗烈氣寒逼人。伏祈加餐加衣、順時珍齋。急景事劇、寸間氣倦、心緒不能佳、無禁詳報、統冀垂諒(平出)。

再奉復  
博士古賀大先生侍右  
復月載生魄

〔門生〕駒澤(廉)(印) 怔嘗頓首拜

二〇九 駒澤廉書簡(古賀伺庵)宛、日付なし  
二七・六×一五・八種(紙継なし)。同前。印(落款に重捺)

〔廉印〕

恭致書博士(平出)古賀大先生(平出)之 塾下。自山禎之逝、山陰僻郷之才子、

曾不得以請教(平出)之字託伝通之人。時雖非無往來于都下、藩之僚輩

得殷洪喬之怒、亦不可知矣。以故欠脩候有歲月焉。不敬之罪、

廢学之責、逃無地。願塾中諸先進為作先容、多々陳謝。〈弟子〉

近念債生妣之宿意、集外公外婆之遺文、竊号詒厥施松之集。非

謂敢能之学焉。因自製序跋小伝記註、極知文字之斡旋多繆誤、

議論之商確落偏愛之私。乃雖切願欲 大手之斧止。道之云遠、

空惆悵而已。豈能得致之 絳帷之下哉。頃遇藩池見生、々云、

嚮在役之日趨於 門塾、時得仰光範(平出)。因所請木村長州之函贊、

雁魚致達。爰問便之所從、而始得知本邸青山生亦前既登於

高門。顧者得便之遲、無乃交接不弘之所致乎。悔忤兼至、從而

奉讀之、一誦三嘆、愈增泰斗之想。因遂使託青山生、敢致之左

右。伏請不厭蕪穢之長、肯瀆錦繡之筆、以少賜潤色、稍則至可

以誦矣。而敢淨書之日重複有得煩(平出)一字於卷首、則瓦礫生輝、枯

朽作皁云爾已乎。寔不朽公婆与生妣、既朽之骨於地下、遂以得

建子々暨孫々、吾家之指南於後世也。惟不知所以報之而已。于

前于後、今日蒙先生之惠庇、豈何有限乎。時丁授衣、早寒侵人、

冀為後生 自玉。拙筆不盡意、臨楮不禁翹企之至。

二一〇 頼山陽書簡(写)〔古賀穀堂宛、〔文化六年(一八〇九)〕  
某月某日〕

二七・〇×二二〇・一種、四枚綴。穀堂による写しか。『頼山陽全伝』によれば、文化六年一〇月二日、出府の途中、山陽が塾頭を務め始めた菅茶山の廉塾に穀堂が立ち寄り、初めて対面した。これはその後江戸に送られた書簡で、日付はないが、文中に自分の年齢を三十と記すので、同年内の発信と推定した。『山陽遺稿』巻一巻頭に「答古賀溥卿書」として収め、「至詞藝之論……豈独経術哉」が削除され、細かな表現(助字など)も刈り込まれるなど、全体に簡潔になっている。

安芸頼襄在備後菅氏塾、謹脩書致諸肥前古賀君溥卿足下於江戸。足下之從駕而東也、辱問家公、因得以相見。又辱賜書、当速奉答而因循不果、今已來此。乃拳廢事、幸勿修久闕之罪。蓋尊大人与家公有兄弟之誼者、誠如貴論。而足下才識、亦僕所夙慕嚮。相見匆卒未几、万一、奉別之後爽然自失。而直宿偷閑遺書而行、何足下之拳々於僕哉。奉讀數回不能自積、文之敏捷縱橫、在足

下不足多奇。即意氣動懇、一見相許、使僕盡言無諱。僕為敢有  
度哉。至揄揚之語、每說之愧縮不自容。若是僕所不欲聞也。若  
夫所論儒習之陋文士之癡、乃古今通患而此間為甚。所謂抗傲之  
氣勝、而兼容之量乏。可謂深見時弊矣。僕嘗原習弊之所由、其  
來遠矣。蓋西土以科第待士、士風雖輕躁、各得行其所學。本  
邦尚古亦有選士之科。而中世以降、官位從族文儒限職。菅石府  
之大用、當時以為非常之舉。及至天下用武之時、唯大江広元藤  
原通憲諸人、以事業著。広元之為庁使衛尉也、月輪氏議其非文  
家進途之例。是亦可以見時情矣。至室町氏以來、封建漸成、等  
限益定。文學之用、非侍讀待問、則通信達志与僧道卜祝為伍、  
以獻技於人主前而已。慷慨之士、不能一展其氣、則寧故放浪江  
海、跌宕詩酒、一往而不返。否則故立異言、鼓撼一世以自快。  
世之君子、從而攻之、內相搏擊、其衛道之志、不如其好勝之心。  
適使武人俗吏傍觀嗤笑曰、六經者爭論之資耳、於天下國家毫無  
所益、間或諧以治道、則其所陳列、往々不量情勢、不酌緩急、  
而終於不可用。是時勢之流、相激使然。足下以為何如也。至詞  
藝之論、未可遽尽。如所奉某氏、僕已与之交、寧議諸面不欲議  
諸背。藉使有可議而視之三都、時習則不啻膏壤。士風之弊豈独  
經術哉。方今 帥府藩國並称右文。祭酒林公、以大有為之資主

海内学柄。諸老先生、左提右擎務同道德以資治化。凡儒臣之信  
於其君相者、一言有補沢被生民。誠志士自奮之秋也。溥卿足下、  
以名儒之胃在幹事之職。所謂年少才富、何為而不成、何求而不  
得者。僕以為足下之謂也、異日一洗因襲之陋、間執天下俗士之  
口者、非足下即誰乎。近歲辺徼有警、物情不安、尊藩正膺方面  
之寄、折衝禦侮、固有待於文武之才。足下其勉之。僕弱冠亦志  
於經世之学、好談兵、謂高名可唾手取。已而病故纏牽（卿ミセ  
ケチして傍書）、客氣尽消。每思往事、未嘗不汗背。自知（故  
ミセケチして傍書）質弱才疎、不適世用。幸以繼家有人、得優  
游自養。菅茶山先生以父執誼、延僕其鄉塾、使督之生徒。在僕  
誠為得其所、將勉以酬知己之意。抑僕年已三十矣。既不能克  
其家、又不能報其國。每对經書自顧忸怩。海内交游之士謂僕何  
哉。唯足下亮察之。足下謬聞、僕精於本邦制（制補入）度史譜  
之学、欲觀其所著。僕豈精焉哉。特好之云爾。如所謂四寶、僕  
身正備之矣、而好之不已。病魔以來、文章自遣、最慕賈生司馬  
子長之所為、竊欲擬之。嘗說常藩大典、苦其浩繁、又病室町後  
載籍紛沓難得要領。因不自揣、断自源平氏以至於当代、家各紀  
之。名曰外史。又疏治乱之概制（この間、度ミセケチ）之略、  
兵食刑法之沿革。名曰新策。自便於觀省、非可視他人者。家公

志在經業裨國、觀僕所為為空文無用。故不敢進、々亦不省焉。

相見之際辱見問及而敢不進者、為此也。雖然傾瀉至此。此瑣々者何必秘為、當竟乞正。承足下亦有志筆削而不果。夫古人著書出不得已、文章事業自有輕重。足下為其重者、僕則為其輕（この間「重」抹消）者。量力從事各得其宜也。至最僕自愛期以了天下未了之事、又將為之解僭妄之嘲。則雖僕所不敢當、抑何拳々之（この間「至」抹消）至此乎。僕雖罷駑、焉不自力哉。顧恐不能副足下之責、徒增足下之笑耳。唯足下不棄而教誨之。襄謹再拜。

二二一 天爵老人書

二八・八×三一・六種。天爵老人は不明。『唐詩選』卷七所収、王昌齡「送別魏二」（本文は三に誤る）を揮毫したもの。印記「浪舟／軒」。

醉別江樓橘柚香、江風引雨入船涼、憶君遙在湘山月、愁聽清猿

夢裏長

唐人王昌齡送別魏三詩

天爵老人蘭谷書（印）

二二二 服遜詩箋

二五・四×四四・七種。服遜は不明。第二首第三句第四字脱落か。

冬日陪臥婦亭盛譙（分韻得麻）

良觀舒幽滯、留歡到晚鴉、清筵盤饌贍、燕坐篆香斜、和氣隨論緒、春機入筆花、応知仁里化、余竊下風加  
林壑平生意、故鄉千里餘、臥游亭足、婦夢画中嘉、江樹春雲擁、西風遠嶺遮、今瞻奕葉美、翰苑有光華

〈服遜拜具〉

二二三 諸葛中如詩箋

二四・四×三五・九種。諸葛中如（二八〇四―四〇）は江戸の漢学者。印記「諸葛／武印」「興／卿」。

借書

借書元一痴、還書也一癡、斯言殊不爾、我言々者癡、雪窓靠机夕、風簷剪燭時、此時如不讀、何時是讀時

諸葛武侯／（印）（印）

二二四 栞楼主人詩箋

二八・八×二三・七糎、薄茶色料紙。栞楼主人は不明。引首  
印「栞楼」、落款印「辰／保」<sup>（？）</sup>「孔／厚」<sup>（？）</sup>。

（印）

朝游夕泳窓書、只要今吾勝昔吾、未識此間真氣味、直縁聖処少工夫

栞楼主人（印）（印）

二二五 辻元松庵詩箋

三一・二×二一・五糎。辻元松庵（二七七七一―一八五七）は  
幕府医官。「古賀先生」は侗庵または謹堂だろう。

古賀先生侍婢感寒発、驚延へ余診治、戯賦一詩奉呈

脈々春寒襲小梅、通宵生怕瑞配摧、人間非亦無靈藥、医得水肌玉骨回

松菴再拝

二二六 牟田昭詩箋

二九・四×三四・一糎、薄茶色料紙。牟田昭は一九六・一九  
七に既出。文中「庚寅」は天保元年（一八三〇）。『詩鈔』に侗  
庵の答詩（七言絶句二首）がある。

歳旦

忽值人間四十春、今年星紀乃庚寅、此生多幸得高枕、吾道不非  
独善身、野草江梅新歲月、市楼駅舎旧風塵、晚来村長叩問過、  
咲我逢迎著漉巾

人日

人日菜羹呼客嘗、立春隔在上元行、書窓冷淡何攸愛、更有寒梅一朶香  
叱正 牟田昭拝具

二二七 荒井緑橋詩箋

三〇・三×三三・八糎。荒井緑橋（一八一五―一六二）は淀藩  
儒荒井鳴門の子、昌平坂学問所で学び、父の跡を継ぐ。癸丑は  
嘉永六年（一八五三）、ペリー来航を詠む。引首印「足矣」、落  
款印「臣／公履」「緑／橋」。

（印）

聞言夷寇在明年、覆轍瞭然阿片煙、震勢消魂鏡車礮、巧機警眼  
火輪船、廟堂建議若何決、黎庶倒懸爭不憐、愧我杞憂徒惜々、  
未將一策報堯君

癸丑冬書懷 綠橋荒井公履稿／（印）（印）

二一八 白石義詩箋

三〇・三×六九・一糧、布目型押料紙。白石義は山形藩士。

庚辰は文政三年（一八二〇）。

春日

一場午睡夢醒時、次第東風釀暖吹、書屋今來春不淺、池塘芳草雨如糸

曉瓮山形

斗柄南回天一方、单衣直犯曉風涼、陰情得得尋詩去、一刷朝霞惹得長

庚辰首夏上慈恩寺浮図、時天色空濛

藻水塔之東、湯峯塔之北、塔上縦日時、塔外雲一色

右三首謹奉乞（平也）大斧 羽 山形藩／白石義拝

二一九 加藤梅崖詩箋

二九・〇×三四・〇糧。朱色刷有界飾粹（二〇・五×一三・

二糧）料紙に記す。加藤梅崖（一七八三—一八四五）は昌平坂  
學問所に学び、丸亀藩儒となる。

得西字

一川楊柳子規啼、人去春臺西復西、却怨前途馬蹄疾、東風千里柳萎々

加藤穀拜具

二二〇 岳広詩箋

同前の料紙に記す。岳広は不明。内容からすると西国の藩士か。

得関字

駟路垂楊綠耐攀、折來擬作大刀環、勿言万里西州隔、潮水直通赤馬関

岳〈広〉再拝

二二一 玉潤元寔詩箋

二九・五×六九・六糧。落款「大邱」は玉潤の字。閏七月は

天保六年（一八三五）。『平偈齋稿』（一九三三刊）卷二に収める。

異同は、前書「者」ナシ、本文「僊家豊穰」を「仙家豊穰」に

作る。文中「飯尾村」は阿波国麻殖郡の村。

澗。

閏七月風雨後、林居陵見過、因問郊甸之近況、言、村々莫不

蒙暴害者、但其所居飯尾村近隣幸無恙云、賦此贈之、得取字

居陵隱士自西丘、相逢先問農畝秋、憶昨疾風暴雨甚、林木怒号

水逆流、大関之声天地震、何来百万擁貔貅、穿壁倒墻城欲拔、

奔走士庶懼王侯、兵子劫略千村落、戎馬蹂躪幾田疇、々々宛作

戰後況、禾稼倒尽粮秀稠、水高魚蝦欲緣木、潦深陸地可行舟、

闔境凋弊堪慘目、蒼生難免凍餒憂、応同羸政肆苛酷、虎狼横行

天下周、誰知別有避秦地、居陵隱士此優遊、言是曾無風雨暴、

滿野黃雲占豊収、黄髮垂髻怡然樂、鷄犬一村桑竹幽、願使僂家

豊穰及四境、救得疲民饑氓多九州

大邱

二二二 玉潤元寔詩箋

二九・一×三九・三種、薄茶色料紙。戊子は文政一二年（一八二八）。『半偈齋稿』（一九三三刊）卷二に収める。異同は、

前書「夕」を「夜」、「勅」を「綸命」、「華園」を「妙心寺」、

本文は「謁」を「拜」に、「邇」を「跡」に、「興動」を「牽輿」

に作る。引首印「南海一珠」、落款印「賜紫／沙門」「寔印／玉

（印）

戊子除夕得山字、余今春奉勅視蒙華園云

寒鏡臘尽掩禪関、回憶春風入帝寰、雲路九重飛 鳳詔、天門只

尺謁 龍顔、誰嘲隱士曾隨駕、自愧支郎未買山、心邇漸將魏闕

遠、江湖興動綠楊灣

斤正 〈寔〉玉潤艸／（印）（印）

二二三 恬齋詩箋

三一・六×二五・二種、薄茶色料紙。恬齋は不明。引首印「蘆

中／人」、落款印「恬齋」。

（印）

討春遊屐向何家、踏遍紅隄一簇花、知是村童淡生活、黄茅束得  
壳蘆芽

恬齋（印）

二二四 李文哲筆談斷片



順に、二九・二×五・一糶、二九・〇×八・一糶、二九・〇×七・三糶、三一・〇×一九・四糶、二九・一×九・八糶、二九・〇×七・一糶、二九・〇×七・八糶（二枚継）。台紙三枚にそれぞれ三・一・三枚の紙片を貼付して、うち最初の三枚と最後の三枚に鉛筆書で順に1から6までの数字が記される。その順に翻字する。内容は、文化八年（一八一二）対馬で行われた朝鮮通信使への迎接のとき、中官李文哲（菊隠と号す）と精里との筆談のうち文哲のものだけを保存したのか。精里の筆跡は三―2によれば菊隠が本国に持ち帰ったのだろう。

一―1

俄 兩使相見、貴什三回五説、讚歎不已。

一―2

欲得 公之筆蹟為柱聯、紙本已具、而炎熱如此、不敢仰煩耳。

一―3

相逢之晚、可勝恨歎。日氣雖熱、故人清風我心則涼。行期雖促、

少留攄懷幸甚。／菊隠

二

僕有病先退、大違体貌、悚然之中、尤切悵然。此呈十片紙、即

我国一品大臣之筆、而名位德望文章有名於天下。雖本國之人、得之為宝。茲以奉呈、以表巴々情。晒収如何。書不尽言。

菊隠

三―1

向見 公之遊以酌菴詩、愛玩不已。留得其一以為篋笥之珍藏矣。

今接（平出）盛儀、實慰渴望。 菊隠

三―2

僕収 公之筆談、以為西還後時々替面之寶耳。

三―3

姑闕和章、誠如 所示、萍水相逢、以筆代舌、足可暢懷、何必

役之章句間哉。 菊隠

二三五 土屋壺関詩箋

二五・〇×五五・三糶、薄茶色料紙。土屋壺関（二七七―

一八一九）は精里門人、会津藩士、日新館教官。印記「朗／印」

「子／潤」。

九月初吉陪遊西尾（平出）侯橋東園分韻

橋東恰好寄吟哦、野色漸含秋色多、綠水不流今古恨、白鷗空駐

有無歌（園在于／業平橋畔）、竹圍園広人迷路、藻密池清魚起波、

何用五侯勞款待、先生到处即行窩

其二〔園中有田十畝種稻粱、想是／賢侯欲使子孫知無逸也、故及之〕

別業秋深野水涯、適陪杖屨此追隨、過橋漸覺埽幽邃、攀閣初知  
称絕奇、稼穡艱難元寓意、田園雜興豈無詩、小亭到处堪流憩、  
春浪飛雲繪是宜〔春浪店、飛雲亭、皆在園中〕

土屋朗拜具／（印）（印）

二二六 小笠原昌詩箋

三〇・三×八八・七糧、薄茶色料紙。小笠原昌は不明。天保  
七年（一八三六）の作。

穀堂古賀先生、<sup>（平出）</sup>佐賀侯之儒臣也。幼而聡悟篤学、博綜秀朗、  
才弁能容人。其英名擅海内。蓋役于東都、来往数十年也、  
即情交論、心尤厚矣。先生被登庸為内老、今茲天保丙申  
春西帰、秋九月十六日病卒。聞訃怨傷之余、聊賦一詩奉哭  
肥山鍾秀出英雄、文入韓家詩亦工、昔日交情已成夢、歎嗟空望暮煙中  
小笠原昌拜具

二二七 玉潤元寔書簡（古賀精里または侗庵）宛、日付なし

一八・四×五二・四糧、二枚繼、朱刷山水下繪薄茶色料紙。

後欠。玉潤元寔（一七七一一八五六）は臨濟宗妙心寺派の禪  
僧。京都の人、美濃瑞龍寺の隱山惟琰の法を嗣いで、阿波藩主  
蜂須賀家菩提寺である徳島興源寺住持となる。二六六・二九〇  
と関わる内容か。各紙奥下部に「一」「二」とあり。

甚矣寔之失誼於 左右也、向者辱 答教、副以寧樂布一端、不  
意 盛貺、否德何以膺發、感懼交集。爾後当亟修書奉謝、而因  
循倏踰兩歲。蓋方外僧流、雖無家眷之累、所度弊徒、小師視俸  
骨肉。一昨年来多罹二豎之祟、又有雲遊中天没者。以故居恒怏々  
不樂、無意操觚。且有宮造、增一段之喧嚷、魯人之臯職此之由。  
伏惟 亮鑑莫罪疎闊。即日春霖料<sup>（平出）</sup>文侯万祉、鱣堂晏然祝々。所  
賜白布、既已裁縫、夏月服之。〔寔〕也怯暑如酷吏、便千里垂  
念之及、宛如使人置身於清風中也。謝葛能尽。昔者昌黎韓公  
在潮州也、与僧大顛交往来晤語、臨去留衣服為別々也。僻在海  
曲、無由一拜 儀容（後欠）

二二八 高尾養書簡（古賀侗庵）宛、日付不明、文政七年（一  
八二四）頃

二一・七×二七・〇糶。前後欠。一六四に同じ体裁のものがあり、石碑についても触れているので、それと一連の書簡と見られる。

(前欠) 「」書中「」歟。余小人実不遜、非百喙所得辞也。

〈養〉本欲為亡親尽衷悃耳。長者洪量、幸垂憐焉。亡親三回忌辰已過、未得建碑。〈養〉夙夜念之慨歎悲傷、不知所為。独祈長者再考碑文、以見惠賜。又反以為、〈養〉所前言或頑愚也、則当謹用前文歟。唯俟 裁下。參商相隔、不能踵門。荆謝聊修此短牋、附以片芹。万冀 丙照。(後欠)

二二九 山寺常山書簡(古賀侗庵宛、某年六月二十四日付)

一八・〇×五九・四糶、二枚繼、奉書か。前欠。山寺常山(諱久道、通称源太夫)は松代藩士、一五三―一五五既出。末尾左下に小字にて「左空」とある。

(前欠) 不為魯定梁惠者、殆少矣。然而雖間有以斯道進焉者。其人固不及孔孟、則其說之不入、不亦宜乎。於是乎、苟後義而先利之徒、駸々乎進而用事。若夫捨本而走末、則勞而無功。況

於不奪不庄之俗、日積月釀、至於今日乎。當此之時為人臣者、

知而不言、不忠也。知不行而言、不智也。寧失不智、豈可不忠乎。天下之為人臣者、其麗不億而直言時事、或格人主之非、

政教一新、或触人主之怒、身遭戮死者、蓋有之矣。我未之見也。

抑亦狐疑于忠智之岐而然也乎。(久道)嘗聞之曰、葵不恤其緯、

而憂宗周之隕。以故、每致思于此、食不下喉、淚不能禁。焉得

起屈。子於地下而与之語哉。既而意謂、大樹將顛、非一繩所維。

而 天下之大事、非陪臣之所可敢議也。為人臣子者犯此忌諱、

是亦真非洞見不忘之義者也。於是又說記文一過、且質之聖人之

言曰、居下位而不讓上。又曰、不在其位不謀其政。又曰、以修

身為本。由此觀之、益覺前言之非。爾來又讀之愈久、但覺意味

深長。寔是<sup>(台頭)</sup>大先生鴻恩之一斑也。敢謝 大惠。仍并錄前言、伏

乞 折衷。時下炎暑酷烈、伏惟為道 自重。奉謁未由、臨楮

惘々。不乙  
謹上

大恩師紫浪古賀夫子大先生執事

六月廿四日 門下生山寺久道頓首再拜白

\*第二冊

伺庵・謹堂宛書簡を主とするもの。

二三〇 桜井弘書簡（古賀伺庵宛、某年二月上旬付）

二一・〇×六二・二種、画仙紙風。桜井弘は不明。

奉呈（台頭）伺菴先生執事

〈弘〉不佞嘗聞天下有精里（台頭）先生者而維持此文、有賢子穀堂（台頭）伺菴

二先生者而光其業也久矣。嗚呼、何聚美于一家如此。〈弘〉常以謂、

男子苟為学、得見是人而死則足矣。而藩法禁私出境外、未能負

笈於千里。忽焉及精里（台頭）先生之即世、喟然嘆此身之不幸、庶幾日

益甚矣。其祇役于東都也、不敢愧形穢、遽謁門下。幸先生（台頭）不棄、

遂得叨弟子之籍。無何穀堂先生亦出于東都。於是〈弘〉多年之

願一朝而尽得焉。而獲隴望蜀、猶恨其為俗冗所迫、不能旦夕。

不幸会先妣之病、急遽歸家。今也不可復得而庶幾也。告先妣之

病甚急、狼狽就途、是以不得拜辭門下、為罪大。歸家則已距先

妣之死四日、別一年余而初婦、而空謁其虛位。哀痛裂心亦不能

速奉起居、且謝罪因循至于今、罪又甚。〈弘〉不佞之於先妣、不

作粥嘗藥、既不能于其始、竊欲勉所業、少贖罪于其終。而忽々

在寒鄉、未嘗一日不南望庶幾也。敢奉尺一妄瀆下、伏願先生（台頭）

録其罪而憐其情。二絶写懷敬奉呈、賜不唾棄幸甚。万々垂照

二月上浣 桜井弘再拜敬具／（印）「井弘／之印」「伯毅」

二三一 桜井弘詩箋

二一・二×六九・九種、二枚綴、画仙紙風。二三〇の書簡に

言う「二絶」であろう。印記「井弘／之印」「伯毅」。

奉寄懷（台頭）伺菴先生

歸心漫喜拜慈顏、一片孤墳不耐攀、從是龍門難復望、沈寢空臥雪中山

江城煙靄雨余開、柳外長橋晚訪梅、深夜山中寒似裂、屋梁落月夢空回

桜井弘再拜／（印）（印）

二三二 志賀宜親詩箋

二一・三×三七・〇種。志賀宜親は米沢藩士。一七四松木魯

堂書簡の「志賀孫太郎も一首差上申候」とあるのがこれか。引

首印「穆如」、落款印「志賀／宜親」「至卿」。

（印）

羈官人々老、徒使夙心遠、簷柳懸愁乱、塞鴻背夢歸、春霜侵華

髮、夜月透寒衣、悵望山河遠、不眠至曉暉

門人日野和煦録旧製

寄呈<sup>(合題)</sup>侗菴劉先生之帳下

志賀宜親敬具／(印)(印)

哲萎屈指幾春秋、写鬢依然鎖古丘、不独峴山碣墮淚、尽令泮水士含愁、闕文韓客称難韻、瀆武豊公較可羞、日暮彷彿不能去、鳴鳩樹外雨悠悠々

二二三 志賀宜親詩箋

二八・〇×四二・八糰、薄茶色料紙。同前。こちらは出府時

の作品であろう。引首印「穆如」、落款印「志賀／宜親」「至卿」。

(印)

登樓東北望、客思浩難尋、碧海春雲遠、青山暮雨深、看花非故

園、聞鳥有婦音、欲夜魂華贈、徒慙吏隱心

恭呈<sup>(平出)</sup>侗菴古賀先生之左右

志賀宜親敬具／(印)(印)

二三四 日野和煦詩箋

二八・七×二二・九糰、浅葱色手書野入り料紙を用いる。日

野和煦は二三六によれば伊予西条藩士。

精里(この間、精ミセケチ)先生墓前作

二三五 日野和煦詩箋  
二九・一×三二・八糰。三首一字アキにて記すが、翻字では改行する。

奉挽<sup>(台頭)</sup>精里先生三首

忽駭訃到天外翻、哲萎不堪淚行繁、失燈暗夜迷岐路、盪水(こ

の一字補入)清晨欲竭源、遺墨淋漓眼前愴、恩規髣髴耳中言、

何料一朝盃酌別、西州万里奠蘋蘩

涼秋八月寂田園、況復心喪感至恩、对月浮雲蔽桂樹、哭風落葉

埋籬根、招魂空誦楚人誄、伝火或疑蒙叟言、欲解卑官廬冢上、

双親垂白在孤村

<sup>(平出)</sup>幕府重儒応微僻、泮宮育士膺崇尊、壁間鮮彩衣冠像、稿裏雌黄

点抹痕、稍告四隣頒奠物、尚辞諸客閉衡門、琴書塵蔽三秋晚、

唯有鳴虫繞砌垣

門人日野和煦録旧作

五十六齡吾老矣、誤身文籍不真男、当從誤処求通処、道味如館比旧甘

二三六 日野和煦詩箋

庚子正月叙志 日野和煦／(印) (印)

三〇・〇×五七・九種、薄茶色料紙。引首印「放情／丘壑」、落款印「日野／和煦」「公春」。

二三八 日埜晋詩箋

(印)

一九・〇×五一・五種、薄茶色料紙。日埜晋は仙台藩士か。二行目下部欠損あり。

学士春秋於我低、才高業広徳難齊、托児千里洋林側、道老一官

滄海西、論弁快明甘摺伏、文章変化巨端倪、吾思賢伯兼豚犬、

頻冀艤舟向茗溪

右奉寄懷侗庵古賀大儒宗

群玉山頭東海隅、鰈魚之子類□瑚、恭呈左右何相怪、粒々仙風贊碩儒  
此物吾藩牡鹿城、金華近処石津生、世間多類君無棄、東海紅珠  
伴月盈

〔西条日野和煦再拜〕／(印) (印)

右古賀<sup>平</sup>侗<sup>山</sup>堯先生帳下獻鰈魚子、因賦呈

仙台 日埜晋拜

二三七 日野和煦詩箋

三〇・六×一六・九種。庚子是天保一一年(一八四〇)。天

二三九 佐藤徳裕書簡(古賀侗庵)宛、天保四年(一八三三)

明五年(一七八五)生まれとわかる。引首印「醸泉」、落款印

九月一日付)

「半／隱」「和／煦」。

二七・一×七七・七種、二枚継。佐藤徳裕は不明。

(印)

佐藤(徳裕)頓首再拜古賀<sup>平</sup>先生<sup>山</sup>執事、(徳裕)幼而多病、又

不幸無兄弟。是以特蒙父母眷々之恩、自結髮至成童、惟事遊伎誦野史、不肄生產作業。年甫二十、始知聖賢之學、從士君子遊刻意厲行、欲或得之、遂廢產業、專從事于讀書。於是得罪於鄉人。々々之視予如污穢、指目遠去矣殆浼已。《德裕》常稿自序曰、德不孤必有隣、苟德之有成、鄉人其如予何、且聞、言忠信行篤敬、雖蠻貊之邦行矣、況於鄉党乎。既而又自思曰、魯無君子者、斯焉取斯、如寒鄉之良師友而無所咨詢質正、則何日臻君子之域而積鄉人之怒哉。然幸客歲因野村叔宝之价、通賤名於門牆之下得受教誨、則曩日之患一旦冰積、志愈確學益勤。冀止生平之疑、而有得為學之肯綮、而窺聖賢之藩籬也。而其切問之可急、固在道而不在文。然夫道大矣大矣、非淺者之可一旦問而得之也。是以今將獨問文。孔子曰、言以足文、々以足言、々之無文、行之不遠。文不足以述其言而達其意、則与有其口而不能言者、何異哉。《德裕》亦嘗有志于斯。始學之也、即曾從事焉者而問之。則曰、立課設題、或日為之或月為之、連篇累牘積久而得之。《德裕》自聞此言、坐作進退心常不離於文、把筆汲々不息、久而得十數篇。自不堪其喜取而讀之、則千篇一律不過換頭改尾耳。其後而困益甚、而後取所謂唐宋八家之文、讀之則其用意立言与己之所為大異。唯言其所可言議其所可議、莫復作輕剽浮華之態而

事雕繪者、素非立課設題者之所能擬也。於是稍覺、文不外于道々不外于文。苟於道有見、則言不期文而自文德發乎文、文貫乎道何区々事于雕繪乎。雖然細論之、則此其學之々有本云爾如其為之之方、則脩德之与學文似截然為二。歐陽公曰、作文有三処思慮、曰枕上、曰路上、曰廁上。歐公此語、固言作文之一事、若兼道為言、則道不可須臾離也。造次輒沛必於是豈惟三処云哉。然則立課設題之舉、亦不可廢也。而往日觀 先生之自言、則亦有言曰、每有結構必待文思之發、而徐々為之。於是思之、亦非立課設題汲々求之比。《德裕》之淺劣、東顧西視不知所適從。伏希 先生不厭咨問之卑近、為之指教幸甚。候已屬霜降、冷信殊甚、金風侵肌。不審都下如何。伏惟 先生為道自玉。不宣

天保《癸巳》九月朔

古賀先生執事

佐藤德裕

二四〇 佐藤德裕書簡（古賀洞庵宛、某年三月二九日付）

二四・二×五九・九糶、二三・六×五九・六糶。二つに分かれてはいるが、一連のものと判断する。替わり目を「で示す。

佐藤《惠裕》頓首再拜洞<sup>平</sup>菴古賀<sup>出</sup>夫子足下。夫銘誌之著于世者、

得名世君子之言而傳之也。苟非得其人、雖有嘉言善狀不傳、是古今之遺憾也。世苟有其人、則於子弟欲誌其親者又如何哉。〈惠裕〉之先師折齋中村子卒、其配渡辺氏孤子忠順、以墓石之事屬

〈惠裕〉。〈惠裕〉曰、先師教育弟子有年于斯、人才雖不乏、未有其言信于世者。以不信于世之言表墓、安能伝於後世哉。且強

顏為之、於先師何益、特使其人負僭踰之罪也。已今世雖固有名世之君子、於先師無通家之好、又無由請其言也。請待數年得其人而後図之、亦不為遲。婦人曰、某農也某商也、某先生誌之某先生銘之。蓋聞、其人雖無通家之好、紹介得其人死者美有遺行、則君子不拒。妾之夫雖不肖、一生用力於聖學、教育弟子多年、

宅心制行不媿於人。子謂、世固有名世之君子矣。今若紹介得其人、則不亦可乎。子其図之。〈惠裕〉曰、唯願〈惠裕〉家貧族卑、無就學之資。幸因先師之教誨、得稍知聖經之可尊。然則所以報之者、只在図其不朽、而其責非我其誰歟。是以將復重於 夫子。伏惟 夫子道德文章為一世之師表、以開後學覺、來裔為任。雖以〈惠裕〉之不肖、能容不遺棄受教受恩、深懷辱知之感。先之所謂名世之君子者非 夫子其誰歟。先師不幸名不通於 夫子之門牆、固無由於請 夫子之一言也。雖然今激婦人之言、將冒昧強顏固請之。伏希 夫子憐寡婦孤子之情、辱賜一言、使先師之

名垂不朽、使〈惠裕〉終報恩之諒、何幸如之。以不腆孤子忠順之幣及〈惠裕〉之狀、敢致將命者。惟 夫子垂哀矜。

洞弄古賀夫子函丈

三月廿九日 佐藤惠裕（印「惠裕」之印）／頓首再拜

二四一 高尾養書簡（古賀伺庵宛、文政七年（一八二四）三月某日付）

二三・七×四三・〇 糧、画仙紙風。筆跡・内容から判断すると、一六四の高松藩士高尾善三郎と同一人物。印記「竹」「溪」（連印）「養」印。

新春虔修一書、想已達左右。光陰如箭、忽是暮春、暖氣日加。伏惟 高堂多福、冠履無恙、恭喜々々。向蒙 命亡父墓碣搨本、茲成敢奉呈。但其書〈養〉之所筆。〈養〉本無臨池之業、筆画尤劣。石亦近邑安治之産、石理麤醜而石工亦太拙。是汚穢大文之罪、百喙難辭也。前拜受 尊考先生之碑文搨本。書法固妙品、鑄工亦精密、則醜書拙工之搨本、實難寄上。所謂見西施之容婦憎其貌者也。然貧窶之分亦収奈之何。若後日得力、則亦当改鑄耳。幸諒察焉。寒具一筐、真野人之敬、希莞存為采。燈下草勒。



不恭

古賀季暉君哲人案下

甲申暮春 高尾養頓首拜啓／(印) (印)

中甸付)

二九・三×三七・四糧、薄茶色料紙。文中「余詞友藍渠」は梶原藍渠、名は(景)惇、高松の豪商。「屋山」は屋島、「交綏」は相引川。

二四二 高尾養書簡(古賀侗庵宛、某年正月下旬付)

二九・四×三一・〇糧、薄茶色料紙。印記「高尾／養印」。

時物維新、園林改觀。伏惟 高堂祉福累至、動履愈盛、何須筮蔡。敞戸依旧、幸勿掛念。前日得客久之答書、因亦審 尊候、深以為慰。且領鄭重温言、豈不感銘五内耶。又 君聞去年諸國多洪水之災、因垂問讚土如何。夫讚土固少水災、阿讚土予四國之中、唯聞阿多水災。讚土則七八年前連日大雨、川流汎濫、処々受其災。自(養)幼時唯此一災耳。如去年則幸、玉燭相和、時節不愆、五稼豐熟、人民安穩。已蒙 君子眷顧之深、不敢不告。寒具一筐聊伸候問之私、幸莞納之。余期後音。

古賀季暉君哲人玉案下

新正下滯 高尾養頓首拜啓(印)

二四三 高尾養書簡(古賀侗庵宛、文政二年(二八一)二月

春色日洽。伏惟 尊候動止勝常、益受嘉祉、何勞筮蔡。弊廬依旧、幸不勞遠念。屋山図は余詞友藍渠惇之所画也。屋山は東讚之一名区、故使藍渠図之、敢以進呈。然画亦為無用之物歟、又為有用之物歟。念范宣觀戴達南都賦図遂歎服、良亦有以也、何亦為無用之物矣。唯好之甚、遂留意於此、則或有相貪相忌之害。若寓意於此、則足以娛意而無其害矣。未知 尊意以為如何。今此画未精巧、實不足助雅興、唯汚 清覽、則何至論其無用有用及留意寓意之義。唯録鄙意以質問耳。既呈此図、回附其略記於左、幸亦笑覽之。撚鬚糕一封、聊表芹意。草率不宣、万期嗣啓。屋山在府城東十里許、其形似王屋、因名焉。碧海浸其三面、一川繞其陽。其川曰交綏。蓋亦以其水東西流如兩軍交綏、而退為名也。絶頂有寺名屋島、門有榜題曰南面山。半路有石壁、高十仞而自為階數十級、其理橫裂、俗名疊石。西嶺巖石奇峭、名獅子巖。其下千仞綠樹橫植、其崖其巖遙對府

城之樓觀。且龜峯葛賀等諸山、各送秀於此。東嶺則對五劍山、其劍峯窄峭刺天、亦一奇觀也。嶺下名壇浦、是昔源平兩氏相戰之地也。榜有池、名血池。戰士当洗兵之所也。又有佐藤氏之墓、其忠勇誰不感歎焉。北嶺尤峻險、又有山來厲山腹、曰長崎。東可望播洋、西北遠山競奇、其境過清、不可久止也。屋山之趣固不止於此。唯拙筆難写、聊記其概耳。

古賀季暉君哲人楮下

己卯仲春中浣

高尾養頓首拜稟

二四四 高尾養書簡（〔古賀侗庵〕宛、某年四月下旬付）

二一・四×六一・一糶。他の漢文書簡と異なり、行草体で記す。

客冬得陽月初五之尊書、久闊之後襖封尚遲、拜読三四不能釈手。伏惟 尊候玉体近欠和、有右臂右足瘦痺之患。〔養〕聞之何堪情悞。今不知已有愈否。伏冀千万保護。又書辭懇々及養之家事。聞〔養子〕告絶之状、亦為慨嗟慰諭具至。且揭示以樂天知命之義。嗚呼 君子懷我之深、何至於此。感銘永弗諼。〔養〕齡已六十三、鬚髮如雪。老母自客冬罹病、今年正月九日竟即世。往時老母存日、養以膝下。令養為樂、未知老之已至。今及喪之痛

哭、悲傷頓覺、心腸破裂。乞憐察焉。今制<sup>レ</sup>五十日之喪已畢。時又賤恙為□、數日奄々。幸有医薬救之、得不為地下人。然病余亦無意翰墨、聊修短箋以伸問安之私、附以寒具一封。幸叱留之。不乙

古賀老先生玉展

孟夏下澣

高尾〔養〕再拜

二四五 博愛心鑑序（松井元襄筆）

一六・一×三四・六糶。明・魏直撰の医書『博愛心鑑痘疹』の和刻本にある白文の序に付訓をお願いしたもの。松井元襄は不明。

博愛心鑑序

理疑於天下、君子惻聳聳懸憂言。寢則甚斬媿。仁仮鷄雛也已明（明補入）、道仮野馬也已明、心仮穀種也已明。若属拳罔既旨直人心之侶也。匪艸頭木甲孤单焯燥、尋例而埒邪。公氏魏越著系閥、以先子羈繼補部署、特告翁署鴻臚于好通家。先子以氣節締以髻亂邸、搢名公知旧矣。之留之夷之揭之車、德声与聞、尤業屹燔而執焉聞者助。戊寅冬十有一月迄己卯之禩、天昏雞没、

痘蔓為瘡、紆軫悶昏、民擁櫓輻輳、靡絕虛日也。痘豈輟瘡乎。

解膚縫合神、剖腹刮腸神、膏肓芥火神、核極延歷、矧齒如弱息歟。公擊目相任、標圖分類、訊要互之、爬梳剔摧、擢胃腎、明

仁明道明心、放也弗洪爾声重、胡爾影贖、胡爾睹俾。採擷註誤

讐言也。盜蹠弗克行貫道器乎。推平生力学、所得引決出佗衍天下、寄象鞅讐後世。謀是著龜也。祚胤生聚魏父也。称類符中

外織賈、銜鬻糞詬、豈軒輕厭弗貶也。君子曰、博愛之謂仁。公祇居焉、諦覽法方脈、已悶作所臬絕、於乎以末学諸公緒也、以

弗長沾予風也。比膺推轂而羞之。諸公（この間、誓ミセケチ）

誓御以需顧問、県川滲漉保釐、俟乎諛乎儉乎、諛蓋少公也闕公也、可少闕乎也。正徳庚辰歲孟春吉日洛陽李鯤恐悻拜書

松井元襄拜首

御句読奉希上候。

二四六 有馬長照詩箋

二四・四×五六・〇糶、薄茶色料紙。有馬長照（一七八一—一八五一）は久留米藩家老。穀室とも交友があった。

雨裏園林雨後山、泮宮一畔隔塵寰、主人曠達心如海、穆々清風

起水瀉

雨中奉訪侗菴先生（平出）

〔乞〕正 長照拝稿

二四七 有馬長照詩箋

三〇・〇×八一・二糶、薄茶色料紙。初行頭欠損あり。

〔一〕侗菴先生

碩師一代宗、名声宇宙伝、四方負笈士、龍門争後先、吾本海裔客、何幸辱周旋、卜日此迎駕（平出）、

掃舍聊開筵、維時三冬首、霜隕氷將堅、呼童吹爐火、温酒要靜便、雖無山海美、此請鄒魯賢、吾婦既在近、一別亦幾年、只願

永々夕、談笑達暁天

伏請（平出）雌黃 有馬長照拝稿

二四八 湯浅直之詩箋

三〇・七×五〇・五糶。湯浅直之は不明。弘化四年（一八四七）の作。

奉悼<sup>(平)</sup>侗<sup>(出)</sup>大先生易簧

德声宏遠數前賢、難奈死生別有天、星暗芳顏泉下隔、鑑亡遺草  
字中伝、玉樓催記詞為繡、絳帳承家筆若椽、君合無憂三世業、  
但悲為道不延年

晩生湯直之稽首再拜／（印）「湯淺／直之」〔静山〕

二四九 湯淺直之書簡（古賀侗庵宛、某年〔九月九日〕付）

二〇・七×六八・八糶、薄茶色料紙。文中「水虎考」は侗庵  
編著『水虎考略』、一七五参照。

肅啓

（直）頓首再拜、啓阻侍函<sup>(台頭)</sup>丈候過一期、仰景之情与日俱積。

維辰重陽、陰雨淒涼。欽惟文候<sup>(台頭)</sup>奧居万祉、恭喜<sup>(平出)</sup>極。〔直〕塵

務病懶、以故至不奉 徽音、伏請<sup>(台頭)</sup>照察。謹具五明貳柄、奉申<sup>(平出)</sup>

芹敬<sup>(台頭)</sup>。伏冀<sup>(台頭)</sup>叱納、不却為幸。又水虎<sup>(台頭)</sup>函若干、当因便尋献。前所

拝読新書数篇、文理簡潔難容易説、如水虎<sup>(台頭)</sup>考教卷、其 博覽所

及奇異百出、可謂曲尽<sup>(平出)</sup>形情。〔直〕曾所抄写若干、将以供<sup>(平出)</sup> 撰

輯之万一。迺間遭壬公崇、浩滔剝廬、举家攀寄天井以避、卷帙

衣器多為浸没。彼抄函亦時為水中物。同氣相求、爾敢濡滯、所

以至此。書不尽言、臨紙惶悚、伏惟為道<sup>(台頭)</sup>自玉。

大德望<sup>(台頭)</sup>侗<sup>(平出)</sup>菴先生函丈

晩生湯淺直頓首再拜（印）「湯淺／直印」署名部分に重捺

二五〇 稽山古堯書簡（古賀侗庵宛、某年九月二一日付）

二四・八×（五三・四五三・四四五三・九四五三・三）糶、

四枚から成り、二枚目に「1」、三枚目に「2」と鉛筆書あり。

替わり目を」で示す。稽山古堯は玉澗元寔の弟子。『文集』六

集卷九（弘化二年＝一八四五）所収「答玉澗和尚」に「前一歳、

尊師伝寺務子白足稽山師而告老」とあるので、弘化元年に住持

を師の玉澗元寔から継いだことがわかる。ちなみに徳島の学者・

僧侶等の詩を集めた天保一〇年刊「蝙蝠集」（初集）に玉澗が序、

稽山が跋を記していて、両者の徳島詩壇における地位を示して

いよう。一つ気がかりなのは、次の書簡で「師無常」とあって、

既に亡くなっていることを示すとすれば、玉澗は侗庵没後も生

きているので矛盾が生じる。文中「四十宮文卿」は精里門の徳

島藩儒四十宮月浪。大塩の乱に言及しているので、天保八年（一

八三七）以降のもの。印記「稽／山」「竺印／古堯」。

九月十一日〈竺古堯〉東嚮再拜、呈書 伺菴先生函文。〈堯〉幼為弘氏之徒、入教外之門。其宗固不立文字、而至闡揚其說發揮其旨、則亦不得不依文字。是所以古今列祖語錄詩偈之傳也。

故雖吾輩旁不得不攻文字。既攻之、則不得不挾師友。是〈堯〉所以唐突乞教也。嚮既奉書兩回、請潤削鄙什二編。 先生寬

大海涵、賜答字亦兩回、且返賜鄙什壹編。教諭之切潤削之妙、敬服感謝非言之可尽也。 來教云、居恒不喜雌黃、門人來請、

勉強心副。夫以 先生教授應接無遑於見門人、成章之斐且爾、何其不忍。〈堯〉輩屑々之請貶損、盛德以副其意。至于此也、

使人感愧不息。又云、才之麗、立論之卓、持己之極卑、無乃流於「為恭乎」。 先生何出斯言。夫跼足垂耳者、驚駘之常事。

矧 先生於〈堯〉、實為方外一父執、思之又思、猶且恐得不敬之罪。 先生之前言為戲乎。其或仁人失於厚耳。雖然鄉愿

足恭人之所賤惡、若有万一見于此、則 先生規〈堯〉者深婉、而與麗才卓論之語皆 慈愛有為之中也。不敢中心藏之、以

為終身之箴哉。唯其〈堯〉也、人情之不通而昏昧過慮者。抑亦有故聞之、四十宮文卿浪華大塩某、嘗以性命之說致書于 先

生、々々不答而斥、不識有諸。彼大塩者、固浪華聞人、能文能武、其道祖述陽明而稱孔孟之學。其事悻々、其言憤々、其徒數

十人擊劍讀書、各以顏淵李洛居之。而闔城之人許之以其為君子云。不謂、一旦幡然作陳吳之拳、其勢酷暴而烏「合連雞、不耐久霎時潰散。豈能得終其所志者乎。徒啓天下不臣者之心、走妖氛於清平之時、禍之所株連、不為不多焉。惡在其為孔子堯之學也。

於是 先生嚮拒而不許者、可知而已。何其見幾之遠、而奉身之嚴也。昔老泉論安石之姦曰、賢者有不知也。及彼不作不軌之

時、海內業儒者結交通信幾人乎、今而必噬臍、以為被售嗟乎。大塩不軌之事固勿論、而其人則不易得之杰也。與堯輩謗劣庸愚

之質、其間霄壤矣。而不被容於 先生与被容於 先生、必也非利鈍萬劣之故焉。是所以〈堯〉惕然過慮也。竊顧誨之多術、

褒揚猶梁肉、抑下猶藥石。 先生於〈堯〉、梁肉則在、今似少藥石者。〈堯〉学行褊淺、幸由本師教誨又賴 先生靈寵、德

業之長進是冀焉。」只恐孱懦之疾不遂所学矣。伏望從今更賜藥石之多、不独鄙詩痛為駁正之謂矣。〈堯〉以病質居、於眾中共

粥餅共禪誦傍及寺事、一起一臥之間閑忙勤惰、動輒事与志矛盾。其謂之何乎。屈指期年至今猶未得全愈而寺事如旧、疎闕之戾職

是由專賜昭諒。近日那波生東行、遽托簡牘。執筆匆忙、思機百出、不覺叨々謔語、要在陳下情而已。即辰金氣浸杪、 先生

為斯文自重是祈。

侗菴古賀先生絳帳

竺〈古堯〉再拜／（印）（印）

二五一 稽山古堯書簡（古賀侗庵宛、某年五月晦日付）

三〇・二×一二六・二糰、紙継なし、薄茶色料紙。二五〇の後に出されたものか。

即景梅天釀暑。伏以尊候<sup>（平出）</sup>万福。〈堯〉不慧客歲恭奉呈小箋鄙詩、是唯以二十年欽慕之久、恃〈弊師〉有世契之誼故耳。然往歲一詣、文階後、絶闕奉候之敬、負罪極多。輒不自揆執筆吐衷、寔如狂人之為。未知君子之心其如之何。徒恐〈堯〉不肖見拒如楊墨之徒。於是奉書之後、思之惕々望之依々。居無幾何、瑠瑤之報忽至。忙意擬封莊覽十回、辭藻穠麗教諭懇重、使人多年飢渴之思忽愈、千里山斗之望益切矣。乃知君子愛人之至、与彼入芝（？）之脉從而招者万々異焉。〈堯〉踏舞感佩不能已々。所奉鄙詩、論以避才餒無賜。高和。豈其然哉、豈其然哉。又承別卷略賜一電囑何惠加焉。但与〈弊師〉并称其言、如有所優劣然矣。夫師猶如父、々子相比較、豈為子者之心之所安哉。即日、師弟唱和以相資、〈堯〉所不敢也。況師無常而又求諸方外者。唯欲得其采、

驚蹇矜愚蒙之益耳。冀諒鄙懷。前什想応痛為駁正、幸以便賜回、日夜翹企以待之。今又奉呈一卷、是又蕪陋之甚、但得蒙先生之<sup>（平出）</sup>一斤削幸々。數冒浼高明、罪無所道。幸洪量恕之如海之涵也。它若序珍書以副鄙意。炤亮不宜。五月晦

〈古堯〉頓首再拜

侗菴古賀先生絳帳

追外 具昆吾一星聊申芹敬、叱納勿却是冀。

二五二 稽山古堯書簡（古賀〔侗庵〕宛、某年八月二日付）

一九・三×二五〇・二糰、二枚継、画仙紙風。

稗沙門〈古堯〉端肅頓首再拜、奉書大德望古賀老先生函丈。維時金氣漸旺、伏以尊候<sup>（平出）</sup>万祉山斗益高、曷任瞻仰。〈堯〉夙入寺雍髮即知尊大人及 先生辱吾師以方外之契。凡所賜手書佳詠、在側聞諷誦之声。〈堯〉時童訛何知、而私心欽慕東嚮望。風矣。二十時遊方挂錫相之了義寺、明年春夏之交、從其依師赴於江都湯島之法会。〈堯〉竊以為、拜 芝眉遂素願、不可失此時。適得鄉信、本師書中亦曰、此役必往謁兩先生、特寄別簡以為紹介。於是欲以出寺門者數次。但以衆中制嚴、加之職事煩劇。逡巡經

日、百計之余、始得踵其門。至則聞尊大人以一月前某日易簣、先生即襲職云。遂使袖中之書化為延州之劍以呈。時逼日暎、請謁之間、憶慶弔之言幸不幸之事、意為兩路、以待 命無下。

須臾 先生辱見奉 咳珠片時 雅愛之深。〈堯〉雖不及見

尊大人、然其遺貌德望、想見諸 先生体度粹然盎然之上。何其

大幸哉。所德、旅跡置身于法制之圈中、出入甚艱。是日出寺既

晚、不得不過婦、乃意欲數日之後再來、以從容申積愆。既而不

可復得焉。亦何不幸哉。居九旬、再寓相之寺、七年而婦國。於

今僕指為二十一年、顧念往事未曾不嫌恨也。其相之距江都塵三

十里、以之本藩之遠不唯只尺、而七年之間足不為再踵、書不以

奉候問。既得疎慢之罪、矧婦國之後經多歲月乎。抑亦有故、在

彼以法制森嚴業專于禪、在此則以城寺心接龜柄雲駢、乃輔老師

董寺務、亦懼沈痾一年殆將死、故荏苒時序數更。幸 君子寬宏

之襟度、雖多無尤、〈堯〉方寸獨顧之不得不恐而懼。伏冀万賜

饒恕。〈堯〉蚤歲習沙弥規則之外、学外典文章之句說、心竊悅

之如有宿習者。而以非其道不果致志、捨去跋涉雲林、專学禪道

迨今。禪亦不熟文亦不成、年及四十終無有聞。夫子之無如之何

者也。但旧癖未除、在香火勤務人事鞅掌之暇、衝口吟詠縱筆記

杜撰之詩。成許多首、其詞極汎齷、何識詩之為詩乎。為猶賢乎

已耳。今錄呈一卷、伏乞痛為駁正賜回、庶幾瓦礫片々之中得化寸珪者、何惠加焉。但頼弊師多年辱契、与〈堯〉一回蒙垂青、敢以冒浼、幸宥唐突之罪。他若時自玉、以副四方髦士之望、是所專仰祈也。〈堯〉再拜。

外具昆吾壹星、聊效一片葵誠、堯留為榮。

八月十二日

二五三 黄泉無著添狀

一八・三×三七・四種、薄茶色料紙。次の書簡の添狀として、

一緒に贈られた品物の目録を記したものである。黄泉無著（一七七五

—一八三八）は曹洞宗僧侶、文政一一年（一八二八）第一二世

皓台寺住持。印記「雖小菴」は広く取った端余白のやや下部中

央にある。落款印は「黄泉ノ道人印」（黄泉に重捺）。

（印）

謹具

古銅研一面

清磁器十枚

奉申

遙敬

皓台寺黃泉頓首貢（印）

二五四 黃泉無著書簡（古賀侗庵宛、某年六月二日付）

一九・三×（五三・一十六〇・一） 糰、二枚、薄茶色料紙。

替わり目を」で示す。折り本状に畳んだ紙に各面三行に書して  
いる。文中に見える『二十二史反爾錄』は天保四年（一八三三）  
序刊。二五三と同様、端下部中央に印記「阿耨多羅三藐三菩  
提」、落款印「黃泉ノ道人印」（「泉頓」に重捺）。

（印）

余者江湖之一布衣也。幼奉父母之教、遁迹禪門、与鹿豕群焉与  
猿鶴処焉。而藉口於不立文字、未嘗窺前言往行於群籍。雖聞赫々  
東都有賢人君子、未緣掃其門、唯自求吾道之所帰、齡傾知命焉。

近来奉 台教來往此寺、々在市中不能無時修禪定。於是始生誦  
書之志、竊讀左国史漢傍及諸史。其際每遇善惡慶殃出爾反爾、  
最著明者、則謂華竺之不同、儒釈之不一。夏葛冬裘、固不可換  
也。然一水揭厲、一驥玄黃、同文同軌豈必風馬牛哉。遂於諸史  
中錄取感応不忒与吾因果相符合者一百余則、一月四次為村老土

民婉說焉。頃得大清彭希涑所輯感応集、其所志焉其所輯焉、与  
余前後一互出。於是擲卷、自悔誦書之晚也。然彭氏之所漏而余  
之所輯、或有之乃輔之刪之、目曰廿二史反爾錄。方其梓之、將  
得鉅公大人之一語以冠其首、望諸先生者久矣。然郁々大雅之文、  
非山林乞士之所可得。謀諸寓生與人橘將順、々曰、与會遊昌平  
之日、執筆於 先生門下。遂得逃兮山川咫尺不啻之喜也。宜速  
投刺於門下、一承大教兼請序文者礼也。奈何官寺有制、非公事  
則不出山、而愧方外之士不能方外于方外也。茲修尺一、併奉古  
銅硯一面南京磁皿十口、將順代呈諸幃下。幸垂觀覽、異日賜以  
反爾錄序文、則此書為增価。想夫仁人君子不奪匹夫之志也必矣。  
浮囹寒土唐突衣冠、祇恐門人才子責以無狀。臨楮不勝景仰之至。  
主卜（平出）謹奉侗菴古賀先生（平出） 講帷下。

六月廿二日瓊浦皓台寺黃泉頓（印）首拝

二五五 野村篁園詩箋

二四・二×六三・五糰、二枚糰。野村篁園は二八既出。

（一）

夏日陪精里先生有会津侯南芝別邸三首

水園樓閣暑堪陶、自喜陪遊厠俊髦、教樹鳴蟬調玉管、幾竿鮮鯽



落金刀、北窓風透吟衣薄、南浦潮生釣艇高、更待秋涼添筆力、  
重憑画檻賦觀瀾

二五六 友野霞舟詩箋

一館虛澄俯碧灣、望馳帆影去來間、鐘聲近出三緣樹、海色遙涵  
二総山、為是侯園儲水石、似移仙島置区寰、煙雲不必勞描画、

二四・三×三六・六種。友野霞舟（二七九—一八四九）は  
幕府儒官。野村篁園の弟子。

古錦聊収好景還

市城梅後苦炎燂、豈謂園林別有天、野鳥觸簾山影動、池魚避釣

仲夏陪 精里先生遊姫路侯別邸分韻

水痕円、湖嵌巧綴三々逕、芥片閑許二々泉、最是輞川宜夜景、  
貪看微月漾淪漣

晚潮欲上夕陽初、酣賞忘歸樂有余、境靜能來巢樹鳥、波揺時躍  
脱鉤魚、石欄苔蝕在郎井、水閣柳葳裝相居、風檻無塵水簾冷、  
不妨一枕到華胥

野村温未定稿

友瑛挿具

(一)

西尾侯中郷別業分得東字

深園野趣自天工、借賞移較避蘊隆、樹欠画樓瞻遠雪、苻分吟舫

二五七 友野霞舟詩箋

趁涼風、四并応是輕劉子、六勝何曾遜晋公、絶境乃知牛渚近、

二四・三×四八・三種。文中「白藤」は鈴木白藤、幕臣。篁

笛声呼月過橋東

園の詩箋（二五五（二））と同時の作か。

又得従字

一亭幽雅倚長松、茗碗匏尊興味濃、不是朱門叨礼待、安能緑野

季夏十三日陪 白藤 篁園 伺葺諸先生游 西尾侯別業

得過従、兼葭岸断懸危釣、穉榿田澄倒遠峰、耳熱何求醒酒石、

分得園字

半簾涼碧沁吟胸

嫩緑陰濃隔世喧、誰知野趣在名園、釣辺魚戲兼葭渚、犢外人婦

温具

穉榿邨、仄径灣環通短釣、清池屈曲抱涼軒、重期郊墅梅開日、

唵屐來敲月下門

又和篁園先生韻

雪堆芳野築成工、清梵近連肅寺東、亭隔芰荷高下出、舟穿蘆荻  
往來通、林間逕邃迷空翠、園外牆高絕軟紅、不怕炎蒸鑠金石、  
蝦鬚簾捲面樓風

友瑗拜具

二五八 友野霞舟詩箋

二四・四×四九・〇糧。篁園の詩箋（二五五（一））と同時  
の作か。

徂暑初四陪 精里先生遊会津侯別邸二首

久聞侯邸貯清奇、不數梁王雁鴛池、風送潮声回遠浦、日搖簾影  
漾輕漪、海連房綫三千里、閣占春秋十二宜、本擬掃苔題俊句、  
却遭勝景奪詩思

〔十二宜見朝鮮南時韞朝陽閣記中〕

崢嶸飛閣聳臨池、買夏論園莫過茲、輞谷煙霞無俗韻、午橋風月  
有幽期、潛魚頻弄藻間餌、瘦鶴閑窺松下棋、為是物光能滯客、  
不知留賞到斜暉

友瑗拜稿

二五九 友野霞舟詩箋

二四・三×一〇七・一糧、二枚繼。

会津侯朝陽園十二景

双蓮池

兩畔芙蓉花、浮香如可掬、休唱採蓮歌、鴛鴦睡方熟

匹練瀑

天孫七襄機、織出一匹練、半夜風吹落、懸在青山面

聞潮亭

暗潮衝几席、幾回欵枕聽、還疑駕仙鶴、飄拳絕滄溟

映雪館

高館俯林梢、朱欄含白雪、乍恠詩情好、寒光射瘦骨

醉月岡

芳筵飛羽觴、举手招明月、醉來枕石眠、不覺銀蟾沒

白泉橋

石榴鳴環佩、輕風送跳波、橋頭暨支杖、衣上露珠多

春樹堤

十里藏春塢、風輕白雪香、笑殺石家子、枉誇錦障長

秋香園

誰把万黃金、平鋪玉砌陰、東籬新雨後、來醉晚香深

涼風舍

解衣北窓下、高枕傲羲皇、漁邨何處雨、柳外颯生涼

竹裡徑

一逕入幽深、涼陰堪濯熱、水蛩穿竹飛、冷焰時明滅

偃松嶼

霜根蟠孤嶼、蒼龍臥清漣、或恐風雨夜、老鱗飛上天

夕照林

斜照下西山、林光黯將夕、層苔有屐痕、莫是采芝客

友換拜稿

二六〇 齋藤拙堂書簡（古賀侗庵宛、〔天保元年（一八三〇）

某月某日）

一九・八×七六・二種、一九・五×二五・五種の二枚。画仙

紙風布目型押、代赭色刷梅力下絵料紙。替わり目を」で示す。

齋藤拙堂（一七九七—一八六五）は古賀精里の弟子、津藩儒。

文中「文話」は文政一三年（≡天保元年、一八三〇）の刊行で、

侗庵の序がある。

使至拝受手教。具悉福履、亨嘉大慰。馳仰適小恙在体、不能即

作答、開罪実多。謙以文話問世、譬如支道林上座之日、六尺之

身尽付人指斥。属者聞、此書籍伝世間毀誉相半、然須大方家一

二人論始定、今蒙盛論褒獎過当、実為愛助之言、亦足以自信也。

又所賜規正、一々中病、確不可拔、感荷曷已。謙常以為、尽相

非毀固非知己者、尽相称美亦非知己者。唯美其可美非其可非、

是独可信者。今先生之言如此。可不謂真」知己乎。春霖連日、

愁悶無所写、埃疾全瘳、趨謁欲以竭余論。幸終教之。

侗菴先生文几

門生 齋藤謙拜白

二六一 中村嘉田詩箋

二四・七×五四・五種。中村嘉田は一〇〇・一二七既出。文

中「原田維嶽」は復初（一九三既出。引首印「古処」、落款印

「中邨／咸一／士憲」「華／竹堂／主人」。

奉贈（印）侗菴先生

〈謹次其前年寄懷原田維嶽瑤韻〉

寒郷有地出伊人、始信北山能降神、学殖滿腔唯是海、才美隨筆  
悉皆春、龍門日接中原士、斗耀遙隔万里身、野調不閑勞袞鐵、  
肯容攀和自茲頻

卷下 中村威、頓首／（印）（印）

26X/31/1

六点多も玉潤元寔の筆跡である。玉潤元寔は二二七既出。文  
中たびたび出てくる「那波生」は、二二〇既出の徳島藩儒那波  
鶴峰。鶴峰との往復書簡に玉潤とのやりとりも同送されていた  
のである。

二六二 玉潤元寔書簡（古賀侗庵宛、某年八月二八日付）

三〇・六×一〇・五糧、紙継なし。「先生」の語が前行末  
尾を余して文頭に來る場合、平出とすべきかどうか迷うが、文  
中二字アキで記される場合もあるので、末尾が三字分くらいあつ  
ても同様の欠字と見なした。引首印「半偈齋」、落款印「元／寔」

「玉／潤」。

（印）

那波生送致夏五下澣 瑤函、莊誦再三、得審 先生近況。尊  
手脚之患猶未霍然、而余外之症已祛、聊慰調飢之思。更冀、倍  
万撰養、驅去百邪、以至全痊。至禱々々。向所懇乞雪月樓記、  
頃在牀褥中結撰以賜〈寔〉。自聞 先生嬰疾竊以為、專親藥  
裏從事療養、如筆硯之役束之高閣。況於有尊臂之患乎。而今力  
疾驅使毛穎以賜、事出望外。驚喜之余、忙意展覽、快讀教過。  
文章網蘊、語意宛轉、猶如珠之走盤、非見道厚而捫理精、其能  
致然乎。乃知雖疾筆力健在。蓋 先生之文、醇正比昌黎、円  
熟似六一、而至於以〈寔〉之志行、比諸雪月之清白。豈所謂誘  
之而欲其至于是歟、不敢当々々々。而〈吾〉乾毒之教、禪定以  
治心、戒律以勅身、体究鍊磨、乃至洒々落落々、不掛（？）寸怨、  
僅存仏見、法兄猶為塵垢、故有吾心似秋月、護鶯戒如雪、等之  
語、則私心所期願亦不外于是。更以 高文作警策、駸々而進、  
或得到其近似。是 先生之賜也。昔者、韋處厚之盛山、増美  
于昌黎之序、許子善之東園、伝佳于六一之記。今〈吾〉庵雖最  
爾、獲 先生似韓歐之筆、托之以伝攸久而不朽。亦是 先  
生之賜也。受 賜既已多矣。雖長箋累幅、曷能罄謝忱之万一。  
〈寔〉告老後、專潛心禪誦、絶不窺陳編。故作一通短牘、鹵莽

杜撰。既不能修辭，豈能達意乎。幸高明諒之，以無深尤其不逮也。臨啓曷任惶悚。

復上

大儒宗侗庵劉先生（絳帳）

桂月二十八日 積〈元寔〉再拜／（印）（印）

追伴函以紫紵二方之貺，抑何眷注之篤，深銘五中。茲是非儀、二星，非敢擬潤筆、聊表芹忱。叱留勿却甚幸。

二六三 玉潤元寔書簡（古賀侗庵宛、某年九月一二日付）

二九・七×一三九・二種、紙繼なし、薄茶色料紙。文中「林士濟」は某年三月一四日付書簡に出てくる「林惟寧」と同一人物か。引首印「我思／古人」、落款印「積印／元寔」「玉潤／氏」。

（印）

去冬所賜 答教、自那波氏通致。捧読数四、宛如面奉咳珠。忻慰奚翅、所托拙集 大序、稿成見示。如其文辞典贍精妙、固非吾輩可能容喙也。至於其追叙令尊<sup>（平也）</sup>旧事、而委曲則真情愜款、使人切々歎欷矣。唯是拙什蕪陋、無一膺護揚之言、深以慚赧。而今 弁言之賜、実借朽木以善華、裝無塩以錦綺也。幀幪之恩、

永矢不諼。如拙稿、既賜雌黃否。〈寔〉從來乏学殖、恰如荒年窮氓。崑囊 先生之倒屣傾困以賑之、幸諒下衷。〈寔〉於文章、味其体裁、尤甚於詩。唯是賦性蹇劣、且以非其所道耳。然心人需、時有著撰。他日繕写、以欲乞政。吾宗昔有虎閔国師者。学德淵博、元亨中作积書、其余撰述亦不尠。世以為僧中班馬。然物茂卿曰、虎閔素有文名、而応能習熟不立字家教、故文法謬誤頗多。其譏嘲至於如是、矧〈寔〉之庸妄、篇々累椽林瓦缶、不啻多謬誤也。但便得蒙匠石之妙斲、則庶幾乎免世之譏嘲哉。是〈寔〉所仰賴也。弊邑林士濟、向坐伯氏之罪見錮、屏迹在草沢者十余年。頃遇赦得自便。〈寔〉喜甚、衝口賦一絶贈之。云、十年楚水对楓林、恩赦知君此日心、似是殷王曾解網、唵遊自在伴春禽。士濟昔曾侍 絳帳、沐 德教久矣。故敢奉聞近況、且小詩以博一粲耳。去冬得領 答字及序文以來、当函作報、而弊徒稽山、旧痾為虐、臥蓐涉歲。〈寔〉憂々懊惱、不安寢食、無意弄筆翰、故遷延至今。幸勿深尤。渠疾近得小間、茲修蕪牘、分疏疎曠之辰、外具非儀、少旌奉謝之忱。叱納勿却是冀。有景肅殺、万望保綏 尊体、永為学士標榜、下情祝禱之至。上

大儒宗侗庵劉先生（絳帳）

菊月十二日 方外尋知〈元寔〉再拜／（印）（印）

大序稿本并奉返璧。更冀淨写以賜。

上

大儒宗侗庵古賀先生（絳帳）

二六四 玉潤元寔書簡（古賀侗庵宛、某年四月一七日付）

四月十七日 方外辱知〈元寔〉再拜／（印）（印）

三〇・二×一二・七糰、紙繼なし、薄茶色料紙。印記「釈

印／元寔」「玉潤／氏」。

二六五 玉潤元寔書簡（古賀謹堂宛、〔嘉永三年（一八五〇）

二月一四日付）

去冬辱賜 答簡、伴以緑帶一端、謹領 盛賜。〈寔〉否德何以能消受之。感悚々々。因獲悉 文候万吉、浣慰曷已。簡中誨諭

二九・八×二三・八・九糰、二枚繼。「去春年七十九」「今茲昇八裘」とあることから、この年八十歳、すなわち嘉永三年（一

淳切、如其高論、出処之追於〈吾〉 釈家之義、亦何大有逕庭哉。

八五〇）とわかる。引首印「甘露威」、落款印（落款に重捺）「八

看破鄙意、若秦越人隔垣而洞五藏也。何等媮快。夫先生学殖淵

十／老翁」「寔印／玉潤」。

博、文章典麗、為海内碩匠固矣。而書法精妙、蓋冠絶當時云。

雁魚之往来、桃投而瑤報、每得一賤、藏之篋中、以為至宝、不

（印）

啻得陳遵尺牘之榮也。弊徒某旁觀之、欽慕其筆迹秀媚、願得

〈寔〉七十年前在京師俗親家、數謁 精里劉先生。時幼而白癡

先生法帖学之、乃以〈寔〉辱知、托〈寔〉伏乞揮染者久矣。但

不分、菽麦豈能弁之無乎。唯得仰巍々乎一偉人而已矣。後赴阿

恐冒 尊嚴、未肯可之。而頃屢訴不已。故恃 愛、敢以奉洩。

波、出家雜染、稍長雲遊湖海。及踰壯歲、奉侯命滌篆斯寺、時

若講授之暇、為揮如椽以賜、則榮幸莫大焉。或行或草、唯在

憶旧恩、裁尺牘以奉呈。先生不我遐棄、速賜回音。爾來於

高意所簡耳。昔者天竺有僧、數万里求趙文敏書、歸國中宝之。

先生父子、數々雁魚往来、幾乎五十年矣。〈寔〉於 侗庵先生

今愚懇之切亦復如是。伏庶視弊徒猶如 門下小子、允容勿拒。

不識芝眉作何狀、但神交千里耳。側聞遊学博士門下者說、其

冒瀆 威嚴、罪無所遁。梅溽將至、万々 自玉、以副輿頤。

足下容貌、宛髣髴〈吾〉藩侍臣三宅某者。然則瀟洒美少年也。

雖曰參辰杳隔、自如丰彩在只尺。而衰憊老衲、豈復慕安龍之艷

耶。顧夫、儒生之懶、不修威儀、類村学究者亦多矣。不睹堂々

乎張也之風也。唯其思慕之余、言涉不遜、請饒恕焉。又聞、足

下經術文章、恢張父祖之德業。抑亦三世為天下之師儒、偉範儀

規、誰不嚮往焉。〈寔〉雖方外乎業、已辱世契之誼、益愈欲瞻

一家累葉胄矣。美花冠于儒門、而感歎無已也。〈寔〉寄迹不立、

家常事面壁結跏、即寓好文藝、又何足可觀。文也氣象萎爾、詩

也一時蚪鳴、道学俱無成、而再々至老矣。去春年七十九、虛名

之伝、法眷輩猥称遐齡高德、天子特賜大悲妙感禪師之徽号、朝

北闕謁 龍顏、謝恩而退。寵遇之至徒自恐懼踧踖。今茲昇八

表、法門子弟開壽筵也。邦君祝壽老人之画軸、乃探陸所画之名

筆也。闔国縑素、皆為一時之榮矣。昔年蒙 賜紫之拳、既為吾

門極位。今復賜徽号、寵秩之至莫大焉。到此唯是冥目歎下世耳。

尚何外慕所望乎。抑亦 足下有累世之契。於其八表之壽、為

裁雄篇大作、賜祝嘏之言、則實意外慶喜也。非敢所望、聊俾下

情之区々耳。在辰仲春、天氣稍暄。伏以 董帷亨嘉、泰斗日高。

矧方富春秋、才德日新、山聳水涌、不察可知矣。仰祈若時加調

護、益固寿址、以副四海輿望。如〈寔〉 樗櫟之壽、亦曷足言哉。

老夫耄矣、作文不能修辭、杜撰之言、不覺叨咀。万惟高明諒之。

上

大儒宗謹堂劉先生〈文几〉

二月十四日 方外辱知釈〈元寔〉（印）（印）頓首拜

追非儀（二朱金貳星）聊充候敬、幸比納之。〈寔〉有歲傷教首、

写一章以博粲。云、不探經義不跏趺、猶自童心善自娛、歲過

瞿曇昇八表、依然博地一凡夫。言似謙虛而自誇也。老耄之辭、

想応胡盧一場。但竺典有博地凡夫、是下凡之地広多故耳。魯

書有博地衆民之語、蓋博地与衆民之謂乎。人或以博地衆民証

凡夫者、恐非也。諺曰、向釈迦説契経、対孔聖談文字。亦是

不知量之甚矣。応復呵々大笑也。

二六六 玉潤元寔書簡（古賀侗庵宛、（文政四年（一八二二）

三月一四日付）

二九・四×一三八・三種、紙継なし、薄茶色料紙。『精里三

集文彙』は刊記がないが、最も遅い序跋は文政二年（一八一九）

五月のもので、刊行直後の惠贈とすれば本書簡は文政三年（一

八二〇）のものとなるが、むしろ冒頭に言及される「風咳」の

流行が、時期や状況から見て翌四年のダンボ風邪と呼ばれるイ

ンフルエンザのことと推定されるので、成立もその年と見た。

二九〇（五月二八日付伺庵書簡）はこれへの返信であろう。印記「釈印／元寔」「玉潤／氏」。

三月幾望（寔）頓首白、癸春以來寒暄不常、以故風咳流行、自京阪至窮陬、家々無不感冒者、或覆族而病、或十而一二免。聞東武亦然。未審閣下<sup>（平出）</sup>方祉、貴眷各安。千里外、曷堪瞻注。如弊寺緇白七十余人、悉罹此患、独（寔）与（寔）師僅得無恙。

幸勿挂慮。昨歲得手教滿紙、及拜 精里三集之 睨、已捧受訖、謹珍藏焉。宛如寡陋之徒、忽獲師友、何等慶幸。抑 先生之門人義故、充拓於宇内。而施及方外老禿者、非 閣下之汎愛、何能至此。感謝々々。承、欲做白石停雲集、鈔友人詩什為一書、因見徵（寔）之詩。敢不領 命、但近歲百冗如蝟、極乏雅興。

偶作一二、唯是副急塞責耳、何足錄呈。況以砒砒糝瓊瑰、尤非所宜也。幸請諒之。門下生林惟寧、家兄為倉司之屬吏、而近賊過發覺、懼罪亡命、嗣後家產皆所籍沒。惟寧母子、託足無所、伶仃流離、賴以少讀書、僦居野外、作句誦師、僅得餬口。是亦先生之遺沢也。握齷之事敢瀆告者、恐渠久闕奉候之敬、故為分疏之耳。閣下<sup>（平出）</sup>誼高、教辱下存、而每々延緩報答。亦唯寺事紛擾之所致、幸勿罪逋慢。聊作此簡、托藩主東觀之從者、小金（二

星）少表謝敬。此納幸多。嗚乎東西遼窶、見迹長隔。蓬蒿之質、不能一藉直於麻中、唯望咳唾之珠落於九天而已。悠々之思、曷惟其已。自玉不莊。

奉復

大仁宅伺庵古賀君（文案）

方外辱契（元寔）再拜／（印）（印）

二六七 玉潤元寔詩箋

二九・二×六二・三種、薄茶色料紙。『半偈齋稿絶句』（駒澤大学図書館蔵U2228、写本）の七律部分に収める。末尾にある「洞菴」以下が前書で、全文は「博士洞菴劉君書至、恵以葛衣、賦此答謝」、本文は「彩」を「聚」に作る。

（印「南海一珠」）

每依北斗仰 高風、瀛水漫々上国東、猷紆未由逢季子、留衣還憶接韓公、杏壇春滿青衿彩、蓮漏日長香篆空、且喜神交無内外、瑤音幾度托冥鴻

洞菴劉君書至、恵以細葛、賦此奉答謝  
祭正 方外契（寔）玉潤拜／（印「平安／元寔」「大丘／氏」）



## 二六八 小島坦堂詩箋

三〇・八×八一・三種、画仙紙風。小島坦堂は伝不明、詩文集（写本）が国会図書館鶯軒文庫にある。侗庵の弟子。遺稿編纂・上梓のことは『謹堂日誌鈔之一』（斯道文庫蔵）弘化四年（一八四七）二月一日・二日条および翌年正月二九日条に見える。

客歳嘉平念一日、茗水古賀先生（台頭）將鐫先人之遺草、会門弟子宿老之士於艤舟齋、加炳十人而已。（台頭）先生告諸公曰、先人之遺草数十卷、欲談上梓、諸君為我議之。諸公謙讓議不決。  
 〈炳〉在席末、默然無所言、松田迂僊井上順堂両先輩論〈炳〉云、子來前、無避忌諱猷子意所懷、退勿後言。乃同順堂兄進席。〈炳〉不自量罪過、妄意任口吐露狂言。先生宏量汎愛不敢呵叱捨棄妄言、乃委〈炳〉膽当上木之議、即議決焉。  
 〈炳〉久寓居田舎間、距江都凡二十里、衰老殊有微恙、乘車馬冬春夏三時。会於艤舟齋是愚炳之幸榮、不堪欣躍也。  
 謹裁蕪作一首恭奉呈（台頭）先生絳帳下。

御李十年仰寵榮、愚蠢螢雪苦鋤耕、高蓬被棄無光客、蘭菊異芬慰陳生、弟子三千天下滿、遺篇五百宇中鳴、海恩欲報丹心戀、画餅織芥聊表誠

謹乞叱政（台頭）

小島炳再拜敬具

二六九 増田茂彦詩箋

(一) 三〇・七×三九・五種、(二) 三〇・八×二一・〇種、(三) 三一・一×五八・五種、いずれも薄茶色画仙紙風。増田茂彦は不明、謹堂の弟子。包み紙・詩・文（詩序）の三枚から成る。謹堂がロシア使節プチャーチンの応接のため長崎に派遣されたのは嘉永六年（一八五三）一〇月。

(一) 謹奉鄙言／〈門生〉増田茂彦拜

(二) 奉送 謹堂劉先生使長崎

桓桓儀羽出城隈、一道妖氛望勢隤、想見威風加醜虜、魯人遁避不還來

又

離歌一曲不歌哀、斯事古今称快哉、被髮胡人迎道左、伝呼使節  
自朝来

門生 増田彦再拜

(三)

奉送 謹堂劉先生使長崎序

一言以決大事、使天下無外寇之患者、非大賢則不得也、非大勇  
則不能也。蓋我 劉先生其人也。先生知天下事、審天下勢。

朝廷命 先生使接虜使。命下之日、先生召諸生謂之曰、此

行 朝廷命我、我当往而論之、苟有差跌、我又不生還。然則

先生之任重、而社稷安危生民塗炭固係之。先生之任可謂重

矣。先生德高道大、朝廷擢之于衆使往論虜。先生一言彼

心折、氣索不敢為患也。然則 先生果大賢也、果大勇也。先

生之行在近、其從而西者六人、蓋与 先生供患難同禍福、輔翼

先生以贊其成功。其所以報 先生則所以承 將軍也。所以

報 將軍則所以<sup>(台頭)</sup>皇上也。彥不能從以視功烈、徒切望慕之情而

不能絕於懷。於是奉蕪詩、以来字為韻焉。夫考之于古唐、尚書

鄭公將去、韓文公作詩以送之、而韻用來字。蓋其意祝公之成功

速歸来也。彥今倣之、又祝 先生之如鄭公也。先生至之日、

論虜以<sup>(台頭)</sup>皇上至聖 將軍至傑、則醜虜震恐、不敢為患也。吁有

此賊而有此命、有此命而有此行矣。此行係国安危、安危固在乎  
先生焉。非 先生誰能之哉、誰能之哉。

門生 増田彦再拜

二七〇 蒲原素文箋

三〇・八×八三・三種、画仙紙風。蒲原素は不明、謹堂の弟  
子。前者と同じ時のもの、思想は正反对。引首印「探古」、落  
款印「菅原／素印」「字／君行」。

奉送<sup>(台頭)</sup>謹堂古賀<sup>(台頭)</sup>先生赴崎陽序

(印)

孔子曰、才難其不然乎、唐虞之際於斯為盛才。何饒於上世而乏

於下世乎。天之賦才無古今、唯養之有難易也。養之若非學而何。

下世學難、故勉而學之。非養其才、則不足言天下之事也。蓋上

世典籍少、而天下之事亦少、故所究窮不太費力而學成焉。士民

簡朴易制也、故用之家々易齊、用之國々易活、用之天下々々易

平。所謂天下者不過方數千里許耳、而不知塞外万里有何國也。

時非無說天象談地理者、自今見之一掌許大耳。世降時移、書籍

紛出百家之言不一、而其要有三、曰和曰漢曰蘭。此三者具而可

始曰学也。何者一天区中有此一地毯、而万国環附、無上下無終始、同是人类也、同是邦域也。今世水陸路開而無不可通之國、相往相來勢當然也。雖我守吾域而不往、其奈彼之來哉。其來也、心之当如何。互市耶斥攘耶、非能悉彼之情詳彼之形、不可也。其欲悉詳之、非学而何。故学而知此三者、然而可始言天下之事也。近世学之難也若此、故天下之事亦難矣。今兼此三者、而悉詳万国之情形者為誰（この二字補入）。非吾 劉夫子而何。既悉其情形、自吐誠衷而不顧身為誰。非吾 劉夫子而何。所独怪者、美利幹來于浦賀、今又俄羅斯來于崎陽。於此幕府有 命使、各竭其誠。而天下之議紛々、有唱互市者、有唱（この一字補入）斥攘者。劉夫子職為教授官、竊知 幕府欲聞其言。而至于今未知有何議也、將無議耶。有此学有此識、万国為吾胸宇内之物。今此区々美利幹來俄羅斯於制之、豈為無議乎、既有議未發耶。今俄羅斯在于崎陽、美利幹明年春初復來、承旨上下洵々人心不安。當此時、夫子平生誠衷、豈有箝口而默哉。然則 夫子已陳之于 幕府也必矣。然是天下之大事、豈可猥告之于人哉。雖親在子門者所以不知也。今 夫子有 命奉使于崎陽与俄羅斯待接、然則既有其議、上知其誠衷而特有此 命也、無疑也。則相与賀曰、有此学而（この一字補入）

有此言、有此誠衷之心而此擢用之榮。非独 劉門之幸、又非天下之幸哉。〈素〉奮而興曰、三千里外不憚其勞而趨天下之難者、劉夫子也。而從護 夫子之躬者、非吾輩而何。〈素〉請從而往耳。於此請從者多矣。 夫子命〈素〉留守其塾。退而以為、吾之力不足以護 夫子之躬耶、何遭吾而不從。靜此思之、留守之任亦不易。為十人長為百人長、雖衆寡之異、其制之則一也。四方來学于劉門者幾十人、 夫子不棄〈素〉不肖、既命為其長、然則留而守、勉之勵之使各服其業、則〈素〉之職也。雖不得從而亦無所恨也。〈素〉在于草莽之中、夷舶之來不知何故。 夫子之奉使而往又不知何故。然竊考之、不過互市与斥攘耳。此二者孰可孰否、杞人之情亦非無私議也。今 夫子往而勉之而治平無事、使天下解其憂、〈素〉日此之望矣。惜別哽咽不能細陳、黯然只望車塵而拜耳。

〔門人〕蒲原素再拜頓首（印）（印）

二七一 西鼓岳詩箋

二六・二×一九・七糧、「天賜園十二硯之一」と左隅に記す代緒色刷硯下絵あり。西鼓岳（一八〇三—一五七）は侗庵の弟子、佐賀藩多久氏儒。引首印「釣棧」、落款印「五家石／斎主／人」。

(印)

茶溪古賀先生赴長崎、路經北方駅、我偶病不能謁、賦此奉寄

欧巴戰艦大如城、佞信窺窬漫飾情、儒術曩時高閣束、兵論今日  
万人驚、海西來閱山谿險、天下曾敷桃李榮、簞食壺漿何肯顧、  
沿途侯伯通相迎

麟正 西贊再拜(印)

二七二 藤原篤信詩箋

二五・七×一七・三糰、絹本。藤原篤信は不明。引首印「会  
心」、落款印「藤／原」「篤／信」。

(印)

宿世鴻儒標国英、斯文私淑使心傾、驚來幽卷周公夢、不老朋是  
学生(不下脱是字)

奉呈茶溪先生

藤篤信拜具(印)(印)

二七三 稻垣寒翠詩箋

二〇・二×二六・二糰、薄墨・浅葱色刷波濤図下絵あり。稻

垣寒翠は六四既出。引首印「二羊」、落款印「美作／稻垣／茂松」。

(印)

偶有鴻書投病夫、開封欲讀氣先蘇、自同螢雪一窓学、長仰箕裘  
三世模、当日禰衡驚列坐、如今阮籍哭窮途、漫遊十歲都為夢、  
可耐龍鍾輾下駒 奉次韻茶溪劉先生見贈

稻垣松拜(印)

二七四 江口信成詩箋

二四・七×四四・七糰、薄茶色画仙紙風。江口信成は不明。  
岡田華陽『葉方分量考』(文化九年序刊)の校訂者「江口信成  
子孟義」とはやや時代が異なるか。引首印「成趣園」、落款印「江  
印／信成」「新／永」。

(印)

茶溪先生及波多野君木公若林君子恂臼杵君維翰足助君完壁

惠臨、喜賦

不厭泥途雨後天、泮宮高士此蹇然、清標瀟灑超千古、人道竹林  
欠二賢

同前呈茶溪先生<sup>(白頭)</sup>

彩筆翻々何煥乎、鳳毛累世信醇儒、妙齡字術驚小目、行見英声播海隅

江口〈信成〉再拜／（印）（印）

二七五 望月毅軒書簡（古賀謹堂宛、日付なし）

三〇・八×八五・〇 糧、画仙紙風。望月毅軒（一八一八—一七八）は学問所儒者。

前日淋浪之余、齒頰猶香。高作十五首謹嗣玉音呈政。嗚乎做

官太不易事。往来多言語多、接熱鬧人時多。以此三多掉弄一生、

五臟宰官殆擔当不住矣。雖然、人生有煩惱必有解脱。他年安知

其無將婦之日哉、果有將婦之日。蓋茅一把、門牡不施。方塘一

鑑、養縮項撥尾諸小魚、沿岸種刺桐毛竹數本。舍外則片石孤雲、

室中則一榻一枕。方豆蔻可嚼春甕欲泣、邀同二三冷淡人对酌半

日。独梭絹上、追步茗溪輞川遺型、写秋江把釣圖、学瘦金小楷、

題武功派新句于其旁耳。熱時朗誦小山三兩章、賓主相忘乎醉鄉

中、則僕之生平已得阿那含矣。独所恨、天長水遠不得奉清教如

今日耳。前日所懇之高蹟、不知何日領賜。果得領賜、他年山中

相對一堂之上、將有慰天長水遠之憂者也。臨書仰願之至、伏祈

照亮。不宣

望月〈綱〉頓首

茶溪先生〈台下〉

二七六 白杵横波詩箋

三一・二×一〇一・五 糧、画仙紙風。白杵横波（一八〇六—一六四）は昌平饗に学び、長府藩儒となる。引首印「■前／粟往」、

落款印（落款に重捺）「白杵／張印」「景／張氏」。

赤馬関客館奉送（印）茶溪先生奉使之長崎<sup>(白頭)</sup>

嘉永六年歲癸丑、夷船東西来海口、就中欧虜尤狡黠、抛锚崎陽

淹留久、万人奔命羽書馳、沿海重修烽火台、竭来廟筭決筆戰、

安得陳王八斗才、文鋒以刃則干城、築壇<sup>(築壇)</sup>特命 劉先生、劉

家三世文章伯、已使光焰及八紘、輕裝驚夜趁飛鳥、風霜臣節逢

歲杪、旌旂直下赤馬関、迎謁不覺衣顛倒、憶昔負笈入門時、

先生妙齡愛我痴、短歌長章時賡和、殿山墨水幾追隨、別来屈指

二十載、壯心灰冷野情在、先生下交素勤々、杯酒尚以老友待、

今夕何夕此盞簪、一刻豈較值千金、惟覺歡筵如夢寐、要裁新詞

表寸心、寸心未尽天將曙、脩述幸從醉裏去、虜勢縱令如大蛇、

到頭豈無壯士怒、不須金刀試一割、形管応畏於鉄鉞、想起当年終不雲、客而請綏使南越

白桦(張)(印)(印)再拜

26X/33/1

文化八年(一八一四)对馬において行われた朝鮮通信使の接迎のため派遣された古賀精里への送別詩を集める。

二七七 谷晋詩箋

一六・七×三二・七糶、画仙紙風、代赭色刷七宝散らし下絵料紙。谷晋は不明。

奉送劉夫子<sup>(台頭)</sup>奉使赴对州

城頭柳色暁煙開、万里映春旌旂催、玉帛千秋叔孫礼、文章一代馬卿才、都門芳草驪駒去、海外薰風彩鷁来、夫子何時休跋涉、更教吾党再追陪

谷晋再拜

二七八 丸川松隱詩箋

一八・一×二五・七糶、画仙紙風、右隅に綠色刷の柳と家並の図のある料紙。丸川松隱(一七五八—一八三二)は備中新見藩儒。大坂時代の精里と交流があった。引首印「帰厚」、落款印「丸川／茂延」「千秋／氏」。

恭送古賀老先生<sup>(台頭)</sup>赴对馬州迎接朝鮮聘使(印)

万雉金城西海傍、鴻臚館就有輝光、箕国宗猷視帰順、周家文物<sup>(台頭)</sup>寵来<sup>(台頭)</sup>王、天銜 龍節彩雲動、花擁 霓旌白日長、郢歌原目称難和、唱及鹿鳴驚異方

丸川茂延頓首拜／(印)(印)

二七九 福田昇詩箋

三〇・四×三九・〇糶、具引料紙のため墨の乗りが悪い。一行目欠落。福田昇は不明。印記「■」。

「奉送」古賀白雅先生<sup>(台頭)</sup>

四海文章拜老師、大思 明論似傾葵、那図萍合余春恨、奉 謁方遭奉 別時

福田昇拜稿(印)

二八〇 姫井桃源詩箋

二九・六×三一・八糶、画仙紙風。姫井桃源（一七五〇—  
八一八）は岡山藩儒。引首印「硜硜」、落款印「元／詰一仲／明」

（陰刻、中央に区切り線が入っている）。

（印）

精里古賀先生迎接韓客於對馬、路過我、賦此奉送

百載尋盟對馬州、賢勞跋涉奈離愁、交隣元是樂天事、微會豈  
非經國謀、殘雪已踰函谷路、薰風応返釜山舟、因 君欲問鷄  
林俗、箕子流風今在不

姫井元詰拜書／（印）

二八一 安元節原詩箋

二三・九×三七・七糶、画仙紙風（あるいは杉原打紙か）。

安元節原（一七九二—一八三五）は久留米藩儒。印記（凱に重  
捺）「三善／真凱」。

二月千山花若雪、東風嫋々吹旌節、馬鳥天遙紫海西、皇華一曲

送君別（平出）

掃臥亭衆集奉送精里先生之對州（白頭）（得別字）

安元（凱）（印）頓首拜

二八二 武内確齋詩箋

三〇・二×五〇・九糶。武内確齋（一七六八—一八二六）は  
大坂の詩人、書家。初行欠落か。印記「温其／之印」「子玉／父」。

「（平出）」精里劉先生赴對州

千騎東方授節旄、皇華寵送見恩褒、鷄林旧好星槎遠、鰲浦新營  
賓館高、氣圧三韓辰馬弁、裔伝兩漢卯金刀、菅裴何但今時會、  
唱和重來有鳳毛（先生多子、皆有濟美之稱、故引用二菅二裴事）

武温其九拜／（印）（印）

二八三 樋俊民詩箋

二六・六×四一・四糶、薄茶色料紙。樋俊民は不明。精里門  
の幕臣に樋口省三郎という人物がいるが、それと同一人物か。

引首印「信而好古」、落款印「俊／民」「字／彦章／印」。

(印)

奉送古賀精里先生趣对州

文雄載筆出江城、車馬如雲此送行、風韻久推唐孟浩、藻才僭称  
漢長卿、中原諸哲允心醉、異域佳賓誰目成、万里山川君努力、  
愁顔數日望帰旌

樋俊民拜具／(印) (印)

二八四 滕彦詩箋

二九・一×五〇・〇種、薄茶色画仙紙風。滕彦は不明、内容  
からすると佐賀藩またはその支藩の人物か。

精里先生会韓使於对州、竣事而帰路過佐嘉、賦奉呈

玉節新従対馬還、留飲十日動郷関、豈陳巴調当文贄、童子唯知

仰泰山

滕彦

二八五 月形鶴窠詩箋

二八・六×五三・五種、薄茶色料紙。月形鶴窠(一七五七―  
一八四二)は福岡藩儒。前書によれば、安元凱の詩箋と同時の

ものとわかる。辛未は文化八年(二八一二)。引首印「鶴鶴窠」、  
落款印「月形／質」「君／璞」。

(印)

精里先生奉命赴对州接韓聘使、開筵留別諸友、席上分黯然

銷魂唯別而已八字為韻、余亦辱陪、拈已字賦以奉呈送

藉々関西 老夫子、超遷知目此行〔役〕ミセケチ文末より補入

始、懐柔承 旨客如婦、明信司盟神所祉、彩筆憑凌馬島雲、清

詩翻倒鴨江水、由来一視播 仁恩、驪宴不煩論彼已

〔右并折斧政〕

辛未春日 月形(質) 頓首拜／(印) (印)

二八六 榊原草沢詩箋

二九・二×六一・五種、薄茶色画仙紙風。榊原草沢(?!?)

は榊原篁洲の曾孫、菊池衡岳の弟子、和歌山藩儒。

五千里外海西陲、使節遙望対馬州、辺境尋盟従省約、賓亭議礼

慎心酬、三韓古我馳羊犬、七道今時貢虎彪、皇統文明非彼比、

大儒辞命見風猷



右奉送精里先生(白頭)之対州接韓使

榑原敬文

恭奉送古賀精里先生(白頭)朝鮮聘使于対馬州伏呈侍史足下

二八七 頼景讓詩箋

日出扶桑照樂浪、洋々威德被遐荒、釜津來聘尋盟好、対馬行迎  
受瑞璋、祇役三春千里遠、(平出)儒宗当代万夫望、鶴書往昔召(平也)江府、

二九・〇×三〇・五糶、薄茶色画仙紙風。頼景讓(一七九〇

錦繡即今過故郷、蘭蕙盈庭応献笑、英賢陪駕弄成章、鴻臚館上

一八一五)は春風の長男。引首印「静観」、落款印「頼印／

星槎客、仰見煌々大国光

元鼎」「不遠／復」。

尾張村瀬(誨輔)頓首再拜

(印)

鄂正

帰臥堂集奉送精里先生(平出)対州接韓使分得華字

57X/46/2

叙別琴尊侍 絳紗、使星遙指海西涯、談経簡易阮三語、作賦警

卷子本二軸。改装海松鳳凰丸散らし唐花唐草緞子表紙、牙軸、

適温八又、手箱龍蛇草 朝制、胸儲兵甲奉皇華、散材我不勝羈

表紙三一・〇×二一・八糶(精里)、三〇・〇×二一・六糶(侗

綫、徒憶隨 君属後車

庵)、外題無辺金箔題簽墨書「精里先生尺牘」「侗庵先生尺牘」、

頼元鼎拜(印)(印)

軸長三三・六糶(精里) 三二・七糶(侗庵)、見返茶色斐紙金

砂子散らし。箱書「古賀精里先生遺墨」玉潤和尚宛尺牘卷」。

二八八 村瀬石庵詩箋

古賀家旧蔵資料とは別に収蔵されたものである。

二八・五×七六・四糶、画仙紙風。村瀬石庵(一七八一—

二八九 古賀精里書簡(玉潤元寔宛、閏八月一九日付)

八五六)はもと尾張藩士、侗庵の弟子で幕府儒官、田辺氏養子

二五・一×一六・〇糶、茶色料紙、代赭色刷有界六行(二〇・

となる。

二〇)となる。

六×一三・〇(糧)の野紙七枚(左下に漢数字の通し番号墨書あり、ただし四枚目と七枚目なし)を用いて記す。替わり目を「示す。閏八月があつたのは文化二年または一三年。印記「古賀／樸」「淳／風氏」。

夏間領蘭訊、獲聞 法体神相起居万福状、并損患名産足衣五事、感慰駢至。尊親翁疾遂不起、深以惋惜。尊師孝思之篤、罹茲凶憫、伏望節哀 保重。初翁生事屯落、零丁流離、書來報知、故旧之情殆不能為懷。嗣後享 尊師迎養、亦書託其安」適、則為之喜躍、亟作答賀之矣。想或塵 清覽、夫風木之恨、蒼天罔極、但其老境有所聊賴、伸眉放懷、得以瞑目、則不可不謂末路之清福。樸既悲、翁亦以此自積。蓋積門養親、如法雲慈覺紀伝所載、如吾深草元政上人為經流孝子。今 尊師所行、或可以追芳」躅、天下之善一也、孰不嘉尚。辱示近詩二首。伏誦琅々、方外又有皓靈矣。書尾推獎之語、則不然也。樸百事不及人、其於詞藝尤非所長、獨僻性惡、傲吠虛之犬。是以、其所為率背時調、聊以自娛云爾。豈足以挂能者之齒牙哉。至於所論近歲文辭之弊、則亦所嘗」仰屋而浩歎。大抵邦儒不能自立脚跟、常依傍西人之新様而画葫蘆。其取捨毀譽、皆出雷同、始非由己郷也。

物茂卿輩以嘉隆七子為標的、詩則青雲白雪、文則漢上套語、陳々相因、固可厭惡。然猶有氣格体裁之近似、欲精其業者、非多說書則不能也。」近歲尽翻其窠臼、變而為宋元為袁徐為鍾譚為李漁袁枚之徒。鍾譚之寡陋僻謬、在當時既為儒林嗤。今取其每下者奉以為大宗師、發其余蘖者猶將承之、則張打油胡釘鉸之所恥而弗為淺俗鄙褻之極。文雅之道掃地矣。特以其主張天籟神情不師古人、」故世之空疎者、便之隨而和者、如水就下。有時望者、不能救正、或反同流、合汗推波助瀾、抑何心歟。不才如樸、僅未至淪胥以溺耳、無復能為、而叨冒在此愧、何可言。然物窮則變、廻狂瀾於既倒、世必有其人矣。是樸之所傾耳而聽拭目而待也。欲報腆儀、而無所有、適得」聚頭扇一篋、物雖行濫、拜納表忱、統冀 照鑑。

玉潤和尚獅座

〔閏八月十九日〕古賀樸拜復／(印) (印)

二九〇 古賀何庵書簡(玉潤元寔宛、某年五月二八日付)

二四・二×一九六・四糧、四枚繼、茶色料紙。二六六(文政四年(一八二一))三月一四日付書簡)への返信。文中「走」は『文選』などに見える、一人称の卑称。印記「古賀／煜印」

「暉卿／氏」。

枉三月中浣手教、茲審 尊体勝常與居和適狀、奚勝雀抃。承、斯春以來寒疾大行京以西南、無一家能免。貴利七十余口亦咸侵染、而尊師与老尊師(平也)歸然免於患。豈非天相吉人邪。東武景象全同京阪。属者聞、已覃被北海之浜。二豎之流風殆速於置郵伝命。都下疫勢中衰、而頃又復動、雖不至往日之熾然、罹患者如沢之蕉。相伝、此回疫鬼好陵虐兒子。走膝下三兒累々嬰疾、似世人所言非虛。走近歲頗事衛生、較覺輕健。暮春風咳之行、幸而獲免。乃至本月初吉、忽然感冒岑々痛、飯草根木皮之力、纔得霍然。豈若古所謂雖大男子裁如嬰兒者。故遭虐兒子之疫鬼、首先為所備犯邪。一笑一咲。因向呈精里三集、懇謝朶々、非所敢当。抑以尊師与先人、相於之深也、今乃賜覽、親以度其心尽其底蘊、九原之下其懷感何如也。所請盛製以入如蘭集者、不蒙聽允、奚免歎嘆。從來如蘭之選、曾不如白石停雲之謹嚴、釘鉸打油、蛇神牛鬼、一齊收入。以尊師(平也)麗藻列於其間、無異於老子韓非同佖。華牘硃硃瓊瑤之喻、雖出於為恭、全与事情反。既不見允、惡敢強自以增冒瀆。但其美、則不可不一弁耳。林生奇禍良可駭愕、若出於自作之孽、其復何言。乃為同氣所株連、玉石

俱焚、則尤可為心惻。見惠方金二事、却之為不恭、謹茲拜登、多謝奚罄。白布壹端貢之座下、匪報也。叱存是祈。貴鄉那波生遇敝塾十年、今茲孟夏方始告歸。之子多聞牢記、文藻大可觀、蓋才本不凡、非走父子有陶鑄之力、但孤峭自守、不好表襮。故人不甚知渠、忻慕尊師有年、他日請教、幸垂伯樂之一眄、則走亦受賜多矣。維時薄暑、万惟自重、以副遐憶。不至

玉潤上人獅子座下

五月下浣八日

劉煜再拜／(印)(印)